
悪魔な男爵 第一部

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔な男爵 第一部

【Nコード】

N3372F

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

人間から悪魔になり英雄として崇められている飛天夜叉王丸。彼の周りには常に大勢の妻たちと従者がいた。この物語は飛天夜叉王丸の生涯を書き記したものである。少し大人な表現が出たり最後までって所もあるので、自主規制でお願いします。

序章：飛天夜叉王丸（前書き）

作者、ドラキュラです。

この物語は処女作である月愛づる姫に続く二番目に書いた作品です。かなり長い物語ですので、ご容赦ください。

それから拳銃やライフル、車などの事も載るので、悪魔なのにという意識は持ちつつ読んで下さい。

序章：飛天夜叉王丸

ここは魔界の首都であり悪魔たちの総本山である万魔殿にそびえ立つ巨大な城、魔天楼にある謁見の間。

帝王が座る事を許された王座に座るのは七つの大罪、“暴食”の化身であり地獄帝国皇帝のベルゼブル。

その左右には七つの大罪と数人の王族が座り周りを黒と灰銀で飾られた軍服に身を包んだ近衛兵が直立不動で立っていた。

王座から見下ろされる形で片膝を着く一人の男がいた。

黒一色の服に身を包み顔を下げ男にベルゼブルは静かに威厳の籠った口調で喋り始めた。

「……地獄帝国第二皇子、飛天夜叉王丸。貴様にバルト制圧を命ずる」

「……御意」

ベルゼブルの命令に飛天夜叉王丸と呼ばれた男は片膝を着いたまま頭を垂れた。

「……少々お待ち下さい。陛下」

横槍を入れる人物が現われた。

「……何の用だ。ヘルブライ男爵」

ベルゼブルは明らかに不快な表情をした。

この男、ヘルブライ男爵は五等爵の中でも最下位の男爵の位を持つ男であり人間出身の夜叉王丸を“人間風情”と蔑んでいる純血悪魔の筆頭でもある。

五等爵とは公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵を意味し上から順に位が高く与えられる領土も権力も高い。

この他にも公爵の上に大公、伯爵の上に辺境伯爵などがあり男爵の下には準男爵や騎士などがあるがこの二つは貴族として認められていない。

ヘルブライの爵位である男爵は貴族でも最下位であり与えられる権力も領土も少なく本来なら謁見の間に現われるのも許されない。

異例の才能や強力な後ろ盾を持った者でない限り王族や皇帝の決めた事に口を出すなど出来ない。

だが、ヘルブライ男爵の場合は他の男爵と違い絶大な権力を誇っている。

彼は北方防衛と呼ばれる軍に所属している。

この軍は天界との戦争の時には真つ先に前線基地である北を死守するため軍事力も他の地方軍よりも極めて高く権力も絶大だ。

北方防衛軍では爵位や後ろ盾などより実力が物を言うのだが、ヘルブライ男爵の場合は決して優れた軍人ではない。

だが、彼は初代皇帝であるサタンの息子である第一皇子のサタナエルの側近を務めている事から軍でも大きな顔で歩いている。

いかに実力社会の軍でも皇子であるサタナエルの側近を務めるヘルブライを蔑ろには出来なかった。

その地位を利用して重税を強いたり上級貴族の令嬢を妾にしたりと貴族、軍の中で彼を嫌う者は大多数おり人間出身の夜叉王丸に好意を抱く貴族が増えている。

「はっ。私は陛下が夜叉王丸に命じたバルト制圧は北方防衛幹部として反対です」

ヘルブライ男爵は膝を着かずに関々しくも第二皇子である夜叉王丸を蔑んだ眼差しで見下しながら口を開いた。

「このような“下賤な人間風情”の悪魔が天界の領土であるバルトを占領できる訳がありません。それに、こ奴の軍で果たして強硬な要塞として名高いバルトを制圧するとは思えません」

「・・・・・・・・・・」

夜叉王丸は無表情で頭を垂れたまま片膝を着いたままだった。

バルトとは天界と魔界の境界線に立つ天界側の要塞で周りを山や崖で囲まれた天然の要塞として名高く、ここを占領すれば戦争でも有利になれる。

「ヘルブライ。仮にも現皇帝であらされるベルゼブル様の息子であ

る夜叉王丸殿を蔑む言葉、許される事ではないぞ」

北を守護する王族のビレトは鷹のように鋭い蒼い眼差しでヘルブライ男爵を睨んだ。

「私はサタナエル様の意見を口で言っただけです」

上官とも言えるビレトの叱咤にも関わらずヘルブライ男爵は平然としていた。

「人間」。早くこの場から消える。ここは貴様のような屑が居る場所ではない」

ヘルブライ男爵の蔑みの言葉を言われても夜叉王丸は無表情だった。

音もなく立ち上がると夜叉王丸はベルゼブル達に一礼するとヘルブライ男爵には一瞥もせずに見えの間を去って行った。

その背中は威風堂々として黒の服は王者の風格さえも漂わせて引き立たせていたが、どこか悲哀した背中にも見えた。

「ふんっ。人間風情が死んでしまえ」

「ヘルブライ!!!」

ビレトが玉座から立ち上り腰の剣に手を掛けるのを見てヘルブライは見切りをつけたように一礼して見の間から立ち去った。

「夜叉王丸様!!!」

謁見の間を出て廊下を歩いていると青いロングドレスを身に付けた蒼色の髪をした少女が走り寄って来た。

歳はまだ二十歳に満ちていない年頃の娘で尻まで伸びた蒼色の髪と対照的に瞳の色は赤いルビーだった。

「リリム。どうした？走って来て」

夜叉王丸は息を切らす義妹を見下ろした。

初代皇帝であり夜叉王丸の養父であるサタンには妻のリリスとの間に二人ほど子供がいる。

長男で夜叉王丸を殺そうとしているヘルブライ男爵の主人であるサタナエル。

もう一人は長女であるリリムだ。

リリムの方は夜叉王丸を慕っていてサタナエルとは仲が悪い。

「バルトに行くって本当ですか？」

切羽詰まった口調で尋ねるリリム。

「ん？ああ。落として来いって言われたからな」

近所の店に買い物に行くような軽い口調で答えた。

「そんな無茶です！！」

悲鳴に近い声でリリムは叫んだ。

「無茶かどうかはやらないと分からないさ」

ポンポンとリリムの頭を叩く夜叉王丸。

「……………」

リリムは何も言えなかった。

この義兄は言ったら必ずやる有言実行者だ。

「……………死なないで下さい」

ポツリと言った言葉は夜叉王丸の耳に入ったか分からない内にリリムは背を向けて走り去った。

「……………」

夜叉王丸は何も言わずに黙ってリリムの後ろ姿を見ていた。

序章：飛天夜叉王丸（後書き）

夜叉王丸のいる魔界では地獄帝国という一つの国になっています。皇帝が頂点で王族、大臣、総長、議長など地獄会議と呼ばれるものもあり秘密警察まであるという人間とさほど変わらない国という設定です。

第一章：最果ての地

城を後にした夜叉王丸は魔界の最果ての地であるバラテへとユニコーンに乗って向かった。

バラテには魔獣などが生息して軍でさえも足を踏み入れるのを避けている場所が夜叉王丸の住んでいる場所である。

以前は城に住んでいたが人間出身であるためサタナエルなど純血を重んじる悪魔たちに連日のように暗殺されそうになった事からバルトに移り住んだ。

現在、バルトに住んでいるのは夜叉王丸とその軍団、風の翼に所属する兵士だけである。

軍団と言っても名ばかりで兵士の全員が元重罪人で装備も貧弱で兵数も僅か二千人と少ない。

魔術師も居なければ軍医さえも居ないという軍団であるため人間であった夜叉王丸の知識を活かして木砲など資金が無くても作れる兵器を作り戦っている。

ヘルブライ男爵などからは弱小軍団と言われているが、獅子の如く勇敢に戦う事で他の軍団からは一目置かれている。

ユニコーンに乗りながら夜叉王丸は人工的に作った道を進んで先にある大きな洞窟に入った。

中に入ると馬小屋がありユニコーンを馬小屋に入れると隣にある部

屋へと中に入った。

「よお。飛天」

部屋に入ると三人用のソファーに大きな身体を預けてウオツカを瓶のままラツパ飲みする男に出くわした。

「よおう。ダハーカ」

夜叉王丸は無表情から砕けた顔になって男、ダハーカの傍にあった一人用の椅子に座った。

ダハーカは夜叉王丸の軍団である風の翼の奇襲部隊を務める隊長で夜叉王丸の相棒でもある。

「どうだった？久し振りに城に召集されて？」

「どうもこうもヘルブライの野郎が出て来て最悪だった」

夜叉王丸は黒のトレンチコートに手を入れて日本産の煙草、セブンスターを口に銜えた。

「またあのムカつく野郎が現われたんですか？」

ダハーカの後ろで黒い執事服を着た男とチェスをする腰まで伸びた茶色の髪を三つ編みにした青年が夜叉王丸に話しかけてきた。

彼の名前はゼオン・エルヴィン・ハンニバル。

風の翼の副長を務める元スラム街出身の悪魔で冥界の牢獄に閉じ込

められていた所を夜叉王丸に助けられ類い稀なる指揮能力から副長に任命された。

ゼオンとチエスをしている相手は風の翼の参謀を務めるヨルムンガルド。

夜叉王丸に仕える執事としても活躍していて人柄も良いのだが、平気な顔で毒舌を吐く事で有名だ。

「ああ。俺のような人間風情にバルト制圧は無理だと言われた」

口に銜えたセブンスターをジッポ^{タイコイス}ロフティクロスSVで火を点けながら夜叉王丸は苦笑した。

このジッポライターは5面に、V刃彫刻、全コーナーにリユーター彫刻、裏面にダイヤ彫り、表面にはフランス王国の紋章であるユリのモチーフの十字架クロスをNC彫刻、十字架クロス中心部分にはパワーストーンを嵌め込み気高さの中に力強さを秘めた逸品のZIPPOライターだ。

「いつそのこと殺したらどうです?」

さらりと恐ろしい事を口走りながら盤上から眼を放さずに白のビシヨップを動かすヨルムンガルド。

「チエックです」

「げっ」

ゼオンは焦った表情を見せてキングを動かした。

「そつちに逃げるのですか？それならこれで、チェックメイトです」
ナイトを動かしてヨルムンガルドは右目に填めたモークルのずれを直した。

「くそつ！！また負けたー」

ゼオンは悔しそうに唇を噛んだ。

「盤上での戦争では負け続きですね」

勝ち誇る笑みを浮かべるヨルムンガルド。

「何だ。またゼオンの負けか」

「やれやれ。これで何百敗戦したんだよ」

部屋の更に奥から出てきたのはダハーカよりも小柄だが、それでも大きな体格の良い男と通常の犬よりも更に大きな黒い犬いや狼だった。

大きな男は茨木童子で狼の方はフェンリル。

二人とも風の翼で砲撃と突撃部隊の隊長であり夜叉王丸の頼れる仲間である。

「ちょうど良い。お前らに先に伝えておく」

夜叉王丸は紫煙を吐いて灰を簡素に作られたテーブルの上にあった

灰皿に捨てた。

「バルトを制圧するようにベルゼブルから言われた」

「あの要塞か。厄介だな」

茨木童子はコーヒー豆を手動ミルに入れて挽き始めながら喋った。

「ああ。まだ詳しい事は分からないが、お前とダハーカの部隊が役立つと思うから頼む」

短くなったセブンスターを灰皿の底に押し付けて火を揉み消しながら夜叉王丸はダハーカと茨木童子を見た。

「了解した」

ダハーカはウォッカの瓶を天井に向けて上げ茨木童子は入れたコーヒーを持って頷いた。

「それを聞いて安心した」

夜叉王丸は椅子から立ち上がり部屋を出て自室に向かった。

自室に戻ると小さな声で名前を呼んだ。

「・・・鶴」

何時の間に現われたのか分からない内に夜叉王丸の前に全身を黒の服に身を包み黒のスカーフで顔半分を隠した男が現われた。

「…………お呼びでしょうか？」

鶴と呼ばれた男はスカーフを外して片膝を着いた。

スカーフを外すと右目の刀傷が鮮明に浮かび上がった。

この鶴は夜叉王丸が人間界のとある場所で記憶を失った状態で見つけて手元で面倒を見ていたので恩を感じたのか夜叉王丸の影として裏で密風部隊と呼ばれる敵の情報収集から暗殺を手掛ける部隊を指揮して夜叉王丸を助けている。

「知っているだろうがバルトを制圧するように命令された」

「…………はっ」

鶴は無表情で頭を垂れた。

「密風部隊を連れてバルトの情報を集めてくれ」

「この身を骨にしても必ず役に立つ情報を得て参ります」

「頼んだぞ。だが、死ぬような真似はするな」

「……………御意」

夜叉王丸の言葉に鶴は一瞬だけ嬉しそうな表情になったが直ぐに無表情に戻った。

「…………気を付けて行け」

鶴はスカーフを戻すと、もう一度だけ夜叉王丸に一礼して音もなく姿を消した。

鶴が姿を消すと夜叉王丸は簡素なベッドに身体を沈めると金色の瞳を閉じた。

『……天然の要塞バルト、か。落とすのは難しいな』

心の中で不安な気持ちになりながら夜叉王丸は深い眠りへと旅立った。

第一章：最果ての地（後書き）

夜叉王丸には頼れる仲間が居るからこそ人間出身であるというハンデーを超えて生きている。

この仲間達の物語もいつか書きたいと思っています。

第二章：侵攻開始

三日でバルト戦の準備を整えた夜叉王丸の軍団は早朝の内にバラテを出発した。

進行ルートとしては遠回りだが東から山道を伝って海を船で越えてからバルトに侵攻する事にした。

理由としては何度か戦場に赴く度にヘルブライ男爵やサタナエルの邪魔をされた為だ。

険しい山道を超えて、やっとの思いで海へと出た風の翼を地獄帝国の海軍と空軍が出迎えた。

「よお。飛天」

夜叉王丸の前に現われたのは紺色のフロック式軍服に身を包んだ地獄帝国海軍総督、リヴァイアサンと空軍將軍のフォカロルだった。

元はサタナエルの派閥に所属していたが夜叉王丸の器の広さに感心して酒飲み友達として仲良くしている。

「リヴァンにフォカロルか。どうした？軍艦と飛竜なんて引っ張って来て」

港町の者は何隻もの軍艦と大量の武装した飛竜を見て驚いていた。

「陛下からお前をバルトまで護衛しろと命令された」

「ベルゼブルが？」

「ああ。お前なら山道を越えて海を渡ってバルトに入ると陛下が予想して俺とフォカロールに命令を下した」

「相変わらず情報収集が得意な義親父だ」

夜叉王丸は養父の素早い情報収集力に舌を回した。

「実際お前の動きは強ち間違いではないぞ。参道でヘルブライの野郎が軍を率いて待ち伏せしてる」

「それから、サタナエルの空軍が海の方でも待ち伏せしていると情報が入ったからフォカロールも追加された訳だ」

豪快に笑うリヴァイアサンに夜叉王丸は海の似合う男だと思った。

「まあ、そついう訳だから早く乗れ」

「分かった」

夜叉王丸はゼオン達に軍艦に乗るように促してリヴァイアサンの軍艦に乗った。

「よおし。野郎ども！出港だ！錨を上げろ！？」

「飛竜に乗り軍艦を護衛するぞ！！」

海軍と空軍の兵士は、それぞれ軍艦、飛竜に乗って準備を始めた。

およそ三分で準備を済ませると港を離れてバルトへと向かった。

リヴァイアサンの指揮する軍艦に乗った夜叉王丸は部隊長を集めて作戦会議を開いた。

部隊長を務める彼らは通称を風の13将と呼ばれていて夜叉王丸の側近を務め上に七魔将がいる。

「鶴の掴んだ情報によればバルトは崖を背にした形の要塞で城壁も二重になっていているらしい」

「壁が二重となると、俺の部隊で突き破れるか問題だな」

茨木童子は神妙な眼差しをした。

「侵入ルートは？」

ダハーカが日本製の煙草であるジョーカーを吸いながら夜叉王丸に尋ねた。

「崖から砲撃して壁を壊しつつ弓弩部隊の援護射撃を受けながら突撃部隊が城の中に入る手で行くのが良いんじゃないか」

「いや。それよりも戦車、騎兵部隊を正面に向けて敵の注意を逸らしてから侵入するのは如何でしょうか？」

副団長のゼオンと参謀のヨルムンガルドの意見は別れた。

「俺としては罫を使った方が良いと思うぜ。戦車や騎兵じゃ崖は登れんだろ？」

ダハーカの言葉に戦車と騎兵部隊の隊長は頷いた。

「軍団長。私の隊を囿に使ってください」

「同じく私の隊も囿に」

二人の部隊長の進言を聞いて夜叉王丸は重々しく頷いた。

「分かった。お前らの隊を囿にさせてもらう」

『はっ』

二人の隊長を低く頭を下げた。

「誰か異議はあるか？」

夜叉王丸が左右に並んだ隊長に聞いたが皆は無言だった。

それは異議なしという事である。

「……今回の作戦は今までの城攻めとは違う。だが、俺はお前らが活躍するのを信じている」

「俺達の手で天界の城を落としヘルブライの鼻を明かしてやるぞ！」

『おおおおー!!』

夜叉王丸の言葉に部隊長は大声で答えた。

その声は部屋を突き抜けて他の軍艦や飛竜使いにも聞こえた。

「相変わらず夜叉王丸殿の軍議は大きな声を出すな」

「ああ。提督の怒鳴り声より凄いいんじゃないか？」

二人の水兵はマストの上で談笑していたが不意に何か遠くで光る物を見つけて望遠鏡を取り出した。

「……あれは、サタナエルの軍だ」

望遠鏡を覗きながら水兵の一人は、もう一人の水兵に合図の準備をしろと促した。

直ぐに傍を飛ぶ飛竜使いに水兵は赤い旗と白い旗を左右に振って敵襲の存在を教えた。

飛竜使いは合図を見ると猛々しい声を出す飛竜を操り水兵の差す方角へと向かった。

「おい。念の為だ。提督と夜叉王丸殿にも報告しておけ」

望遠鏡を覗きながら水兵は相棒の水兵に言った。

「了解した」

水兵は直ぐにマストから降りると提督室に向かいドアを開けた。

「提督。サタナエルの軍団がやはり待ち伏せしていました」

「こちらでも攻撃準備をするように各艦に連絡を取れ。それから飛天にも伝えて置け」

「はっ」

水兵は短い敬礼をすると提督室を後にし客室で軍議を開いている夜叉王丸の元へ向かった。

「夜叉王丸殿。サタナエルの軍が待ち伏せしていました。ただいま飛竜騎士が迎撃に向かっております」

「そうか。分かった」

水兵は要件を伝えると部屋を出て行った。

「やれやれ。バルトに行く前から前途多難だな」

ダハーカは短くなったジョーカーを灰皿に押し付けながら溜め息を吐いた。

「あいつも飽きないな」

夜叉王丸はセブンスターを口に銜えた。

「.....」

ヨルムンガルドが待っていたかのように懐からジツポライターを取り出してセブンスターに火を点けた。

「まあ、フォカロルの軍が相手なら問題はないだろうな」

夜叉王丸は紫煙を吐きながら天井を見上げた。

フォカロルの軍団は飛竜使いの軍団で空中戦なら殆ど負けない。

「軍議も終わったし、俺は寝る。お前らも休んでおけ」

夜叉王丸は煙草を銜えながら部屋を出て他の隊長も部屋を出て軍議は終了した。

夜叉王丸が部屋に入り寝ようとした時にはフォカロルの軍団がサタナエルの軍団を壊滅させていた。

それから真夜中になって船は天界領のバルトに侵入を果たした。

通常ならば船でも三日の距離を半日で到達した軍艦の速さに風の翼の兵士は驚かすにはいられなかった。

「ありがとよ。リヴァン。フォカロル」

船から降りた夜叉王丸は和風鎧に身を包んでリヴァイアサンとフォカロルに感謝の言葉を言った。

「後は俺たちだけで行く。じゃあな」

夜叉王丸はユニコーンに乗り出発しようとしたがリヴァイアサンから呼び止められた。

「おいおい。俺たちはお前の護衛と言っただろ？バルトまで着いて行くぞ」

「リヴァンの言う通りだ。俺の軍団も着いて行くぞ」

これに夜叉王丸は渋面を浮かべた。

「心配するな。俺らは護衛だ。戦には手を出さねえよ」

苦笑しながらリヴァイアサンは喋った。

「どうだかな。この前なんて身体がウズウズして我慢できないとか言って割り込んで来た癖に」

夜叉王丸は過去の事を言いながらユニコーンに乗って軍団を率いて行ってしまった。

「あつ、おい。飛天！！」

リヴァイアサンとフォカロルは慌てて軍団を率いて夜叉王丸の後を追った。

第三章：バルト戦開始

夜中の内に夜叉王丸の軍団とリヴァイアサン、フォカロルの軍団はバルトの後ろ側にある崖地帯に侵攻した。

夜の時間が終わり、朝日が浮かび上がり始めた。

「霧も出てるしちょうど良い」

夜叉王丸はユニコーンの上から望遠鏡で要塞を見た。

「……やはりな。情報通り壁が二重になっている」

「見張りは表に集中しているな」

夜叉王丸は望遠鏡をゼオンに持たせて鶴を呼んだ。

「……お呼びでしょうか」

「戦車、騎兵部隊に合図を送れ」

「……御意」

鶴は唇を細くするとヒューヒューと鳴き出した。

それが合図だったように霧の中から正面に向かって戦車部隊と騎兵部隊が正門に突っ込んで来た。

「旦那。予想通り奴らが表に集中しました」

「よおし。俺らも行くぞ」

夜叉王丸は腰に差していた真紅の鞘に収まった日本刀、伊勢千子村正を抜いて下に振り下ろした。

「砲撃隊！撃て！？」

茨木童子が自身の左手に填めた大砲を発射すると同時に砲撃部隊の砲撃が始まった。

「敵の何人かが裏に向かいました」

望遠鏡を覗きながらゼオンが言った。

「よおし。弓弩部隊、出番だ」

夜叉王丸の言葉を聞いて弓弩部隊は弓などを引き絞り空に向かって放った。

放たれた矢は水平に飛んでいたが途中で下に向かって落下していき天使軍に矢の雨となって襲い掛かった。

「敵の奴ら怯んでいます。．．．ん？」

望遠鏡を覗きこんだゼオンが何かを見つけたのか身を乗り出した。

「旦那。天馬部隊がいました」

「・・・なに？」

夜叉王丸は渡された望遠鏡を覗きこむと天馬部隊がこちらに向かってきた。

要塞からではなく要塞を超えた北側から来ていた。

「・・・妙だな。そんな情報はないぞ」

鵜を見ても鵜も首を傾げていた。

「まあ、火の粉は振り払うのが一番だ。ダハーカ」

夜叉王丸はダハーカを呼んだ。

「天馬部隊が来た。相手をする」

夜叉王丸はユニコーンから降りた。

「少しは骨のある奴だと良いが」

ダハーカは人間の姿から赤い色の飛竜になった。

「ゼオン。お前はフェンと一緒に突撃部隊を率いて破壊した壁から城内に侵入しろ」

「了解」

ゼオンは腰に差した二本の剣を抜くとフェンリルに話しかけた。

「行くぞ。フェン」

「うるせえ。俺に命令するな」

軽くゼオンを睨むとフェンリルは腰のファルシオンと呼ばれる剣を抜いて突撃部隊を率いて崖を降り始めた。

「さあて、俺たちは飛天の腕を見物するとするか」

リヴァイアサンとフォカロルは頷くとその場に軍を止めて夜叉王丸の戦いを見る事にした。

夜叉王丸の戦い振りは凄まじく襲い掛かる数倍の天馬部隊を少数の奇襲部隊と蹴散らしていった。

ゼオンとフェンリルの部隊も砲撃部隊が開けた壁から城内に潜入し表を攻撃していた戦車、騎兵部隊も正門を突破してバルト城は挟み打ちにされた。

「総督。バルトは敵の手に落ちます!!」

天使の兵士はバルトを指揮する総督に伝えた。

「すぐに脱出する。必要な物と貴族の方を連れて行くぞ!!」

「民はどうなさいますか？」

「民には仕方ないが貴族の方が大事だ」

兵士は頷くと急いで部屋を出た。

「ひけえーい!!!」

夜叉王丸が何人かの天馬部隊の兵士を倒していると天馬部隊の隊長と思わしき人物が退却を命令した。

その声を聞いて天馬部隊は巧みに戦場を後にした。

「……豪く逃げ足が速いな」

夜叉王丸は血の着いた村正を鞘に仕舞うと下を見ると表と裏から攻められたバルトの総督府に風の翼の軍旗が立てられていた。

「どうやら下は占領したようだな」

「ほおう。思ったより早かったな」

「下に降りる」

ダハーカの手綱を引いて夜叉王丸と奇襲部隊は下に降りた。

下に降りるとゼオンと隊長達が待っていた

「被害は?」

「全部隊に死者はなし。傷害は軽傷です」

ヨルムンガルドは夜叉王丸に答えた。

「そうか」

「とんだ兵士ですよ。俺たちが侵入しただけで逃げ腰になって剣を振り上げただけで逃げたんですよ」

人間姿になったフェンリルが溜息を吐きながら答えた。

「情けない天使だな」

ダハーカは人間姿になり欠伸をした。

「一応、敵の再来に備えて準備しておけ。それからリヴァン達を呼んで来い」

隊長達は敬礼すると散会した。

「旦那。どうぞこちらへ」

ゼオンが先導するように夜叉王丸を総督府へと誘った。

総督府の中に入ると金品や宝石、芸術品などが根こそぎ無くなっていた。

「総督府の奴ら逃げやがったんですよ。宝を持って」

苛立った声でゼオンは言った。

「……そうか」

夜叉王丸は少し感情を殺した声で返事をした。

総督の部屋に入ると重要書類などが燃やされた後だった。

「ゼオン。この部屋を探して何か書類がないか調べる」

「情報にはなかった天馬部隊。何か臭い」

「了解」

ゼオンは夜叉王丸と部屋の中を探し回った。

すると机の引き出しの中に手紙が一通だけあった。

「ありました」

手紙を読んでみると

『飛天夜叉王丸の軍団が来るので天馬部隊を派遣しておくように
ヘルブライ男爵』

「これは……………」

「ふん。あの野郎。外道にまで堕ちたか」

手紙を握り潰しながら夜叉王丸は口先だけで笑った。

「……………鵜」

「はっ」

「これを持って魔界に行きベルゼブルに報告しろ」

鳩は渡された手紙を持って姿を消した。

「これで奴の首根っこを抑えた」

ニヤリと笑う夜叉王丸。

「……軍団長」

総督府の部屋に一人の兵士が入って来た。

「どうした？」

「はあ、それが軍団長に会いたいと言う天使の娘がいるのです」

「天使の娘？」

夜叉王丸とゼオンは顔を見合わせた。

「分かった。それじゃ、ここの客室に通してくれ」

兵士は一礼すると部屋を出て行き夜叉王丸とゼオンも部屋を後にした。

客室に行くとき粗末な服を着た蒼銀の長髪を靡かせた天使の娘がいた。

透き通るような白い肌は絹のようでサファイアを填めたような瞳は宝石のようで、まさに生きた芸術品だ。

「俺が、ここの軍団長の飛天夜叉王丸だ」

部屋に入り夜叉王丸は被っていた兜と仮面を取った。

「は、初めまして。バルト市長の娘、ジャンヌ・シエル・ベルサイドと言います」

娘、ジャンヌは座っていた椅子から立ち上って一礼した。

「俺に話したい事とは何だ？」

「は、はい」

ジャンヌは口ごもっていたが、意を決したように土下座した。

「お願いします。ここ、バルト市民に狼藉は止めて下さい！！」

夜叉王丸はジャンヌの言いたい事が分かった。

略奪、強姦、殺戮などをしないでくれと言っているのだ。

戦争で勝った者は理不尽な事を罪無き民にも与えて不幸にする。

人間の頃から戦争を体験してきた夜叉王丸にはジャンヌの懇願がよく分かった。

「ジャンヌ殿」

夜叉王丸は片膝を着いてジャンヌの肩に手を置いた。

「戦争は終わった。ここで理不尽な真似はしないよ」

ジャンヌは顔を上げた。

「もしも、俺の部下が狼藉をしたら俺が始末する」

夜叉王丸の言葉には重さが感じられた。

事実、夜叉王丸は過去に狼藉を働いた部下を五十人ほど始末している。

「それより、バルト市長の娘なのに何で粗末な服を？」

あちらこちら縫った後が見えて何度も直して着ていると分かった。

「……重税で買った服なんて着たくありません」

それだけ言つとジャンヌは黙った。

「父、バルト市長は貴族の方と軍隊に護られて逃げました」

「娘の君は？」

「私は、皆を置いて逃げるなんて真似は出来ません。妹も一緒です」

「……」

夜叉王丸は無言でジャンヌの肩に黒の陣羽織を着せた。

「血生臭いけど、それでも少しは寒さを凌げるはずだ」

立ち上がって部屋を出た夜叉王丸は憤怒の表情が浮かび上がっていた。

「……………皆殺しだ」

バキバキっと手を折りながら夜叉王丸は総督府を後にした。

第四章：正義を許さず

夜叉王丸はユニコーンに乗ると天界へと走ろうとした。

「旦那！何処に行くんですか？」

ゼオンが走って来て夜叉王丸に聞いた。

「……天界だ。奴らを、皆殺しにする」

「一人ですか？無茶です!？」

ゼオンは夜叉王丸の足にしがみ付いた。

「行くのなら俺を連れて行って下さい。この命、旦那の為なら惜しくありません」

真剣な表情でゼオンは懇願した。

「俺とお前が居なくなったら、軍団を指揮する者がいないだろ？」

夜叉王丸は優しくゼオンの頭を撫でた。

「後は頼むぞ。……ゼオン・エルヴィン・ハンニバル」

夜叉王丸はユニコーンを走らせると天界へと向かった。

「旦那!!ちくしょう!？」

ギリツとゼオンは唇を噛むとダハーカ達の所へと走った。

一方、天界を目指した夜叉王丸はユニコーンを走らせ続けた。

『守るべき民を捨てる者に剣を持つ資格などない』

ユニコーンに乗ったまま夜叉王丸の心は煮え滾っていた。

民を捨てて財産と貴族だけを連れて逃げた天使軍に対する怒りが爆発寸前だった。

軍や騎士は弱き者を護るために存在すると夜叉王丸は考えていた。

しかし、現実には権力がある者を護るための軍であり騎士でしかなく民は後回しだ。

それは魔界でも同じで民は何時も泣きを見た。

それが夜叉王丸には我慢が出来なかった。

だから、自分だけは民を護るための軍であり騎士でありたいと考えて剣を取っていたため天使軍の行動には怒りが抑えられなかった。

「……許さん」

腰に差した村正を左手で撫でながら夜叉王丸はバルトから離れた北の都、フロイに向かった。

フロイの関所まで行くと頑丈そうな鎧に身を包んだ屈強な兵士が立っていた。

「その者！！何者だ！！」

関所を護る兵士が槍をユニコーンに乗った夜叉王丸に向けた。

「……大天使ミカエルの首を頂き参上した」

兵士は身構えた。

「な、何者だ！！」

「……飛天夜叉王丸だ」

夜叉王丸が名乗ると兵士は事切れて倒れた。

その身体は斜め一刀両断で斬られていた。

「……ありがとよ。後は俺一人で行く」

ユニコーンから降りた夜叉王丸はユニコーンの鼻を優しく撫でると関所を後にして遠くにそびえ立つ城を見つめた。

「……皆殺しにしてやる」

夜叉王丸は村正を引き抜いて城を目指し歩きだした。

途中で何人もの兵士が夜叉王丸を襲い掛かったが難なく斬り殺し続けた。

身体に返り血が飛び散り鎧が血で染まったが気にせず夜叉王丸は

城を目指し続けた。

「……この度は私共を護衛して下さりありがとうございます」

目立つ腹を気にもせず中年の男は軍服を着た男にずっしりとした袋を渡した。

「ほおう。随分と多いじゃないか？」

「はい。娘、ジャンヌを連れて行けなかった詫び料です」

中年の男は手を揉みながら平伏した。

「あの娘、一緒に都に逃げようと誘ったのですが、残ると言いました」

「まったく。誰に似てあんな頑固な娘に育ったのか」

男は愚痴を零しながら抜け目ない瞳で軍服の男を見つめた。

「これからミカエル様に会うのでございましょう？」

「ああ。バルトを撤退した事を報告して奪還する事を伝えにな」

「無事に奪還した暁には、また私を市長にお願いします」

「任せておけ」

二人が手を取り合おうとした時だった。

後ろのドアが部屋の中に入って来た。

「誰だ？」

軍服の男が腰の剣に手を掛けた。

「……貴様らの命を貰いに来た死神だ」

血で全身を染めながら夜叉王丸は二人を見た。

「貴様らに二度とあの地を踏ません」

夜叉王丸は血で染まった村正を構えた。

「ひ、ひい！！だ、誰か？誰か居ないのか！！」

中年の男が叫んだが誰も返事はしなかった。

「生憎だが、兵士は皆殺しにさせてもらった」

ニヤリと笑う夜叉王丸。

「こ、この悪魔が！！」

男は剣を抜いて夜叉王丸の頭上に振り下ろしたが、それよりも早く夜叉王丸が男を横一線に斬った。

大量の血しぶきが部屋を汚した。

「……貴様は簡単には死なせん」

夜叉王丸は手の平に火を出すと腰を抜かした男に向けて放った。

「ぎいやあ！！あ、熱い！！熱い！！」

男は火を消そうとしたが消えなかった。

「熱い！！誰か！火を消してくれ！！」

部屋中を駆け巡り火を消そうとしたが火は物に移っただけだった。

「・・・・・・・・」

夜叉王丸は部屋を出ると、村正を手にしたまま城へと目指し再び足を動かした。

一方、夜叉王丸が去ったバルトでは副団長のゼオンがリヴァイアサンとフォカロル、ダハーカ達に説明していた。

「何だと！一人で天界に行った？！」

リヴァイアサンの大声で窓ガラスが揺れた。

「うるさいぞ。リヴァイアサン」

フォカロルが耳を抑えながら小声で叱った。

「これが大声を出せずにいられるか？！」

「で、飛天はなんて言って言ったんだ？」

ダハーカがジョーカーを蒸かしながら尋ねた。

「死にはしないと」

「なら心配ないな。あいつが約束を破る訳ない」

「ですね。主人様は約束を護る男です」

「主人が死に訳ない」

「あいつは死ぬような男じゃない」

ダハーカ達の言葉にフォカロルは静かに言った。

「お前たちは飛天を信じているんだな」

「当然だ」

ダハーカの言葉にフォカロルは微笑した。

「こいつらが信頼してるんだ。俺たちも飛天を信じようじゃないか」

フォカロルの言葉にリヴァイアサンも神妙に頷いた。

フロインの城は騒然としていた一人の悪魔によって何百人もの天使軍が倒されて行き城は陥落状態だった。

「ぐわっ!!」

「ぎゃあ!？」

「ひ、ひぎゃ!？」

夜叉王丸は向かってくる敵を次々と斬り殺してきた。

身体に無数の傷が出来て血が流れたが気にせず、城の最奥部へと進んだ。

巨大な扉を破壊して中に入ると玉座に座り夜叉王丸を見つめる男がいた。

黄金の長髪は神々しい光を放ち碧色の瞳は無表情でありながら何処か他人を圧倒する力があり白い肌は純白だった。

「……大天使ミカエルだな」

夜叉王丸の姿を見ても男は表情を変えなかった。

「……そなたか。我が都を壊滅させた悪魔は」

「ここまで来た事のあるのは、我が兄ルシュファールとサタンだけだ。一階の悪魔が来るのは初めてだ」

「だが、ここから先は行かせん」

ミカエルは静かに玉座から腰を上げると右手から剣を出した。

「正義の名の元に貴様を処刑する」

「……その言葉をそっくり返す」

夜叉王丸は右の眼帯を外して左手を腰に回して後ろに差していた小太刀、池田鬼神丸国重を取り出した。

右の瞳は真紅よりも更に深い紅だった。

「……………」

夜叉王丸は右手の村正を縦にすると左手の国重を逆手に持ち村正とクロスした。

その構えは逆十字だった。

「……………はっ!!」

ミカエルは左手から炎を出すと夜叉王丸に放った。

夜叉王丸は炎を避けもせず炎の中に突っ込んだ。

「……………何っ」

ミカエルは驚きの声を上げた。

しかし、直ぐに炎の中から出てきた夜叉王丸に攻撃の構えを取った。

「もらった!!」

ミカエルは夜叉王丸の頭上に剣を振り落とそうとしたが、それよりも早く夜叉王丸が懐に入り右手を村正と国重で斬り落とした。

「ぐっ……」

右手を斬られたミカエルは左手で肘から先のない右手を抑えた。

「……名は何という？」

「……飛天夜叉王丸」

「その名前、覚えておこう」

ミカエルは捨て台詞を残して光に包まれて姿を消した。

夜叉王丸は刀を鞘に収めた。

立ち去ろうとしたが右眼に映った炎で焼け落ちた石像の下にいた逃げ遅れた天使の娘を見て走った。

「危ない!!」

どんと天使の娘を押すと自分は焼けた石像の下敷きになった。

「……ぐっ」

夜叉王丸は薄れゆく意識の中で天使の娘が逃げて行くのを確認すると笑みを浮かべた。

『敵である天使を助けて死ぬなんて……まあ、それも悪くない、か』

意識を失った夜叉王丸は目の前に現われた人物の存在を気付かなか
った。

第五章：必ず助ける

「……………大変です!!」

ダハーカ達がジャンヌの薦めで市長の屋敷で寛いでいると一人の兵士が血相を変えて入って来た。

「ぐ、軍団長が傷だらけで屋敷の前に置かれていました!!」

「なに!!」

椅子から立ち上がったダハーカ達は慌てて屋敷の外に出ると夜叉王丸が傷だらけで地面に寝ていた。

「すぐに私の部屋へ運んで下さい!急いで!」

一緒に来たジャンヌは慌ててダハーカに言った。

「分かった!飛天、しっかりしろ!」

ダハーカは夜叉王丸を担ぐと急いでジャンヌの案内する部屋へと運んだ。

「出血を止めますから包帯をお願いします」

了解したとダハーカ達は急いで包帯を取りに行った。

直ぐに包帯を取りに来たダハーカ達にジャンヌは受け取った包帯を

身体に巻いた。

しかし、出血が酷く包帯は直ぐに赤くなった。

「もつと包帯を！！無ければカーテンでも何でも良いです！？」

「それから氷とタオルをお願いします」

ダハーカ達以外にリヴァイアサンやフォカロルも包帯や氷、タオルを調達するのに励んだ。

何度も包帯を取り換えて氷で額を冷やすこと一時間。

やっと出血が止まった。

しかし、今度は熱が下がらず氷の取り換えが必死だった。

その間、ジャンヌは片時も夜叉王丸の傍から離れずに看病をした。

途中で夜叉王丸がうめき声を上げると血で染まった手で夜叉王丸の手を掴んで優しく励ました。

「大丈夫。大丈夫ですよ」

それを聞くと夜叉王丸の顔が和んだ。

「……絶対に死なせません」

ジャンヌは目の前の男を死なせない事に時間を費やした。

その間、ダハーカ達はリヴァイアサンとフォカロルも混ぜて軍議を開いていた。

「……ヘルブライの野郎が天界と密通していただど？」

リヴァイアサンは眉を顰めた。

「ああ。旦那が見つけた手紙にヘルブライと書かれていた」

「愚かな男だと思っていたが、ここまで愚かだったとは……」

フォカロルは呆れた表情をした。

「鵠が蠅王に報告しに行っている」

「……もうして来た」

何時の間に現われたのか壁に寄り掛かって鵠がいた。

「相変わらず神出鬼没な奴だ」

フェンリルの言葉を無視して鵠は言葉を続けた。

「ヘルブライ並びにサタナエルと殿を暗殺しようとした者を密告罪と国家反逆罪その他諸々の罪で裁くとの事だ」

淡々と無表情で言う鵠にリヴァイアサンとフォカロルは寒気を感じた。

ダハーカ達とは違い、この男は顔を見せず話す事も要件しか話さず無愛想に見えるが実は仲間思いで特に夜叉王丸を馬鹿にすると情け容赦がない。

二人とも酒の席で夜叉王丸を馬鹿にしたら半殺しにされた事があるため鶴の前だと出来るだけ控えている。

「それでヘルブライとサタナエルは？」

「ヘルブライは秘密警察がサタナエルは近衛兵が捕まえて一味は騎士が取り押さえる予定だ」

「そうか。御苦労だな」

ダハーカが労いの言葉を掛けた。

「貴様の為ではない。全ては我が殿。飛天夜叉王丸様の為だ」

無愛想に答える鶴にダハーカは苦笑した。

「それで、殿の容体は？」

「熱は下がった。後は体力勝負だと」

「まあ、あの体力馬鹿なら死な……………おわっ!!」

リヴァイアサンが軽口を言おうとすると鶴が忍者刀を抜いて首筋に当てた。

「……………我が殿を愚弄するか」

「い、いやぁー。そういう訳では……………うわぁー!」

「待て!」

リヴァイアサンを追う鶴。

「貴様は許さん!」

「ひい!! 落ち着け!」

「黙れ!」

「喧嘩なら外でやれ。茶が不味くなる」

「少しは静かにしろ。眠れねえだろ?」

わいわいと騒いでいると

「煩いですよ!」

バンツとドアを開けてジャンヌが怒鳴り声を上げた。

その声に皆が止まった。

「けが人がいるんですよ? 傷に障ったらどうするんですか?!」

『……………す、すみません』

大の男が八人も子供のように謝った。

「今後一切、騒いだら屋敷から追い出しますよ」

それだけ言うとドアを閉めるジャンヌ。

「……………見た目によらず怒らせると怖いな」

ダハーカの言葉に皆が頷いた。

「…………シルヴィアより怖い」

リヴァイアサンはブルブルと震えていた。

どうやら過去のトラウマが蘇ったようだ。

部屋に戻ったジャンヌは自分の小さいベッドで眠る男、夜叉王丸を見つめた。

全身を傷だらけにして戻った夜叉王丸。

熱は下がったが未だに眼を覚まさない。

「……………どうか。目覚めて下さい。皆が心配してるんですよ」

白い手で夜叉王丸の前髪を撫でるジャンヌ。

その表情は悲しげな表情だった。

第六章：目覚める悪魔

夜叉王丸は朝日が顔に当たって眩しくなり目を覚ました。

「……俺は、確かミカエルの右腕を切り落として天使の娘を助けて死んだ筈じゃ……」

自身の身を見ると包帯が巻かれていた。

「……どうやら生きているらしいな」

苦笑しながらベッドから立ち上がるうとした時に左手が重く感じて見るとジャンヌが自身の腕を枕にして眠っていた。

「……」

夜叉王丸はジャンヌを起こさないように気を付けてジャンヌをベッドに寝かせてシーツを掛けた。

「ありがとう」

礼の言葉を言っつて夜叉王丸は部屋を静かに出た。

部屋を出た夜叉王丸は声のする方向へと進んだ。

声のするドアを開けるとダハーカ達が寝息を立てていた。

大の男が八人も同じ部屋で寝ていると、という何とも想像しがたい状況を見て夜叉王丸は頭を抑えた。

その内、ダハーカが目覚まして眠たそうな臉を開けて何気なくドアの方を見た。

「よお。ダハーカ」

片手を上げて挨拶をする夜叉王丸を見てダハーカは茫然としていたが、見る見る大粒の涙を流し始めて夜叉王丸に抱き付いた。

「飛天！！」

「い、生きててよかった！！おおおん！？」

大木のような腕で夜叉王丸を抱き締めるダハーカ。

192の長身である夜叉王丸を更に超える230のダハーカに抱き締められて夜叉王丸の骨は軋みを上げた。

「頼いぞー。何を泣いて……………旦那！！」

続いてゼオンが目覚まし後からリヴァイアサン達が目を覚まして夜叉王丸の姿を見ると歓喜の声を上げた。

「生きてたのかよ?!この野郎っ。心配させやがって!!」

「あ、主人っ。うわあああん!？」

九人の男に囲まれた夜叉王丸は限界に達し傷が塞がり掛けたのも忘れて九人を蹴散らした。

「熱くるしいんだよ!!」

ゼイゼイっと荒い息をしながら夜叉王丸は倒れた九人を見た。

「たつく。少しは大人しくしろ」

腰まで伸びたボサボサの長髪を掻き上げながら夜叉王丸は溜め息を吐いた。

「そう言えば、ジャンヌさんはどうしたんですか？旦那……
……痛いなあ」

殴られた頬を抑えながらゼオンが聞いてきた。

「あの娘なら寝てたからベッドで寝かせた」

「ジャンヌちゃんに感謝しろよ。ずっとお前の看病してたんだからよ」

ダハーカが立ち上がって夜叉王丸に煙草を進めてきた。

「……そうか」

口で煙草を受け取るとヨルムンガルドがライターで火を点けた。

「……まあ、何はともあれ無事な事をベルゼブルに報告だな」

煙を肺に入れて夜叉王丸は何となく天井を見上げた。

一方魔界では、ベルゼブルと王族達が会議を開いていた。

その時にフォカロルの出した使い魔の報告を聞いてベルゼブルを始めとした王族は安堵の息を漏らした。

「……皆の者。飛天が挙げた戦果は魔界史上に残る大戦果だ。よって飛天に爵位を与え階級もレリウーリアに昇格させたいと思うが異存はあるか？」

皇帝の言葉に王族達は無言で異存なしと答えた。

「お待ち下さい！！陛下!?!」

突然、閉められていた扉が開き議会議室に血相を変えたヘルブライ男爵が現われた。

「夜叉王丸に爵位を与えるなど……………」

「黙れ!!」

ベルゼブルの一喝でヘルブライ男爵は縮み上がった。

「ここは議会議室。たかがサタナエル如き餓鬼の側近が入って良い場所ではないぞ」

「しかし、陛下。私は帝国の行く末を考えて……………」

「天界に情報を漏らした裏切り者がほざくな」

この言葉を聞いてヘルブライ男爵は思考が停止した。

「貴様が天界の軍に送った手紙もあるぞ」

懐から紙を取り出すベルゼブル。

「天界に情報を漏らしただけでは飽き足らず重税を民に敷き数々の令嬢を毒牙の餌食にした罪、許し難し。よって主人であるサタナエルと共に逮捕する」

ベルゼブルが眼で合図すると秘密警察が現われてヘルブライ男爵を拘束した。

「へ、陛下っ。何かの間違いです！私は裏切っただけじゃないですか！？」

「言い訳無用だ。連れて行け」

冷やかな眼差しで一瞥して秘密警察の者に命令する。

「陛下！！私の話を聞いて下さい！？陛下ー！！」

ヘルブライ男爵は引き摺られながらベルゼブルに懇願したが、無情に扉は閉まった。

「……はあ。やっと煩い餓鬼が消えたな」

ベルゼブルは威厳ある顔から疲れた表情になった。

「まったく。議会議室に乗り込んで来るなんて傲慢にも程がある」

文句を言ったのは七つの大罪の“傲慢”である元天使長ルシユファ―だった。

「しかし、これで奴の領土を取り上げられる大義名分も出来た。全ては計算通りだ」

ニヤリと黄金の置物を撫でて笑う男は七つの大罪の“強欲”を司る西の王マモン。

「その口振りから察するにヘルブライ男爵に情報を漏らしたのは、お前か？」

ルシュファーがちらりとマモンを見た。

「ああ。今日、飛天に爵位を与えるって情報をヘルブライ男爵の耳に入るようにな」

「それで乗り込んで来た無礼を理由に領地と爵位に役職を取り上げるって計算か？」

「如何にも。それを飛天にそのまま継承させれば良いだろ？」

「相変わらず計算高い奴だ」

ルシュファーは呆れた眼差しでマモンを一瞬だけ見た。

「それよりサタナエルの処罰はどうする？」

マモンの隣に座っていた色欲の権化であるアスモデウスが口を開いた。

「あいつは飛天を殺そうとした罪がある」

「だが、奴はサタンの息子であり皇子だ。処刑するにも、それ相応の手続きがないと」

アスモデウスと向き合うように座っていた嫉妬の化身のレヴィアタンが返答した。

「手続きなどしている暇はない。今にでもサタナエルを殺すべきだ」
レヴィアタンの意見を怠惰の化身、ベリフェゴールが否定した。

皆の意見が別れて議論していると、それまで沈黙だった憤怒の化身であり初代地獄皇帝だったサタンが口を開いた。

「サタナエルには決闘という形で死んでもらう」

「決闘という形なら奴を大衆の面前で殺せるし周りにも良い見せしめになる」

自分の息子の処刑方法を淡々と述べるサタナエル。

「奴は生かし過ぎた。これ以上は生かして置いたら飛天の為にならん」

非情とも言える言葉を出すサタン。

「分かった。飛天が帰り次第に決闘をさせる。それまではどうする？」

ベルゼブルが尋ねた。

「ヘルブライと一緒に牢にでも入れて置こう」

「……ビレト、ザパン」

二人の王族の名前を呼んだ。

「ただちにサタナエルを取り押さえて牢に入れろ」

ビレトとザパンは一礼すると議会議室を後にした。

「……バール、エギユン」

ベルゼブルは次に魔界でも最大の力を誇る剣王と謳われるバールと北の王であるエギユン王の名を呼んだ。

「……貴様らはただちにバルトに行き飛天の護衛に当たれ」

二人も一礼すると議会議室から出て行った。

「これで今回の議事を終了する」

ベルゼブルの言葉で地獄会議は終了した。

第七章：悪魔の看病

ミカエルを倒した夜叉王丸が目覚めてから三日が経った。

その間の夜叉王丸はベッドから動けなかった。

驚異的な回復力で動けるようになったがジャンヌが断固として動くのを反対してベッドから動けないでいる。

「なあ、何時になったら俺は動いていいんだ？」

長身には小さすぎるベッドに寝ている状態で夜叉王丸は隣で椅子に座りながら器用にナイフで林檎の皮を剥くジャンヌに尋ねた。

皮を剥いていたナイフを持った手を止めて夜叉王丸を蒼い瞳で見るジャンヌの美しさに夜叉王丸は目を細めた。

「少なくとも半年は動いてはいけません」

「その間は煙草もお酒も禁止です」

母親のように諭す口調で話すジャンヌ。

「半年も禁欲しろとは地獄だ」

ジャンヌから視線を逸らし天井を見つめる夜叉王丸。

「……仕方ありませんね」

溜息を吐いたジャンヌに夜叉王丸は視線を戻した。

「何がだ？」

「少し外出しましょう。もちろん私も同行します」

外出と聞いて夜叉王丸の瞳が輝いたのをジャンヌは見逃さなかった。

「さあ、私の肩に掴まって下さい」

夜叉王丸に肩を貸そうとしたが逆に持ち上げられてしまった。

「俺の腰でも支えてくれ」

ジャンヌは夜叉王丸の腰に手を回した。

「さあ、行きましょう」

二人は寄り添うようにして部屋を出た。

「あーあー、三日ぶりの外は良いな」

気持ち良さそうにする夜叉王丸にジャンヌも釣られて微笑んだ。

夜叉王丸とジャンヌは総督府の庭を二人で仲良く歩き始めた。

包帯の上からジャンヌに渡した陣羽織を着て夜叉王丸は三日ぶりの外出を楽しんだ。

途中で風の翼の兵士と会々と皆が夜叉王丸を心配する口調で話し掛

けて来て夜叉王丸は大丈夫だと答えた。

「……皆さん。夜叉王丸様を大切に思っているんですね」

「部下に心配されるなんて情けない上官だな」

苦笑交じりに答える夜叉王丸。

「いいえ。部下に心配される事は、それだけ夜叉王丸様が皆から愛されている事です」

「……ありがとう」

ジャンヌの言った言葉が何処か嬉しくて夜叉王丸は照れ笑いしながら礼の言葉を言った。

庭を散歩して三十分くらいしてからゼオンが夜叉王丸の元に来た。

「旦那。散歩の所をすいません」

一礼して謝罪するゼオン。

「いや。大丈夫だ。それで何か用か？」

「はい。魔界からパール王とエギン王が来ました」

「パール殿とエギンが？」

夜叉王丸は訝しんだ。

二人とも個人的な付き合いがあり何度か戦を共にした戦友でもある。

その二人が尋ねて来るのは何かあると夜叉王丸は感じた。

「あの、お話をするのであれば客室をお使い下さい」

夜叉王丸の腰を支えながらジャンヌは提案した。

「ありがとうございます」

ジャンヌに礼を言って夜叉王丸はジャンヌを伴ってゼオンと一緒に庭を後にした。

客室に向かうとパール王とエギユン王がソファで待っていた。

どちらも黒い軍服姿で身体から放たれるオーラは猛々しくも威厳に満ちていた。

「飛天殿。傷は大丈夫ですか？」

パール王が心配そうにジャンヌに支えられる夜叉王丸を見た。

「はい。このジャンヌ殿が私を看病してくれたので」

腰を支えるジャンヌを見つめる夜叉王丸。

「そなたは？」

「は、はいっ。バルト市長の娘、ジャンヌ・シエル・ベルサイドと言います」

夜叉王丸の腰から離れてパール王とエギユン王に一礼するジャンヌ。

「私はパール王。我らが王であるベルゼブル皇帝陛下の息子である飛天殿を助けて頂き感謝します」

エギユン王も立ち上がってジャンヌに一礼した。

「私はエギユン王と言います。この度は飛天が世話になりありがとうございます。うございます」

「い、いいえっ。私こそ夜叉王丸様にはバルト市民に狼藉を働かなかった事を感謝しています」

夜叉王丸の正体と二人の王族に頭を下げられてジャンヌは慌てふためいていた。

「まあ、堅苦しいのはこの辺にして、何しに来たんだ？エギユン」

夜叉王丸が割り込んでエギユン王に聞いた。

「陛下からお前を護衛しろと命令された」

「俺の護衛？」

「ああ。サタナエルとヘルブライを拘束したから、残党がお前を殺す可能性があるから俺とパール殿が護衛として選ばれた」

ジャンヌは話されている事の重要性に目を回していた。

「王族を二人も護衛に寄こすなんて、やり過ぎだ」

夜叉王丸は明らかに洗面を浮かべた。

今でも喧しい二人がいるのに増やさないで欲しいと思った。

「陛下は飛天殿を心配しているからですよ」

パール王が叱るように夜叉王丸を睨んだ。

「いいですか？そもそも飛天殿はご自分の事を……」

「

「ううう、傷口が開いた。ジャンヌ殿。ベッドまで頼む」

何やら説教が始まりそうなのを感じ取った夜叉王丸は痛くもない傷を痛がる振りをしてジャンヌに助けを求めた。

「まあ！！それは大変です！さあ、私の肩を掴んで下さい」

ジャンヌは夜叉王丸の嘘に騙されているのも知らずに肩を貸すと夜叉王丸を支えるようにして部屋を出て行った。

「………健気だな。あの娘」

エギユン王は感心するように呟いてパール王は途中で説教を打ち切られた形で不機嫌だった。

部屋に戻った夜叉王丸はジャンヌに支えられながらベッドに寝た。

「大丈夫ですか？」

「ああ。少し動き過ぎたな」

苦笑する夜叉王丸にジャンヌは優しく頭を撫でた。

「あまり無茶はいけませんよ」

「ああ。しないよ」

ジャンヌの言葉に夜叉王丸は苦笑交じりで答えた。

何故か分からないが、ジャンヌとは長い時間を共に過ごしてきたよ
うな感覚が夜叉王丸にはあった。

それは、恐らく彼女がかつて愛した“かの女”に似ているからかも
知れないと夜叉王丸は思った。

彼女も見ず知らずの自分に優しく接して母親のように叱ったりして
くれたのを遠い記憶から思い出した。

「・・・・・・・・似ている」

「え？」

知らず知らずの内に呟いていた事に夜叉王丸は慌ててシーツを頭か
ら被った。

「な、何でもないっ」

「？」

ジャンヌは夜叉王丸の言った言葉を聞き取れず何を恥ずかしがっているのか分からなかったが敢えて聞かないでいた。

夜叉王丸はシーツを被りながら自身の不覚さに情けなさど恥ずかしさが一杯でしばらく頬が蒸気した。

第八章：逃亡と策略

ビレットとザパンがサタナエルの部屋に行った時にはサタナエルの姿はなく金品なども持ち去られた後だった。

「……逃げられたか」

舌打ちをしながら二人は部屋の中を隈なく探して手掛かりを捜した。

「……どうやら慌てて逃げたようだな」

手掛かりは見つからなかったが、部屋の乱雑からしてヘルブライ男爵が捕まったのを直ぐに感知して慌てて荷造りをして逃げたのだろう。

「お主ならどうする？」

ビレットが驚のように鋭い琥珀色の瞳でザパンを見た。

「わしだったら暫くは身を隠して機会を窺うが、あの未熟者の事だ。ヘルブライを助けるか、若しくは一人でバルトに向かい飛天を殺すかな」

「恐らく前者だろうな。あの臆病者に一人でバルトに乗り込む度胸などない」

ビレットは蔑む口調で言った。

「わしも思っな」

ザパンも同意を示した。

「た、大変です!!」

牢を護っていた番兵が駆け込んで来た。

「ヘルブライがサタナエルの手引で脱獄しました」

「やはりな」

二人は頷くと部屋を出た。

「バルトにはバル殿とエギンが向かったから心配ないだろう。わしらはヘルブライ男爵に関与した者たちを捕まえるか」

「そうだな」

二人は部屋を出るとベルゼブルが創立した八工騎士団を連れてヘルブライ男爵に加担した貴族を捕らえに向かった。

一方、牢を脱出したヘルブライ男爵とサタナエルは、まだ自分に味方する貴族の手引きでバルトまでの船で向かっていた。

「おのれ………夜叉王丸」

ヘルブライ男爵は船の中で悔しげに唇を噛んでいた。

あんな人間出身の悪魔に自分が屈したのが許せなかったが何より許せないのは純血である自分を蔑ろにした七つの大罪と自分を貶めた

夜叉王丸だ。

「ヘルブライ。これからどうするんだ？」

サタナエルが心配そうな声で聞いてきた。

「このままバルトに行き夜叉王丸の首を取ります」

「出来るのか？向こうにはバールやエギユンの他にもリヴァイアサ
ン達がいるぞ」

全員が自分よりも格上の悪魔でサタナエルは怖かった。

「心配は要りません。幾ら護衛が居ようと部屋の中までは来ません
し夜叉王丸自身が護衛は嫌っています」

この事は城での生活を見てきた事で分かっていた。

「しかし、護衛が居ないとしても殺せるのか？もう私もお前の軍団
も役に立たんぞ」

ヘルブライ男爵の軍団は夜叉王丸付きの近衛兵であるシルヴィアの
軍団が壊滅させサタナエルの軍団はフォカロール將軍の軍団が海の藻
屑にした。

「ご安心ください。あのような人間風情に純血の私が負ける訳があ
りません」

ニヤリと笑うヘルブライ男爵を見てサタナエルは心強くなったのか
力強く頷いた。

「そうだな。あんな人間に負ける訳がない」

「その意気です」

そんな二人の密会を聞いた水夫は艦長室に行き艦長に伝えた。

「そうか。奴らは皇子様の寝込みを襲う積もりです」

艦長は長椅子に座り優雅に紅茶を飲む銀髪の男に言った。

「そうか。御苦労だった」

銀髪の男は椅子に座ったまま感謝した。

銀髪の男の名前は秘密警察長官のネルガル。

秘密警察とは国内での対テロ対策や他国などに潜入するスパイ活動などの通常の警察などでは対応できない事件を手掛ける組織で恐れられている。

何故、秘密警察の長官がサタナエルとヘルブライ男爵の船に乗っているのかと言うと、この船を所有する貴族も夜叉王丸を慕っていたからだ。

自分より格下のヘルブライ男爵に扱き使われていた貴族は早くから見切りを付けて夜叉王丸の味方に付きスパイ活動をしていた。

そしてヘルブライ男爵が助けを求めてきたのでネルガルに報告したのだ。

「……これで反乱分子は消去できる」

ネルガルは残酷な笑みを浮かべながら温くなった紅茶を一口のんだ。夜になってバルトに到着したヘルブライ男爵とサタナエルは船を降りて城へと向かった。

「どうやって中に入るんだ？」

前を歩くヘルブライ男爵に尋ねるサタナエル。

「瞬間魔法で中に入り夜叉王丸の首を取ります」

「本当に大丈夫なのか？リヴァイアサンとフォカロルもいるぞ」

「あんな二人など敵ではありません」

どこか自信満々で答えるヘルブライ男爵にサタナエルは安心したように笑った。

「それは頼もしいな。頼むぞ。ヘルブライ」

「お任せ下さい」

ヘルブライ男爵は大きく頷いた。

そんな二人を見る人物がいるのを二人は知らない。

「……愚かな」

嘲いの笑みを浮かべる鶴。

ネルガルから連絡を受けた夜叉王丸は鶴に命じて密かに監視させていた。

「・・・殿に報告せねば」

鶴は二人を見下ろしたが直ぐに視線を外して城に向かった。

「・・・そうか。やはり、来たか」

屋敷の外で鶴の報告を聞きながら夜叉王丸は煙草を蒸かしていた。

ジャンヌは外出中のため、鬼の居ぬ間に何とやら・・・

「ふうー、それでどれ位で着くと思う？」

「恐らくは深夜二時かと」

「そうか。お前はまたヘルブライを見張れ。俺は総督府で待ち構える」

「総督府ですか？」

何でわざわざジャンヌの屋敷で待ち構えないのか、と鶴は目で言った。

「あんな下衆共の血で、この屋敷を汚したくない」

鵜は納得した顔で頷くと姿を消した。

「さあて、俺は一眠りするか」

吸っていた煙草を指で揉み消すと夜叉王丸はダハーカ達に総督府へ向かうと告げに屋敷に戻った。

それから深夜二時。

辺りは寝静まった時間にヘルブライ男爵とサタナエルは城に到着した。

「夜叉王丸は総督府の寝室で寝ているそうです」

ヘルブライ男爵とサタナエルはバルトの城の中に入ると総督府を指して隠密行動をして進んだ。

何人か見張りの兵士に見つかりそうになったが、幸いにも見つからずに総督府の中に着いた。

「鍵も掛けないとは油断しているな」

裏口のドアが開いているのを油断していると思い嘲笑い中に入り寝室へと足を運んだ。

「……準備は良いですか？サタナエル様」

サタナエルは腰に差した剣を抜いて頷いた。

二人は頷き合うと剣を片手に一気にドアを蹴破りベッドに突き立て

た。

しかし、ベッドのシーツを退かすと夜叉王丸の姿はなかった。

「何っ」

「よお。待ってたぜ」

窓際を見ると上半身を包帯で覆った夜叉王丸が立っていた。

「貴様っ。謀ったな!!」

二人は剣を夜叉王丸に向けた。

「ああ。お前らがバルトに来るのも分かっていた」

ニヤリと笑う夜叉王丸。

「でっどっする」

「こっする!!」

ヘルブライ男爵が不意にナイフを取り出して夜叉王丸に向かって投げた。

それと同時に二人が突っ込んで来た。

「・・・・・・・・」

夜叉王丸はナイフを避けてヘルブライ男爵の剣を右足で横に払いサ

タナエルの腕を掴むと巴投げで地面に叩き付けると間を置かずに落とした剣を拾いヘルブライ男爵の左腕を斬り落とした。

「ぐわあああ！！」

ヘルブライ男爵は肘から先の無い左腕を抑え絶叫を上げた。

「俺の前に二度と現れるな。さもないと殺すぞ？」

「……この怨み必ず貴様の血で返させて貰うぞ！飛天夜叉王丸！？」

捨て台詞を残しヘルブライ男爵は瞬間魔法で姿を消した。

「……おい。出て来いよ。ネルガル」

夜叉王丸が声を掛けると音もなくネルガルが現われた。

「流石は皇子様。見事な腕前ですね」

ネルガルは人懐こい笑みを浮かべた。

「皇子と呼ぶのは止めてくれ。背中が痒くなる」

「これは失礼しました」

クスクスと笑うネルガル。

しかし、瞳だけは笑っておらず冷やかにサタナエルを見下ろしていた。

「ヘルブライは逃げたが、こいつはお前に預ける」

「ありがとうございます。陛下、サタン様もそれを望んでいます」

「サタン様が？」

「はい。これはまだ秘密ですが、この愚か者を処刑ではなく決闘で葬れとの事ですので」

ネルガルの言葉に夜叉王丸は何かを感じ取ったように目を細めた。

「・・・なるほど。そういう事か」

「はい。鋭い洞察力に感服致します」

ネルガルは一礼して床で伸びているサタナエルを軽々と脇に抱くと瞬間魔法で姿を消した。

一人になった夜叉王丸はヘルブライ男爵が残した左腕を見下ろしたが直ぐに視線を逸らすと魔術で火を点けて腕を燃やした。

燃える腕から悪臭が漂ってきたが構わずに暫く炎を見ていたが興味を無くしたのか部屋を出て行った。

第九章：別れと帰還

バルトに滞在して半年が経過した。

その頃には夜叉王丸は傷が癒えて帰還できるようになり魔界に帰る事になった。

「色々世話になったな。ジャンヌ」

夜叉王丸は黒いトレンチコートを着ながらジャンヌに感謝した。

「いいえ。私の方こそ礼を言う方です。……本当に、ありがとうございました」

ジャンヌは涙声になりながら礼の言葉を言った。

半年という短い期間だったが、その半年の間で夜叉王丸に好意を抱き始めた時の帰還であるためジャンヌは悲しさを抑えられなかった。

「……」

夜叉王丸は後ろにいるジャンヌに向き直ると指で優しく目元を拭ってやった。

「……泣くな。お前には笑顔が一番似合う」

ジャンヌは我慢できないように夜叉王丸の胸に飛び込んで静かに泣いた。

暫く抱き合っていたが、呼ぶ声がして二人は離れた。

夜叉王丸が船に乗るとジャンヌを始めとした天使達が港で見守っていた。

無情に船が港を離れても天使達は船が見えなくなるまで見送った。

その中でもジャンヌは、ずっと夜叉王丸を見続けた。

船が見えなくなっても暫く見続けていた。

夜叉王丸を乗せた船は当初とは違いゆっくりとした速さで三日間を掛けて魔界に到着した。

魔界に到着すると港には仰々しい行列な夜叉王丸を出迎えた。

夜叉王丸を護る護衛騎士団である近衛兵だ。

近衛兵とは王族などを護る警護騎士団で剣だけでなく毒物などの知識や魔術、射撃なども要求される。

全ての騎士にとって近衛兵に抜擢される事は名誉ある事である。

しかし、夜叉王丸の近衛兵は不満が一杯だった。

そのためか夜叉王丸が降りて来ると怒りの表情が更に険しくなった。

「……お帰りなさいませ。皇子様」

一人の近衛兵が一步前に出て夜叉王丸に敬礼した。

黒い軍服に身を包み黒のベレー帽を被った近衛兵が敬礼すると腰まで伸びたウェーブの掛った金髪が夜叉王丸の手に当たった。

歳は夜叉王丸と同じ年で美形だが、険しい顔で綺麗よりも恐ろしさの方が増して濃紺の瞳は鋭かった。

『……不味い相手に会ったな』

夜叉王丸は嫌な予感が当たったと嘆いたが、そんな表情は出さなかった。

「出迎え御苦労だな。シルヴィア」

「勿体ない言葉を」

女、シルヴィアは険しい顔のまま一礼した。

シルヴィア・エターナ・ゾルデイスは元地獄帝国海軍の中将を務める女侯爵だったが実力を買われて夜叉王丸の近衛兵騎士団の隊長になった。

本来なら嬉しい限りだが、堅苦しい事を嫌う夜叉王丸のために戦場でも連れて行って貰えず外出の時も同行を許されないという目に合っている。

隊長を務めるシルヴィアにとっては夜叉王丸の皇子らしからぬ行動には貴族として近衛兵として我慢し難いものがある。

バルト戦も着いて行く筈が元上司であるリヴァイアサンの命令でへ

ルブライ男爵の軍団を夜叉王丸の護衛団である近衛兵を率いて倒して夜叉王丸に着いて行けなかったため機嫌が悪い。

「……この度は多大なる戦果を上げたと聞いております」

事務的な口調で話すシルヴィア。

「あ、ああ。まあ、な」

夜叉王丸はどうかして逃げる手はないかと考えていた。

「是非とも詳しい話を馬車の中でお聞きしたいです」

有無を言わさない口調で喋るシルヴィア。

高級そうな馬車の中に入ればシルヴィアの愚痴と説教話が待っているのは必定だ。

『……ど、どつする』

ダハーカ達が心配そうに見守る中でシルヴィアが迫った。

「さあ、早くの……」

「お帰りなさいませ。飛天様」

シルヴィアを押し退けるようにして現われた人物がいた。

歳はジャンヌと同じ位で着ている灰色の軍服と腰まで伸ばしたストレートの薄紫色の髪が見事に合って妖しく光って琥珀色の瞳が少女

のように純粹だった。

「おお。シャルロット」

夜叉王丸は助かった笑みを浮かべた。

シャルロット・フェルディオナ・ルーゼンベラクレス、没落した伯爵家の令嬢だったが伯爵家を再興させて騎士の称号を得た女伯爵で夜叉王丸の部下でもある。

夜叉王丸とはある事件で知り合ったのだが、それは別の物語で書く事にさせてもらう。

伯爵家を再興したシャルロットは近衛兵とは違う新たに親衛隊と呼ばれる新たな隊を作り上げた。

この隊は貴族だけの近衛兵とは違い中流階級の者でも実力者なら入れる隊として人気があり夜叉王丸の護衛部隊でもある。

堅苦しさを何より嫌う夜叉王丸にとっては友達感覚で付き合える部隊として近衛兵よりも仲良くしていてシルヴィアから目の敵にされている。

「お身体は大丈夫ですか？重傷を負ったと聞いたので城で待つ事が出来ずに来てしまいました」

心配そうな表情で夜叉王丸に近づくとシャルロット。

「ああ。大体は治った」

軽く身体を動かしてみせる夜叉王丸にシャルロットは微笑んだ。

「それは良かったです。このシャルロット、大恩ある飛天様にもしもの事があつたらどうしようかと気を揉んでいました」

「女の子に心配を掛けるとは最低だな」

自嘲気味に笑う夜叉王丸。

「いいえ。女を心配させるのも男の特権というものです」

シャルロットは夜叉王丸の頬に触れようとした。

その時だった。

横から剣が突き出されてシャルロットは反射的に避けて腰に差したレイピアに手を掛けた。

「気安く皇子様に触れるな。白豹」

シルヴィアが近衛兵騎士団の証であるS字型の鍔が特徴の両刃剣、カツバルゲルの剣先をシャルロットに向けながらドスのある声で言った。

「行き成り剣を向けるなんて近衛兵として恥ずかしくないのですか？」

シャルロットも腰に差した金とルビーで飾られたレイピアとマインゴーシュを抜いて低い声で言い返した。

「黙れ。貴様などに言われる筋合いはない」

「怒ると皺が増えるわよ。“おばさん”」

その場にいた者達が凍りついた。

「……きいさま!!」

シルヴィアがカツバルゲルを持ってシャルロットに襲い掛かった。

二人が剣を交えるのを近衛兵と夜叉王丸達は呆れた眼差しで見た。

シルヴィアとシャルロットが喧嘩するのは何時もの事だ。

「……今の内に城に行くか」

夜叉王丸の言葉にダハーカ達は頷いてシルヴィアとシャルロットが喧嘩をしている内に馬車に乗り城へと向かった。

後に残った近衛兵と親衛隊は顔を見合せてどちらともなく夜叉王丸の後を追った。

馬車に乗り城に着くと、門の前で大勢の宮廷女官達が夜叉王丸を出迎えた。

「夜叉王丸様っ。どうぞ、こちらへ」

女官達は夜叉王丸の腕を掴むと大急ぎで衣装室へと引っ張って行き後に残されたダハーカ達は茫然としていた。

「時間がありませんから手早く済ませますよ!!」

女官頭の言葉に女官達は頷いて夜叉王丸の服を脱がすと素早く黒の立襟型の軍服を着せた。

「次は髪よ!!」

ボサボサと伸びた髪を象牙の櫛で丹念に梳かした。

「お髭も剃らせて頂きます!!」

髭は女官頭自らが剃刀で剃った。

「………終わったか？」

げんなりとした口調で尋ねた。

「はい。とても凛々しいですわ」

女官達は惚れ惚れとした息を吐いた。

半年の間、髪も髭も伸ばし放題だった夜叉王丸は大きく変化した。

ボサボサだった髪は櫛で梳かされて艶が出来て無精髭も剃った事で中々の男前になった。

「これなら皇子として申し分ないですわ!!」

自信満々で頷く女官達に呆れながら夜叉王丸は立ち上がって同田貫を腰のベルトにぶら下げた。

「刀よりサーベルの方が似合いますわ」

女官頭が不満そうに言った。

「俺みたい無頼には刀が似合うんだよ」

苦笑して答えながらソフト帽の変わりに黒の軍帽を被ると黒のロングトレンチコートを羽織ると女官達に礼を言って部屋を出た。

部屋を出て客室に向かうとダハーカ達が煙草を蒸かしていた。

「随分と弄られたな」

夜叉王丸の格好を見てダハーカは目を細めた。

「だから宮廷は嫌いだ」

艶のあるポニーテールの髪型を無造作に掻き上げた。

「そう嫌がるなよ。せっかくめかし込んだんだ。どっかの令嬢でも引っ掛ければ良いだろ？」

茨木童子が左腕の義手を布で拭きながら笑った。

「冗談言つな」

心底、嫌そうな顔をする夜叉王丸。

「……皇子様。皇帝陛下、並びに王族の方々がお待ちです」

兵士が部屋の中に入って来て夜叉王丸に謁見するようにつに言った。

「分かった。直ぐに行く」

夜叉王丸は頷くとダハーカ達に促した。

ダハーカ達も頷いて八人で謁見の間へと向かった。

第十章：爵位と騒動

謁見の間に着いた夜叉王丸達を玉座に座ったベルゼブル達が真っ直ぐに夜叉王丸を見つめていた。

ダハーカ達は扉の前で止まると直立不動で立った。

夜叉王丸は一人で眼と鼻の先まで進むと片膝を着いた。

「……飛天夜叉王丸。此度の戦での戦果、誠に見事だった」

ベルゼブルが威厳ある口調で夜叉王丸を労った。

「……いいえ。勿体ない言葉です」

夜叉王丸は軽く一礼した。

「この度の戦果の報酬として階級をレリウーリアに上げヘルブライ男爵の爵位を貴様に譲り渡す」

「なっ……」

「断る事は出来ないぞ」

威厳ある口調から悪戯を企んだ口調になるベルゼブルに夜叉王丸は青筋を立てた。

「さあて、儀式も終わったし宴を始めるか」

パチンツと指を鳴らすと謁見の間から舞踏会場に来ていた。

恐らくベルゼブルの瞬間魔法で全員を連れて来たのだろう。

周りは色取り取りのドレスに身を包んだ貴族達が立っていた。

「今宵は我が息子、飛天夜叉王丸が大天使ミカエルを倒した祝いの宴！皆の者よ！存分に楽しんでくれ！？」

ベルゼブルの言葉を合図に音楽隊が演奏を始めて宴が始まった。

『あの野郎。最初から企んでたな』

恨めしい眼差しで養父を睨むがベルゼブルはどこ吹く風であった。

「この度は男爵になった事、誠におめでとございます」

一発殴ろうかと足を進めようとした時に一人の淑女が話し掛けてきた。

それを皮きりに大勢の貴族達が夜叉王丸を取り囲んだ。

「どのようにしてバルトを制圧したのですか？」

「傷の具合はどうですか？」

「男爵になって困った事があれば何時でも頼って来て下さい」

などなど大勢の貴族達が夜叉王丸を褒め称え親睦を深めようと話し掛けてきた。

『だから、夜会には出たくないんだ』

夜叉王丸は心の中で溜息を吐きながら一緒に連れて来られた夕ハ―力達を見ると同じように囲まれていた。

しかし、夜叉王丸とは違い満更でもない様子だった。

『…………あいつらが羨ましい』

小さく溜め息を吐き夜叉王丸は早めに抜け出そうと考えた。

その時、演奏がダンスの曲へと変わった。

「夜叉王丸様。踊って頂けませんか？」

淑女たちが潤んだ瞳で見えてきた。

よほどの事でない限り女性からダンスを誘われたのを断るのは男として軽蔑される。

『どうしたものか？』

暫し悩む夜叉王丸。

その仕草は誰と踊ろうかと悩んでいる姿に見えて淑女たちは溜め息を漏らした。

「…………私と踊って頂けないかしら？飛天」

聞き覚えのある声が背後から掛けられ振り返る。

裾が長く胸元と肩が露出した黒のフォーマルドレスに身を包んだ黒髪の似合う美女が立っていた。

尻まで伸びたストレートヘアーにアメジストを思わせる紫の瞳は妖しく光りラテン系の血が混ざっているのか小麦色の肌が健康な印象を与えていた。

「ペイモン」

ペイモン、地獄帝国の創立に貢献して最高裁判官を務める元天使長ルシュファアの秘書である王族で夜叉王丸の愛人でもある。

夜叉王丸を囲んでいた淑女たちは王族の登場で蜘蛛の子のように散って行った。

「……すまないな」

「お礼はダンスで返して」

慣れた手つきで夜叉王丸の肩と腰に手を回すペイモン。

夜叉王丸は溜め息を吐いてペイモンの腰と肩に手を回しダンスをする貴族たちの輪の中に入った。

「今夜は一段と決まってるわね」

「そりゃどうも」

音楽に合わせてペイモンを回す夜叉王丸。

「ヘルブライは逃走中らしいわ」

捕まるのは時間の問題だけだね、と付け加えた。

黒髪が揺れる度にペイモンの身体から放たれる妖艶な香水の匂いが夜叉王丸の鼻を刺激した。

「サタナエルは？」

「あの坊やなら監獄で看守たちに“可愛がられてるわ”よ」

ドレスから見える豊かな胸元がはち切れんばかりに揺れた。

「……そうか」

演奏が終わると同時に夜叉王丸はペイモンを放した。

「じゃあな。俺は帰る」

くるりと背を向ける夜叉王丸。

「相変わらず素っ気ないわね」

ペイモンは苦笑しながら無事に戻って来た恋人に安堵した。

ダンスを終えた夜叉王丸はシルヴィアとシャルロットも居ない事を確認して貴族たちの目を盗むようにして舞踏会場から出ようとした。

『帰ったら旅にでも出ようかな』

恐らく戦果を祝つと称して夜会を毎日のように開くか引つ張り風に遭い最終的には誰か嫁にしると言われるだろう。

前々から何人か見合い相手を紹介されていたが全て逃げ回って破綻してきたのだ。

そんな面倒臭い事に巻き込まれる気はない夜叉王丸は逃亡を計画した。

『……箱根か鬼怒川か京都なんかも良いな』

旅計画を起てていると再び背後から声を掛けられた。

「よお。飛天」

「何だ。アモンか」

夜叉王丸と話しているのは地獄でも指折りの実力者であり“炎の公爵”と呼ばれているアモン公爵。

腹黒い貴族たちの中でも彼は裏表なく付き合える数少ない心を許した友人である。

「傷の具合はどうだ？」

「まあ、多少は痛いが何とかなる」

「暫くは見合い話から逃げるために旅にでも出るか？」

悪戯っぽい笑みを浮かべるアモン。

「相変わらず人の考えを読むのが上手い奴だ」

「褒め言葉として受け取って置く」

「話がそれだけなら俺は帰るぞ。ここに居ると碌な目に合わない」
背を向けて去ろうとした時だった。

「きゃあ!?!」

舞踏会場に女の悲鳴が響き渡った。

「なんだ？」

二人は顔を見合わせた。

「夜叉王丸を出せ!!夜叉王丸は何処だ!?!」

「この声は、ヘルブライ男爵……………」

聞き覚えのある声に夜叉王丸は眉を顰めた。

悲鳴の方向に行くと片腕に掻き爪を捕らえた少女の首筋に当てて吠えるように叫ぶみすばらしい男。

姿は貧相だが、あの声と顔だけは忘れない。

「……………あれは、エレナじゃないか」

ちっと舌打ちするアモン。

「知り合いか？」

「侯爵家に嫁いで死んだ妹の娘だ」

苦々しく答えるアモン。

「俺の揉め事に巻き込んですまなかった」

夜叉王丸は貴族たちの中を抜けてヘルブライ男爵の前に現われた。

ちらりとベルゼブル達を見るとシルヴィアやシャルロット達が護っていた。

「夜叉王丸！貴様のせいで私は爵位を失ったのだ！！」

ヘルブライ男爵は夜叉王丸の姿を見ると怒鳴った。

「俺のせいだと？あれは、お前の浅はかな策略による自業自得だ」

何を馬鹿な事を言っていると淡々とした口調で喋る夜叉王丸。

「それより早く、その娘を放せ。目的は俺だろ？早く放さないと……殺すぞ」

ドスの籠った低い声でヘルブライ男爵に言う夜叉王丸。

「ふ、ふんつ。自分の立場が分かっていないようだな」

威圧されながらヘルブライ男爵は懐に手を入れて数本の短剣を取り出した。

「これを避けるなよ。避けたら、この娘を殺す」

「・・・・・・・・・・」

「食らえ!!」

ヘルブライ男爵が投げた短剣が夜叉王丸に刺さった。

折襟式の軍服が見る見る血で染まっていき何人かの淑女が悲鳴を上げた。

「ふはははは!!良いぞ。その調子だ!？」

高笑いしながらヘルブライ男爵は更に短剣を投げた。

全ての短剣が夜叉王丸の身体に刺さり血が出た。

「どうだ?痛いか?人間」

「・・・・痛いと言えば娘を解放するか?」

「貴様を殺してから解放してやる」

「無理だ。お前に俺を殺せない」

「なにを!？」

ヘルブライ男爵が短剣を投げた。

しかし、突然に突風が吹いて短剣を全て落とした。

同時に夜叉王丸が走り出して間合いを詰めてヘルブライ男爵が左手に捕らえていた少女を自分の所へ引き寄せるとヘルブライ男爵の顔を蹴った。

「ぶべらっ!!」

蛙が潰されたような声を上げてヘルブライ男爵は倒れた。

「怪我はないか？」

夜叉王丸は胸にしがみつく少女に尋ねた。

「こ、怖かった……」

少女は紫の瞳を涙で濡らしながら血で濡れた夜叉王丸の胸に抱き付いて泣き出した。

「よしよし。怖かったら？大丈夫だ」

ポンポンと夜叉王丸は少女の金色のウェーブヘアを撫でた。

「ぐっ、や、夜叉王丸!!」

ヘルブライ男爵が掻き爪を振り上げて襲い掛かって来た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜叉王丸は無言で指を鳴らすと無数の風がヘルブライ男爵に襲い掛かった。

「ぐわ!!」

風の刃でヘルブライ男爵は左腕を肩から先に掛けて失い右足も失った。

「・・・・・・・・女を盾にするなど言語道断だ。恥を知れ」

冷え切った眼差しでヘルブライ男爵を見下ろす夜叉王丸の瞳には優しさの欠片も無かった。

「だ、黙れ！人間の分際で何を・・・・・・・・ぎゃっ」

「・・・・・・・・煩い野郎だ。少しは口を閉じろ」

ヘルブライ男爵の顔を踏み付ける夜叉王丸。

「本当なら貴様を殺すのは俺だが、こいつに譲るとしよう」

後ろをチラリと見るとアモン公爵が立っていた。

「・・・・・・・・すまないな。飛天。譲ってもらって」

「別に。ただの気紛れだ」

アモンはヘルブライ男爵の髪を掴むと引き摺りながら舞踏会場を後にした。

騒ぎが収まると医療班が駆け付けて来た。

「さあ、お嬢様。こちらへ」

侍女たちが少女に言ったが少女は夜叉王丸にしがみ付いたまま首を振った。

「……俺が医務室まで運ぼう」

少し困惑した侍女たちだが、直ぐに頷くと夜叉王丸を連れて医務室へと向かった

第十一章：治療と旅行

医務室に着いた夜叉王丸は胸にしがみ付いたままの少女を優しくベツドの上に置いた。

「あ、あの、ありがとうございました」

少女は頬を赤くさせながら礼の言葉を言った。

貴族の令嬢として人の前で男にしがみ付いて泣いた事を恥じているのだろう。

「なあに。俺の揉め事に巻き込んだんだ。礼は要らないよ」

苦笑して答える夜叉王丸。

「それじゃ、俺は消えるよ」

背を向けて去ろうとする夜叉王丸。

「皇子様っ。傷の手当ては？」

老医が慌てた口調で夜叉王丸に聞いた。

「いや、娘の前でむさ苦しい男の手当てなんてしない方が良い」

「じゃあな、と言って医務室を出て行った。」

「さあて、あいつならまだ起きてる筈だから行ってみるか」

突き刺された短剣を抜きもしないで夜叉王丸は万魔殿のとある場所に向かった。

「……居るか？」

コンコンとドアを叩く夜叉王丸。

夜叉王丸がいる向かった場所は万魔殿にある小さな診療所。

ここに昔馴染みの医者がいるのだ。

暫くするとドアが開き中から白金の髪を靡かせた美女が出てきた。

ペイモンやシルヴィアなどの美しさとは違い温和で癒される美しさだった。

赤いフレームの付いた洒落た丸眼鏡から見える黒い真珠の瞳が可愛らしかった。

「まあ、飛天様。どうしたのですか？」

「夜遅くにすまないな。ソフィー。少し怪我をしてな。診てくれな
いか？」

自身の身体に刺さった短剣を見せる夜叉王丸。

「どうぞ。こちらへ」

ソフィーと呼ばれた女は眉を顰めたが、夜叉王丸を中に招き入れた。

この女性はソフィー・デルモット・エーデルという元宮廷侍女で夜叉王丸の侍女だったが現在は女医として万魔殿に診療所を設けている。

「椅子に座って服を脱いで下さい」

治療室に入れると椅子に座らせると机に医療ハサミと包帯、消毒液を用意した。

「どうなさったのですか？」

「ヘルブライに襲われてな」

「飛天様なら傷など負わない筈ですから、人質を取られたのですか？」

短剣を抜きながらソフィーは推測した。

「ああ。お陰でこの様だ」

「幸いにも傷口は浅いです。心配いりません」

全ての短剣を抜いて消毒液を染み込ませたガーゼを傷口に張った。

「すまないな」

「いいえ。どんな時も患者が来れば治療するのが医者として務めます」

ガーゼの上から包帯を巻き笑顔で答えるソフィー。

「はい。これで大丈夫です」

「ありがとうございます。金は今度払うよ」

椅子から立ち上がり血で濡れた軍服を持って部屋を出ようとした。

「あの、軍服、私が洗いますよ？それに、今夜は遅いですし泊まった方が……」

さつきまでの態度と一変して赤面しながら途切れた口調で喋るソフィー。

「一人暮らしの女の家に住みたいが無頼が泊まる訳にはいかないだろう？」

苦笑する夜叉王丸。

「い、いいえつ。私は大丈夫です。それに、飛天様となら……」

「あ？何て言った？」

最後の方が聞き取れずソフィーに尋ねる夜叉王丸。

「い、いいえ！何でもありません！！そ、それより今日は泊って下さい！？」

「そこまで言うならお言葉に甘えようかな」

ソフィーの態度に夜叉王丸は苦笑して答えた。

「そ、それじゃ、こちらへ」

治療室を出て案内された場所は客室だった。

机とソファアが二つと質素な造りだった。

「毛布をお持ちします」

どこか嬉しそうに言いながら部屋を出るソフィー。

「そう言えば、ダハーカ達はどうしてるかな？」

勝手に置いてきたが、恐らく帰っているだろうと思った夜叉王丸は毛布が来るのを待たずにソファアに横になると眠りに着いた。

次の日の朝、ドアを叩く音で起きた。

「朝は低血圧なのに……」

ギロリと鋭い眼差しを送る夜叉王丸。

彼の低血圧は酷いもので眼つきが破滅的に悪く初対面の者には最悪の印象を与えている。

「飛天様。起きていますか？」

「ああ。少し待っててくれ」

コートの中からサングラスを取り出して掛ける夜叉王丸。

「入って良いぞ」

失礼します、と断ってソフィーが入って来た。

「朝食をお持ちしました」

焼いたトーストと半熟目玉焼きとコップ一杯のコーヒーを二人分もったソフィーが机に置いた。

「私も一緒にして良いですか？」

昨日の態度とは違い平常だった。

「ああ」

サングラスを掛けた夜叉王丸を不思議に思わずにソフィーは向き合うように一人用のソファアに座った。

「すまないな。休ませて貰った上に朝食もご馳走して貰って」

夜叉王丸はトーストを齧りながら感謝した。

「いいえ。他ならぬ飛天様ですもの。お気になさらずに」

コーヒーの入ったカップを持ちながらソフィーは答えた。

「ブルーマウンテンを使っているな？」

「はい。少しお金が入ったので奮発して買ったちゃいました」

クスリと笑うソフィーに釣られて夜叉王丸も微笑んだ。

「この濃くのある香りが実に良い」

トーストと目玉焼きを食べ終わるとコーヒーカップを取って香りを楽しむ夜叉王丸。

「ちゃんとミルク入りですからね」

ソフィーの言葉に夜叉王丸は苦笑した。

「ありがとう。ソフィー」

「いいえ。これも元宮廷侍女としての役目ですから」

二人は互いに笑い合ってコーヒーを飲んだ。

それから朝食を終えた夜叉王丸はソフィーに礼を言って診療所を後にしてバラテへと向かった。

バラテに帰ると予想通りダハーカ達は帰っていた。

「お前もゼオンと同じく朝帰りかよ」

ソファーでジョーカーを蒸かしながらダハーカは不機嫌そうに言った。

「ゼオンも？って事は、また小遣い稼ぎか」

元罪人のゼオンだが、女受けが良く貴族の未亡人や既婚者と愛人関係を持つなどプレイボーイの顔を持っていた。

「お前がヘルブライの野郎をしつかり殺しておかないからいけないんだ」

苛立った様子でジョーカーを灰皿で揉み消すダハーカ。

「？何かあったのか？」

「ヘルブライが乱入して来たせいで、お預けを食らったんだと」

茨木童子が竹竿の手入れをしながら答えた。

「なるほど。そりゃ悪かった」

悪ぶった様子もみせず謝る夜叉王丸。

「所でフェンとヨルムは？」

「フェンは昼寝でヨルムは経済雑誌を読んでる」

「そうか。取り合えず、お前らに言っとく。旅に出かける」

「旅？唐突にどうした？」

「恐らく、そろそろフォカロール辺りが俺を呼び出しに来る筈だから」

逃げる」

「分かった。後は任せろ」

茨木童子は竿を布で包みながら言った。

客人の接待などでは茨木童子が一番得意だった。

フェンリルとダハーカ、ゼオンは気が早いため向かずヨルムンガル
ドは笑顔で毒を吐くため喧嘩になり易い。

鶴に関しては無愛想で無表情のため論外だ。

それに比べて茨木童子は見た目に寄らず子供好きで接待も得意だ。

「それじゃ、後は頼む」

夜叉王丸は部屋に戻ると黒のジャケットを着てソフト帽を被ると手
早くオーダーメイドで作らせた黒の革トランクに必要な物を入れる
と人間界へと通じる門を開き魔界を去った。

その五分後にフォカロールが来て茨木童子が接待に当たったのを夜叉
王丸は知らない。

第十二章：温泉宿とデート

「……はぁー、良い湯だ」

心地よい湯に浸かりながら夜叉王丸は息を吐いた。

何処に行くか悩んだ末に夜叉王丸は京都の嵐山の温泉に向かう事にした。

宿は築三百年の老舗旅館で予約が一年以上ある所だが夜叉王丸はフリーパスで泊っている。

この宿には現女将の曾祖母の頃から泊っていて、経営に困った時に助けた事で予約無しで泊れるようになった。

歴代女将は夜叉王丸が人外だと代々教えられて他言無用と堅く言われているので洩れる事はない。

仮に言った所で誰も信じないのが関の山だが、念には念を入れるという事らしい。

「さあて、食事まで時間はあるし観光でもするか」

湯から出ると夜叉王丸は私服に着替えて宿を出て行った。

「嵐山はいつ来ても風流がある」

黒のソフト帽を深く被りながら夜叉王丸は道を歩いた。

京都の嵐山は静かで何処か奥ゆかしい雰囲気を出して夜叉王丸の心を癒していた。

周りからは奇異の眼で見られていたが気にしないで歩き続けた。

他人にどう見られようと自身の信念は曲げないのが夜叉王丸だ。

暫く歩いていると前方から髪を乱しながら走って来る少女がいた。

「おじ様。助けて!!」

少女は夜叉王丸の背後に回るとしがみ付いた。

「おいおい。行き成りどうしたんだい？」

背後の少女に尋ねようとしたが前方から見ると人相の悪い男が二人近づいてきた。

「おい。その後ろにいる餓鬼を渡せ」

一人の男が後ろにいる少女に指を指した。

「お願い、助けて。私は何もしてないの」

少女はしがみ付いたまま懇願した。

「どういう訳か知らんが女を口説くなら、もう少し態度を改めたらどうだ？」

夜叉王丸の言葉に男が怒ったのか胸倉を掴んで来た。

「てめえ、俺に指図するのか？」

「指図じゃなくて忠告だ。それから俺の服に汚い手で触るな」

胸倉を掴んでいた男の手を掴むと軽く捻った。

「ぐわっ、いてえ!!」

「たくっ。せつかくの気分を壊しやがって」

夜叉王丸はたじろいでいる男を睨んだ。

「俺は機嫌が悪い。目の前から消える。さもないと二人揃って病院送りにするぞ」

ギロリと睨むと男は早々と去って行った。

「お前も消える」

掴んでいた腕を離すと男は一目散に逃げて行った。

「まったく。せつかくの気分が台無しだ」

夜叉王丸はコートの中からセブンスターを取り出して口に銜えた。

「すごおい。おじ様って強いんだ」

後ろに隠れていた少女が笑いながら夜叉王丸を見た。

歳はリリムよりも一歳、二歳ほど下で腰まで伸びた黒髪に赤色の瞳が何とも妖しい光を放っていた。

「嬢ちゃんも今度からは気を付けな」

要件を言つと夜叉王丸は歩きだした。

「あつ、ちよつと待ってよ。おじ様!」

少女は慌てて夜叉王丸を呼び止めた。

「まだ何かあるのか？」

「助けてくれた礼にデートして上げる」

「生憎だが子供に興味はない」

夜叉王丸は見向きもせず歩き始めた。

「えー!そんな待つてよ!？」

少女は夜叉王丸に追い付くと腕を絡めてきた。

「お、おいっ」

少女の豊かな胸が夜叉王丸の肘に当たった。

「おじ様は興味なくても私は、おじ様みたいに少し不良みたいな男の人が良いの」

少女が笑いながら夜叉王丸を引つ張った。

「さあ、早くデートデート！」

「……分かった」

夜叉王丸は溜め息を漏らしながら少女に着いて行った。

それから二人は京都の街を歩き回った。

最初に清水寺を観光してから金閣寺、平等院などを見て回った。

「ねえ、おじ様。私たちって恋人に見えるかな？」

「恋人じゃなくて歳の離れた兄弟か柄の悪い男とつるむ不良娘じゃねえか」

「もっつ。こついう時は恋人同士だつて言つのが常識でしょ？」

「生憎と“非”常識人なんでね」

途中で談笑なども混ぜながら二人は、新京極などを回って時間は何時しか夜になっていた。

「さて、もう子供の遊ぶ時間は終わりだ」

夜叉王丸は少女の腕を放した。

「えー！まだ良いでしょ？」

少女は不満そうな顔だった。

「今日は終わり。また今度な」

夜叉王丸は背を向けて歩きだした。

「じゃあ、明日迎えに行くからねー!!」

後ろから少女が大声で喋るのを夜叉王丸は苦笑して片手を上げた。

宿まで帰る道を歩いていた夜叉王丸の足が不意に止まった。

辺りは民家などがあつたが、人は殆ど歩いていなかった。

「……おい。そろそろ出て来いよ」

昼間に夜叉王丸にやられた二人組の男が現われた。

「昼間は油断したが、今度は負けねえ」

二人はバタフライナイフを取り出した。

「古都の夜に、そんなナイフは似合わんぞ」

夜叉王丸はセブンスターを取り出してジッポで火を点けた。

「うるせえ!!」

二人組は左右から襲い掛かって来たが夜叉王丸は慌てずに両脇から
S & W M 2 9 を取り出して鼻先に当てた。

「これ以上、無粋な真似をすると殺すぞ」

ガチリと撃鉄を指で起こす夜叉王丸。

「そ、そんな銃を持っている訳がないつ。偽物だ!!」

右の男が強がった口調で言った。

「偽物かどうか試してみるか？」

引き金に力を入れる夜叉王丸。

「ひい！わ、悪かった！俺らが悪かった!!」

二人はナイフを捨てると一目散に逃げた。

「……ふん。雑魚が」

夜叉王丸は人差し指でクルリとマグナムを一回転させるとホルスタ
ーに入れて何事も無かったように歩き始めた。

宿に帰った後は女将が用意した夕食を食べて部屋の露天風呂に入り
就寝しようとしたが人間界で暮らしていた時に買った携帯が鳴った。

「もしもし？」

「飛天か？俺だ」

携帯の相手は茨木童子だった。

「どうした？」

「お前が出発してから直ぐにフォカロルが来てな」

「それで？」

「見合い話ではなく住み家について話があったらしい」

「住み家？」

「ああ。バラテを出てヘルブライの屋敷に住めだと」

「冗談じゃない。あんな悪趣味な屋敷に誰が住むか」

夜叉王丸はハンガーに掛けてあったコートの中からセブンスターを取り出して口に銜えた。

「俺もそう思つて断つたんだが、気に入らないなら屋敷を壊して新しく立て直しても構わないと言っている」

「資金は？」

「ゼオンの愛人が都合を付けてくれるらしいぜ。手切れ金代わりだと」

「手切れ金？」

「娘夫婦が面倒を見るらしいから会えないんだと」

「ほおう。随分と優しい御婦人だな」

「ああ。後でお前からも礼を言っとけ」

「そうする。それじゃ、明日にでも帰る」

「いや。そんな急じゃなくて良い。俺たちも準備があるから三日くらい泊っとけ」

「分かった」

携帯を切り夜叉王丸は机に置いてあつたマッチで火を点けた。

「立て直して良いなら根元から立て直すか」

紫煙を吐きながら夜叉王丸は楽しそうに笑った。

翌日の朝、夜叉王丸は部屋の外から仲居が呼ぶ声で目を覚ました。

「……………どうしました？」

出来るだけ低い声で話さないように努力した。

「お客様がお見えになっています」

「客？」

「はい。高校生くらいの少女です」

「……………」

夜叉王丸は昨日の少女が頭に浮かんだ。

「……分かりました。直ぐに準備するので待たせて貰えませんか？」

「畏まりました」

仲居の気配が消えてから夜叉王丸は直ぐに起きてジーパンとジャケツトの上からコートを羽織るとソフト帽を被って革トランクを持つと部屋を出た。

『まさか本当に来るとは……』

下に降りると浅葱色の振袖を着た昨日の少女が立っていた。

昨日のようにデニムのミニスカートに青色のカーディガンと娘らしい格好ではない事から見た目より大人に見えた。

「あつ、おじ様」

少女は夜叉王丸を見ると微笑んだ。

「まさか、本当に来るとは恐れ入った」

「うふふふ。昨日はありがとう。“飛天夜叉王丸様”」

「……ほおう。俺の本名を知っているとは、やはり嬢ちゃんも“人ならざる者”だったのかい」

夜叉王丸は目を細めた。

「え？分かったの？」

「ああ。気で分かった」

「これでも上手く隠した積もりなのに……」

少女は悔しそうに頬を膨らませた。

「まだまだ修行が足りないぞ」

ポンポンと少女の頭を撫でる夜叉王丸。

「ぶう。それより、私の屋敷に来て下さい」

唐突に要件を言う少女。

「嬢ちゃんの屋敷？」

「はい。父が会いたいと言っているんです」

「俺みたいな“元”人間が行って良いのかな？」

「父は小さい事を気にするほど器が小さくありません」

「そうか。分かった。行っても良いぜ」

「ありがとうございます。それじゃ、車を待たせているから来て下さい」

少女に促されて夜叉王丸は女將に礼を言つと荷物を持って宿を後にした。

第十三章：妖鳥族の里

黒のロールスロイスに乗ると車は何処へともなく走り出した。

「まだ聞いてなかったな。嬢ちゃんの名前は？」

足を組みながら夜叉王丸は向き合うように座った少女に尋ねた。

「私は緋夜。妖鳥族の姫です」

「姫さんが人間界で遊び回って良いのかい？」

「夜叉王丸様だって皇子なのに人間界に観光旅行に来てるじゃないですか」

「俺は傷を癒すために来たのさ。それに二人の義親父はピンピンしてるから問題ない」

笑いながら答える夜叉王丸に緋夜も釣られて笑った。

「夜叉王丸様のお父上って、どんな方なんですか？」

「一人は真面目で父親的存在でもう一人は馬鹿でエロの塊だ」

「真逆の評価ですね」

「本当の事だからね」

クスリと笑う夜叉王丸。

「緋夜殿の父上は？」

「そんな殿なんて付けないで緋夜って呼んで下さい」

「それじゃ緋夜。父上はどんな方だい？」

「んー、頑固で口煩い爺かな」

運転している男は小声で姫様と戒めた。

車に乗る事、一時間くらいして里に着いた。

周りは山々に囲まれた場所で京都ではない所を見ると、恐らく瞬間魔法が異次元の扉を開いて里に着いたのだろう。

車から降りると乾拭き屋根の民家が建ち並んでいて中央に巨大な屋敷が立っていた。

「我が里へようこそ。地獄帝国飛天夜叉王丸男爵様」

緋夜は車から降りると丁寧に一礼した。

「ここが妖鳥族の里か。自然に溢れて良い場所だ」

夜叉王丸は里の出す雰囲気に心が和む気がした。

「どうぞ。屋敷はこちらです」

緋夜が先導して歩きだした。

途中で里人が緋夜を見ると舞姫と呼んで笑い掛けて夜叉王丸を見ると恋人などからかった。

「この者は俺が緋夜の恋人だと思っているようだな」

「ふふふふ。嬉しいですか？」

「さあ？何とも」

辺り触りのない返事をした。

屋敷の門まで行くと刀を差した門番が二人いた。

「お帰りなさいませ。姫様」

門番が一礼した。

「ただいま。こちらが私を助けた夜叉王丸様」

「臣下として姫様を助けて頂きありがとうございます」

夜叉王丸に一礼した。

何だか照れ臭い様子で夜叉王丸は鼻先を掻いた。

屋敷に入ると何人かの綺麗な着物を着た女中が来て二人を案内した。

「こちらです」

中に入ると上座に初老ながら驚色の瞳が鋭い男が座っていて左右に屈強な男たちが座っていた。

「父上。ただいま帰りました」

緋夜は態度を一変して慎ましい態度を取った。

「御苦労だったな。緋夜。そちらが……?」

鋭い瞳が夜叉王丸を見た。

「ええ。飛天夜叉王丸様です」

夜叉王丸は帽子を取り一礼した。

「初めまして。飛天夜叉王丸です」

「こちらこそ。私は風疾と言います。先日は娘がお世話になりました」

風疾は夜叉王丸と緋夜を中に入れると腰を折るように勧めた。

「貴方様の噂は妖怪王、魎月様から聞いております」

「あいつが?」

夜叉王丸は友人であり日本妖怪王の魎月を思い出した。

最後に会ったのは、人間の娘と祝言をする時であった。

「人間出身でありながら、悪魔になり大天使ミカエルを打ち倒した猛将と聞き及んでおります」

風疾は皺がある顔で笑った。

「いえ。私など猛将と言われる器ではありません。全ては部下が働いてくれたからです」

「お話の通りですね。部下思いの方だ」

「まあ、話などは酒など飲みながらお話でも……」

「お待ち下さい」

風疾の声を遮り一人の男が前に出てきた。

肩まで伸びた黒髪と鷲色の瞳が何とも男前である。

「将皇。客人の前で無礼だぞ」

一人の男が将皇と呼ばれた青年を叱った。

「無礼は承知です。この将皇、是非とも夜叉王丸殿と手合わせしたいのです」

「噂では夜叉王丸殿は天竺一の剣士である摩利支天殿を師に持ち腕前は互角と聞いております。是非とも剣の相手をして欲しいのです」

将皇の瞳は夜叉王丸を侮っている気があった。

「将皇。私の恩人である夜叉王丸様に刃を向けるのですか？」

緋夜が真紅の瞳に怒りを宿らせて将皇を睨んだ。

「強制ではありません」

『断れば弱虫とか腰ぬけと蔑み気だな』

夜叉王丸は面倒な事になったと頭を抱えたが、低血圧だった事もあり少し挑戦的な態度を取った。

「良いでしょう。私でよければ相手になりましょう。ただし、私に剣を抜かせる事が出来ればの話ですが？」

コートの中から黒漆を塗った鉄扇を取り出す夜叉王丸。

「この私を馬鹿にしているのですか？」

「正直に言えば、貴殿では私に剣を抜かせる事は出来ないでしょう」

「ならば抜かせてみせましょう」

将皇は怒りを押し殺した顔で部屋の中庭に出た。

「少し庭を汚す事を許して下さい」

風疾に謝罪して夜叉王丸も庭に出た。

将皇は腰の刀を抜いて正眼に構えた。

「何処からでもどうぞ」

夜叉王丸が鉄扇で首を叩くと将皇が一気に間合いを詰めて振り下ろしてきた。

振り下ろされた刀を横に避けるとあまりに無防備な脇腹に鉄扇を打ち込んだ。

「ぐっ……」

「真剣での勝負なら致命傷ですよ」

片膝を着く将皇に夜叉王丸は冷やかに言った。

「隙あり!!」

将皇が刀を横に払い夜叉王丸の足を斬ろうとしたが軽くジャンプして刀の上に乗った。

「まだやるか？」

左手をバキバキと鳴らす夜叉王丸。

「……いえ。私の負けです」

将皇は首を垂れた。

「貴方を甘く見た事を許して下さい」

「慣れてますから」

夜叉王丸は苦笑して将皇に手を差し出した。

「さっきの振りは見事でした」

将皇は夜叉王丸の手を取ると一礼した。

「ありがとうございます。とても参考になりました」

二人が肩を並べて部屋に戻ると風疾が一礼した。

「里一番の剣士である将皇を糸も容易く倒すとは、流石ですね」

「いえ。失礼な真似をして申し訳ありません」

「とんでもない。将皇にも良い経験になったと思います」

風疾は笑いながら夜叉王丸を自分の隣に進めた。

「いえ。私は下座で……」

やんわりと断ろうとしたが、強引に座らせられ夜叉王丸の隣には緋夜が自然な動作で座った。

風疾がパンパンと手を叩くと何人もの女中が料理などを運んで来て楽師たちが和楽器で演奏を始めた。

「さあ、先ずは一献」

風疾が夜叉王丸に盃を持たせると朱色に塗られた片口の銚子で日本

酒を注いだ。

注がれた酒の匂いは鼻を強く刺激する米の匂いに近かった。

「この匂いから察するに宮城の酒ですね」

風疾は驚いた顔になった。

「飲まずに分かるのですか？」

「ある程度なら分かります」

質問に答えてから酒を一気に飲んだ。

口の中に辛さが広まったが大した辛さではない。

「中々の味ですね」

夜叉王丸は風疾が持っていた銚子を取って風疾の盃に注いだ。

「これはこれは、ありがとうございます」

風疾は頭を下げた。

「これ、緋夜。ぼうつとしてないで夜叉王丸様の盃に酒を注がぬか」

隣に座っていた緋夜は慌てたようにして夜叉王丸の盃に銚子で注いだ。

その手はぎこちなく酒を零してしまった。

「申し訳ありません。年頃の娘でありながら碌に盃の注ぎ方も知りませんで」

「幼い頃に母親を亡くしてしまって、男一つで育ててしまったので……」

風疾はすまなそうに謝った。

「母親に似て外見は良いのですが、如何せん気遣いが足りなくて未だに嫁の貰い手がありません」

「それなら私も同じ事です。この歳で一人身ですので養父などからは結婚しろと言われています」

苦笑交じりで答える夜叉王丸。

「緋夜殿なら心配ないですよ。直ぐに良い夫に恵まれます」

「気遣いある言葉ありがとうございます」

「ちょっと父上。誰も嫁に貰い手がないんじゃないじゃなくて、私に見合う男がいないだけでしょ？」

緋夜が夜叉王丸の右側から口を尖らせて怒った。

「何を言う。わしが紹介した婿候補達を次々と怪我をさせているのではないか」

風疾が緋夜を鋭い瞳で睨んだ。

「だって父上の紹介する男って親の権力に頼る餓鬼ばっかじゃない」

「私の好みは夜叉王丸様のように強くて男らしい方なの」

するりと夜叉王丸に擦り寄る緋夜。

「ねえ夜叉王丸様。私を嫁に貰ってくれませんか？」

「私などより将皇殿のような方を夫にした方が良いでしょう」

顎で大勢の女中に囲まれる将皇を見た。

「将皇は堅苦しくて嫌いです。その点で夜叉王丸様は堅苦しくありません」

「私自身、堅苦しいのが嫌いですからね」

「だから、夜叉王丸様と結婚すれば楽しいと思つんです」

「そうですかね？」

夜叉王丸は緋夜の言葉を巧みに避けながら酒を飲んだ。

楽師達の演奏が止み色取り取りの衣装に身を包んだ踊り子たちが出て来て踊り始めた。

それを合図にして楽師達の演奏が再開された。

「夜叉王丸様。少し失礼しますね」

緋夜は夜叉王丸から離れると別の部屋へと消えた。

「夜叉王丸殿。これから緋夜が踊るので見ていて下さい」

風疾が顔を蒸気させながら喋った。

暫くすると赤袴を履いて胸や肩、頂などが露出して額に白い鉢巻をして腰には装飾品を付けた中華剣を差した緋夜が踊り子たちの間に入って踊り始めた。

「ほおう……」

夜叉王丸は細い瞳を更に細めた。

緋夜の舞は型に嵌まった伝統的な舞や能などでは表現できない自然な動作が出ていて音楽が更に緋夜の舞を美しく見せていた。

「……………」

夜叉王丸は疼く身体を落ち着かせるように懐から竜笛を取り出した。

「夜叉王丸様？」

風疾が竜笛を見た。

「少し演奏してよろしいですか？」

風疾は一瞬おどろいたが、直ぐに人懐こい笑みを浮かべて頷いた。

夜叉王丸は竜笛を口に運ぶと深呼吸をして吹き始めた。

竜笛を演奏していた楽師は目をみはったが、直ぐに気を効かせたのか演奏を止めた。

家老達も酒や料理に伸ばす手を止めて夜叉王丸の演奏と緋夜の舞に魅入った。

舞が終わると夜叉王丸も竜笛の演奏を止めた。

すると待っていたかのように大拍手が鳴った。

素晴らしい！！と称賛する声が嵐の雷のように聞こえた。

将皇は取り囲んでいた女中たちを押し退けると夜叉王丸に跪いて弟子にしてくれと懇願してきた。

「お願いです。私を弟子にして下さい！！」

「将皇殿。顔を上げて下さい」

夜叉王丸は苦笑して将皇を立てせようとしたが頑として動かなかった。

周りは将皇の様子を見て大笑いをして宴は更に盛り上がった。

宴が終わったのは夜の深夜で夜叉王丸は人間界に帰ろうとしたが風疾が泊まるように言ってきたので断るのも失礼と考えて泊まる事にした。

屋敷の大浴場で疲れを癒し部屋に戻ると一人の黒髪の似合う女性が白い寝巻き姿で布団の上に正座していた。

「……………お待ちしておりました」

女性は夜叉王丸に三つ指を立てて深々と頭を下げた。

「風疾殿の命令かな？」

夜叉王丸が尋ねると女性は首を横に振った。

「いいえ。私の意思で参りました。どうか、お情けを……………」

潤んだ瞳で上目使いに見上げる女性。

白い寝巻きの隙間から見えるポリウムのある胸元が妖しく見えた。

『……………据え膳は頂いて良いよな？』

少し考えたが、自身の欲望に忠実になる事にした。

片膝を着いて女性の肩に触れると微かに肩が震えるのを感じた。

「怖がる事はない。直ぐに気持ち良くしてやる」

女性を優しく布団に押し倒す夜叉王丸。

「あ……………」

夜叉王丸の唇が首にキスをすると女性は甘い声を上げた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜叉王丸はクスリと笑いながら舌で女性の首を舐めた。

女性は小さく身を擦ったが抵抗する気はないようだ。

首を愛撫しながら左手で髪を撫でながら右手で豊満な胸を弄んだ。

「あつ、夜叉王、丸様・・・・・・・・あああ」

女性は甘ったるい声で啼きながら夜叉王丸の首にしがみ付いた。

その後しばらく女性の喘ぎ声が部屋の中から聞こえてきた。

行為が終わると女性は泥のように意識を失い夜叉王丸の胸に抱かれて寝入っていた。

夜叉王丸は女性の髪を撫でながら煙草を蒸かして天井を眺めていた。

不意にバルトにいる筈のジャンヌの笑顔が天井に浮かんで消えた。

第十四章：首都へ引越し

宴の翌日の朝、夜叉王丸は身支度を揃えたと妖鳥族の里を出て行った。

見送りは昨夜に抱いた女性だけだったが、それは女性が望んでいた事でもあると夜叉王丸は考えていた。

女心を組まない男は最低だと思っている夜叉王丸は女心を組んで女性一人に見送られて里との境界線を越えて人間界へと戻った。

人間界に戻った夜叉王丸はサングラスを掛けてコートからセブンスターを取り出してジツポで火を点けると道路に面した歩道を歩きだした。

「・・・ふうー」

夜叉王丸は紫煙を吐きながら残り一日を何処で過ごそうかと考えていたが、何かを閃いたのか立ち止まった。

「魍月の家にも行くか」

数百年前に王として隠居したが影響力は未だに強く実力も計り知れない。

義弟と弟子も魍月と一緒に隠居して思い思いの生活をしていると聞く。

魍月は横浜の一軒家で探偵稼業を営みながら妻と二人で暮らしてい

る筈だ。

「ここからだと六、七時間は掛るな」

車などでは時間が掛るが魔術を使えば直ぐに行ける。

だが、夜叉王丸は敢えて魔術を使わない事にした。

「旅は行く過程を楽しむものだ」

誰に言う訳でもなく夜叉王丸は再び足を動かした。

一時間くらいしてドライブインに着きタクシーを拾うと京都駅まで連れて行ってもらった。

「お客さんは東北から来たんですか？」

タクシーを運転する気立ての良さそうな中年男性が聞いてきた。

「何でだい？」

「いえ。言葉の中に東北訛りがあったものですから」

「よく分かったね。確かに東北出身だよ」

夜叉王丸は苦笑して答えた。

「里帰りか何かですか？」

革トランクを見て帰郷するのかと思ったのだろう。

「いや。今回は横浜にいる友人を訪ねに行くんだ」

「そうなんですか？」

「ああ。実家からは縁を切られていてね」

運転手は申し訳ないと謝った。

「気にしなくて良いよ。もう何十年も前だから」

話しを打ち切ると他愛もない話をして駅まで向かった。

「楽しい時間だったよ」

運転手に一万円多く渡して礼を言った。

「また機会があればご利用ください」

チップを貰って運転手は笑顔になりながら去って行った。

駅に着いた夜又王丸は神奈川行きの新幹線に乗ってから颯月に携帯で連絡した。

「夜に横浜に行くんだが、大丈夫か？」

「ああ。藍璃も大丈夫だと言っている」

「分かった」

短い会話で連絡を終えるとトランクを隣の席に置いて帽子を深く被ると眠りに着いた。

たつぷりと東京に着くまで熟睡した夜叉王丸は革トランクを持つと駅から降りてタクシーを拾い横浜に向かった。

横浜の魎月の家に着いたのは午後九時半になってからだ。

ドアノブを叩くと中から女性の声が出てドアが開いた。

「こんばんは。飛天さん」

黒髪を後ろで結って可愛らしいエプロン姿で出て来たのは魎月の妻で藍璃と言う。

「よお。藍璃ちゃん。久しぶり」

ニツコリと笑う夜叉王丸。

「勇牙さんー。飛天さんが来ましたよー」

中に入ると奥からグレーのランニングシャツに黒のジーパン姿の同い年くらいの男が出てきた。

「よお。魎月」

片手を上げて笑い掛けると男も笑いながら片手を上げた。

「久しぶりだな。飛天」

二人は再会を喜んだ。

「藍璃。すまないが酒棚からヘネシーのコニャックを一献とってきてくれ」

「分かりました」

藍璃は直ぐに地下室へと続く階段へと姿を消した。

「行き成り来るって事は気紛れだな？」

一人用のソファーに夜叉王丸を座らせると麴月、勇牙は苦笑して聞いた。

「まあな。残り一日の休暇をお前の家で過ごすのも悪くないと思っ
てな」

夜叉王丸の答えに勇牙は苦笑した。

「独身だからこそ出来る行動だな」

「まあな。お前の場合は無理だろ？」

「ああ。だけど、一人身には得る事の出来ない温かい家庭があるか
らな」

互いに独身と家庭持ちを話題に他愛無い話しをしていると藍璃がコ
ニャックを持ってきた。

勇牙は藍璃から受け取ったヘネシーのコニャックを氷の入ったグラ

スに入れて夜叉王丸に渡した。

「久しぶりの再会に乾杯」

二人はグラスを合わせてコニヤックを口にすると藍璃も混ぜて談笑した。

深夜二時になって眠くなった藍璃と一緒に勇牙も寝室に行き夜叉王丸は二人用のソファアールで眠る事にした。

翌日の午後になってから夜叉王丸は魎月と藍璃夫妻に見送られながら魔界へと帰還していった。

魔界に帰った夜叉王丸はバラテに戻ると引越しの準備をするヨルムンガルドに出迎えられた。

「お帰りなさいませ。主人様」

執事服に身を包み兵士に命令するヨルムンガルドは夜叉王丸の姿を見ると一礼した。

「ああ。ただいま。後どれ位で準備が終わる？」

「十分後かと」

「そうか。俺の荷物は？」

「兄さんと茨木殿が運んで行きました」

「って事はダハーカ達も一緒か？」

「左様です」

「そうか。俺は取り合えず万魔殿に行くから後は頼む」

「畏まりました」

ヨルムンガルドは一礼すると再び作業の命令に戻った。

翼を出して万魔殿に向かった夜叉王丸は今頃になって見上げ物を買ってくるのを忘れていた事に気付いた。

第十五章：女難の日々

万魔殿に着いた夜叉王丸は追い付いたヨルムンガルド達を集めて会議を開いた。

「先ず、この屋敷に住みたい奴はいるか？」

夜叉王丸の質問に挙手した者は一人もいなかった。

「屋敷を壊すにして、どんな屋敷が良い？」

「俺はお前の好みに従う」

ダハーカを始めとした隊長達は夜叉王丸に意見を委ね部下達も夜叉王丸の好みで良いと言った事で夜叉王丸が決める事になった。

「まだ決まってるから先に屋敷を壊そう」

取り合えずヘルブライ男爵の屋敷から使えそうな物を全て取り払ってから砲撃部隊と奇襲部隊の攻撃で屋敷を攻撃した。

巨大な音と爆発音に近所に住んでいた者は何事かと飛び出したがヨルムンガルドが説明して事は荒でなかった。

見る見る内に屋敷は壊れていき庭園なども焼け野原となったが、広大な土地のため時間は掛り約二時間かけて残骸の山にした。

それから一時間かけて残骸を片付けてから屋敷作りに乗り出した。

夜叉王丸の考えとしては和の良さや洋の良さを合わせて実用的にも芸術的にも立派な屋敷に城にしようと考えていた。

幸いにもヘルブライ男爵の土地は広く城を一つ建てても有り余る程のため訓練所や兵器生産所なども設けられる。

「かなり時間が掛るから手始めにモット・アンド・ベリーを作るぞ」

夜叉王丸の言ったモット・アンド・ベリーとは、ヨーロッパにおける築城形式の1種で、10世紀から12世紀のフランス、イギリスで多く建築された。

モットは小山で、ベリーは外壁を意味し、平地や丘陵地域の周辺の土を掘りだして、堀（空堀が多かった）を形成し、その土で小山と岡を盛り上げた。

小山は粘土で固めてその頂上に木造または石造の塔（天守）を作り、岡を木造の屏で囲んで、貯蔵所、住居などの城の施設を作るものがある

突撃部隊と弓弩部隊で堀などを掘って騎兵、戦車部隊が小山を築き上げ奇襲部隊は木材などを運んで見張り台などを作り始めて夜になつて見張り塔と住居が完成した。

「よおし。今日は、ここで終わりだ」

顔を泥だらけにしながら夜叉王丸は作業を中止させた。

「また明日もあるが、今日は疲れを癒す為に飲みに行くぞ!!」

兵士たちは歓喜の雄叫びを上げた。

「さあ、行くぞー!!」

夜叉王丸が先頭を切り風の翼たちが万魔殿の酒場へと向かおうとしたが、前方から万魔殿の市民たちがやって来た。

中央から代表らしき身形の良い男が出て来た。

彼はギルドの長で貴族の横暴を訴えた時に助けた男だった。

「この度は男爵になったこと喜び申し上げます」

ペコリと一礼する男。

「夜叉王丸様がヘルブライに代わる新たな貴族様で助かりました」

「日頃の礼も兼ねて今宵は酒などをご馳走させて頂きます」

男が顎をしゃくると酒や食糧が出された。

「ありがたく頂戴するよ」

男に礼を言っただけで夜叉王丸は酒などを受け取った。

「お前ら。今日は無礼講だ。たっぷりと飲め!!」

イエーイ!!と大声を上げて兵士たちは酒や食糧を食べ始めた。

「あんたらも一緒に騒いでくれ」

ギルドの長たちも混ぜて宴は更に盛り上がった。

「男爵になつても助けて下さいよ？」

何人かの商人が夜叉王丸に酒を進みながら笑い掛けてきた。

「安心しろ。ちゃんと助けてやるよ」

商人たちは礼を言つて酒を飲み交わした。

貴族や軍が横暴する中で夜叉王丸は何時も弱者である民衆の味方であつた為^レに民衆の人氣は絶大だつた。

宴の音を聞いて続々と集まる民衆。

飲めや歌えの大盛り上がりで宴に静寂は訪れなかつた。

翌朝になると再び築城を始めたが、宴に参加した者たちも築城作業に参加したため作業はスムーズに進んだ。

一通りの建物を完成させると次は本格的に城を築き始めた。

最初に空堀と水堀を作り次に三重に城壁で周りを覆つてから木製とは別に石材で作つた見張り台を築き上げた。

それから戦で籠城戦のために必要な指揮所、観測所、弾薬庫、油脂庫、貯水・給水施設、通信施設、待機所、交通施設（地下トロッコなど）、医療施設などを築いた。

その他にも魔術師や呪術師などが居ない事からトーチ力や高射台陣地などと他の城や屋敷にはない物を築いた。

約半年を掛けて屋敷の基礎などを作り上げてから最後に夜叉王丸の住む屋敷を築く武家屋敷を建てられた。

それまでの間に幾度となく夜会の招待や貴族の食事会などを呼び掛けられたが屋敷を完成させる事が先決であつたため全て断つた。

夜叉王丸の屋敷は武家屋敷と呼ばれる日本独自の屋敷でモデルは京都の二条城である。

庭園も大名庭園と呼ばれる日本の庭園で魔界では異例の屋敷になつた。

「……やっと完成した」

夜叉王丸達は約半年と数か月を掛けて完成させた屋敷を見て誇らしげになつた。

「ここが新しい俺たちの住み家だ」

兵士たちは子供のよう喜んで走り回つた。

今までバラテという辺境の地で暮らしていたから初めて家と呼べる場所に暮らせて嬉しいのだ。

「ほおう。やっと完成したか」

「マモン。何か用か？」

突然、現れたマモンに夜叉王丸は目を細めた。

王族などが来る時は大抵ろくな事がないと経験している為だ。

「そう嫌そうな顔をするな」

マモンは苦笑した。

「ベルゼブルがお呼びだ。直ぐに城に来いだと」

「・・・ベルゼブルが？」

養父の名前を聞いて夜叉王丸は確信した。

『あいつが呼び出すって事は碌な目に合わないな』

断るのも手だが、そうすれば過去の経験からシルヴィアを使者に出すのは必定だ。

それだけは絶対に避けたい夜叉王丸は仕方なく城に上がる事にした。

「分かった。直ぐに行く」

「懸命な判断だ。その判断に免じて忠告だ。正門にシルヴィアが待ち構えている」

お前の屋敷に住みつこうとしていると付け加えて去るマモン。

「おい。シルヴィアが来ても絶対に入れるな」

夜叉王丸の言葉に兵士たちは真剣な顔で頷くと急いで屋敷に入り臨戦態勢を取った。

それを見届けて夜叉王丸は魔天楼へ翼を広げて飛び立った。

上空から見下ろすとマモンの言う通りシルヴィアが王族近衛兵を連れて待ち構えているのが見えた。

夜叉王丸は下から視線を逸らして魔天楼の中庭に降り立ちベルゼブルの書斎へと向かった。

「ベルゼブル。俺はいそ．．．．．がしい」

書斎に入り皮の椅子に座るベルゼブルに文句を言おうとした夜叉王丸だったが、ベルゼブルの隣に立っている人物を見て言葉を失った。

「．．．．お久し振りです。夜叉王丸様」

夜叉王丸の目の前に立っているのは濃紺のワンピースにフリルの付いた白いエプロンを組み合わせたエプロンドレスに白いフリルの付いたカチューシャを身に付けたジャンヌだった。

「．．．．．」

「夜叉王丸様？」

ジャンヌの声がして夜叉王丸は我を取り戻した。

「な、何でお前がいるんだ？しかもメイド服を着て！！」

我を取り戻した夜叉王丸は狼狽して叫んだ。

「分からんか？お前の屋敷でメイドとして働く為だ」

何を言っていると笑うベルゼブル。

「め、メイドだと?!」

「お前、まさか召使いを雇わずに暮らそうと考えてたのか？」

「.....」

凶星を指され夜叉王丸は何も言えなかった。

「お前って本当に無神経と言うか生活が破綻していると言うか.....

・我が息子ながら何と情けない」

ベルゼブルは嘆息した。

「うるせえ。エロ爺が」

夜叉王丸はギロリとベルゼブルを睨むとジャンヌに視線を移した。

濃紺色のメイド服がポニーテールの銀髪を引き立たせて気高さを放出していた。

「何で俺のメイドになりたいんだ？」

気になっていた事を尋ねた。

「夜叉王丸様のために何か恩返しをしたいと考えてメイドになり身の周りの世話をしようと考えたんです」

「気持ちは嬉しいが、ここは魔界で天使のお前には住み辛い場所だと思っぞ」

「バール王様が後ろ盾になってくれると約束してくれました」

夜叉王丸はここには居ないバール王に悲鳴に近い声で文句を言いたかった。

「私以外にも何人かのメイドが夜叉王丸様の屋敷で働く聞いておりますので、よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げるジャンヌ。

ジャンヌは気付かなかったが夜叉王丸は非常に困り切った顔をしてベルゼブルは必死に笑いを堪えていた。

この日から夜叉王丸の波瀾万丈な女難の日が始まった。

第十六章：妖鳥族からの助け

夜叉王丸は大名庭園にある松の木の下でフェンリルと一緒に昼寝をしていた。

そんな時にメイド姿に身を包んだジャンヌが現われて夜叉王丸を揺さ振った。

「飛天様。お目覚め下さい。飛天様」

ジャンヌがメイドになってから一か月が経った。

その間、夜叉王丸と呼んでいたが夜叉王丸本人から飛天と呼ぶように言われて飛天と呼んでいる。

ジャンヌとパール王が選出したメイドは実に働いている。

男だけで暮らしていた風の翼の兵士たちにとっては感極まりなかった。

全員が美人揃いで気立ても良い事で人気が高いが特にジャンヌの人氣は絶大で毎日のようにラブレターが送られている。

「んっ？もう夕食の時間か？」

寝ぼけた眼差しでジャンヌを見る夜叉王丸。

「いいえ。夜会に来るようにベルゼブル様から“命令”が来ています」

夜叉王丸は明らかに不愉快な表情になった。

男爵になってから夜叉王丸は頻繁に夜会に呼び出される事が多くなつた。

理由としては大天使ミカエルを打ち倒した英雄であるのが理由だが、皇子でもある事から関係を持って得たいと考える貴族たちの思惑があつた。

ベルゼブル、サタンに至つては二千八百歳と人間でなら三十路になるのに独身である夜叉王丸に早く落ち着いて貰おうと見合い話を持ち掛けて来る。

表向きは夜叉王丸の為と言っているが本当は初孫を抱きたいのが理由らしいと噂になっている。

「面倒臭いが行くしかないか」

嘆息しながら夜叉王丸は寝ているフェンリルの頭を一撫ですると自室へと向かった。

夜叉王丸の自室は和室と洋室の二つあるが、どちらも必要な物しか置かず贅沢な物は置いていない。

無駄に着飾るのを嫌う夜叉王丸の性格をよく表していると言える。

洋風の自室に行くとダンスの中から黒の軍服と軍帽を取り出して着ていたジャケットなどを脱いで軍服に身を包んだ。

ボサボサの髪も櫛で梳かして無精髭も髭剃りで剃り落とした。

腰のベルトに黒漆で塗られた同田貫をぶら下げて軍帽を被るとヨルムンガルドが運転する馬車に乗り込んで魔天楼に向かった。

「それでは頃合いを見計らってお迎えに上がります」

ヨルムンガルドは夜叉王丸を下ろすと馬車を走らせて去って行った。

「はぁ、面倒臭いな」

夜叉王丸は溜め息を吐きながら正門を潜った。

「や、夜叉王丸様つ。こ、こ、こんばんは！！」

正門を潜ると義妹のリリムが赤面しながら夜叉王丸に挨拶した。

「ああ。久し振りだな。リリム」

夜叉王丸は何時もの事だな、とリリムを一瞥すると隣を通り過ぎて夜会が開かれている舞踏会場へと足を運んだ。

「ま、待って下さいよ！！」

慌ててリリムが追いかけて来るのを夜叉王丸は小さく笑って足の速さをリリムに合わせた。

舞踏会場に着くと大勢の貴族たちが夜叉王丸に押し掛けてきてリリムは追い出されるようにして夜叉王丸から引き離された。

「こんばんは。夜叉王丸様。今夜は一段と凛々しい姿ですね」

「夜叉王丸様の屋敷はとても立派ですね」

などと齒の浮くような世辞を言っでは夜叉王丸の気を引こうと躍起になる貴族たち。

『これだから嫌なんだ』

嘆息しながら夜叉王丸は辺りを見回してシルヴィアが居ない事を確認した。

「こんばんは。飛天様」

貴族の輪を抜けて青色のミディアムドレスを着たシャルロット女伯爵が出てきた。

「おお。シャルロット。今日は軍服じゃないな」

「ええ。今日は飛天様のために着飾りました」

「綺麗だな」

素直な感想を述べる夜叉王丸にシャルロットは頬に手を当てて恥ずかしがった。

「まあ、嬉しいですわ」

「……こんばんは。皇子様」

二人で談笑していると低い独特の声がした。

「・・・あら？これはシルヴィア侯爵ではありませんか」

シャルロットは明らかに嫌な顔をした。

シルヴィアも今夜の姿は近衛兵の軍服ではなく裾の長い赤のミニディ
アムドレスに身を包んでいた。

「貴方も今日はドレス姿なんですね？」

「たまには夜会に出ないと貴族として申し訳ないからな」

「私は飛天様のためにドレスを着てますの。侯爵のように貴族とし
ての義務なんて考えた事ありませんわ」

「ふん。これだから没落貴族は駄目なのだ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

バチバチつと火花を散らす二人に夜叉王丸は嘆息した。

『せっかく着飾ったんだから少しは仲良くしろよ』

静かに去ろうとした時にガラスが割れる音がした。

「や、夜叉王丸、様・・・・・・」

割れたガラスから中に入って来たのは全身傷だらけの将皇だった。

周りにいた貴族たちは将皇の姿を見ると悲鳴を上げた。

「将皇殿！どうした？」

夜叉王丸は駆け足で将皇の元に駆け寄った。

「や、夜叉王丸様っ。ど、どうか助けて下さい」

将皇は震える血まみれの手で夜叉王丸の胸に縋った。

「ひ、姫様が、姫様を……里を助けて下さい」

途切れながら懇願すると将皇は気絶した。

「シャルロット。直ぐに医者連れて来い！！」

シャルロットは直ぐに身を翻すと走った。

「シルヴィア。お前は近衛兵を連れて怪しい人物がいないか調べろ」

シルヴィアも直ぐに頷くと急いで舞踏会場を後にした。

夜叉王丸は将皇を軽々と持ち上げると呆然とする貴族たちを置いて出て行った。

城にある自室に将皇を運んだ夜叉王丸はシャルロットが呼んで来た医者に将皇を任せるとシルヴィアの元へ向かった。

「皇子様。ただ今、怪しい人物を捕まえました」

シルヴィアが縄で絞められた中年の鎧姿の男を差し出した。

鎧は和風で、そこそこ贅を凝らした鎧だったが争ったのかあちらこちら汚れていた。

「他の奴らは？」

「ただ今、部下が捕らえています」

「おい。お前、何処から来た？」

夜叉王丸は片膝を着いて男を見た。

「勝手に城の中に入るなんて不法侵入罪に侵略罪だぞ」

男は答えとばかりに夜叉王丸に唾を吐いた。

「貴様っ」

シルヴィアが動くより早く夜叉王丸の拳が男の左頬を殴った。

「答える。俺は気が短いんだ。特に貴様のような奴にはな」

「……妖狸の者だ」

男は夜叉王丸の放つ殺気に圧されたのか震える声で答えた。

「妖狸が魔界に何の用だ？」

「ここに逃げ込んだ妖鳥族の男を捕らえに来た」

「何故だ？」

「部外者に言う義務は………があー!!」

男が言い終わる前に夜叉王丸が刀を抜いて男の肩に刺した。

「口応えをするな。質問に答える」

「お、俺は、ただ奴を捕らえるように言われたただけだ!!」

男は悲鳴を上げながら答えた。

「誰に言われた？」

「がっ！よ、妖狸の王にだ!!」

「ここは魔界だ。貴様らが勝手に動いて良い場所じゃねえ」

夜叉王丸は刀を抜くとシルヴィアに命令した。

「この男と残りの奴らを牢にでも入れて置け」

シルヴィアは一礼すると男を引き摺って消えた。

血で濡れた刀を鞘に収めると夜叉王丸は再び自室へと向かった。

自室に行くと手当てが終わった将皇がベッドで寝ていたが夜叉王丸

が来ると起き上がろうとした。

「将皇殿。何があったのか説明してくれ」

夜叉王丸は医者を下がらせると将皇をベッドに寝かせると尋ねた。

「半年前に突然、妖狸の軍が里を襲って若い娘を攫って行ったんです」

将皇は傷に苦しみながら話し始めた。

「奴らは他にも妖狐や妖猫などの娘たちも攫っていたんです」

「不意打ちで多くの者が死んだり傷ついて、為す術も無い私たちは妖怪王に助けを求めて兵を起こしました。他にも妖狐や妖猫、四国狸なども娘たちを取り戻す為に参加したのですが、敵は金で妖狼族を雇って更に妖狐や妖猫族、妖鳥族の裏切り者も出て、その時に風疾様も傷を負って……」

将皇は悔し涙を流した。

「奴らは若い娘たちを攫って狼藉を働き更に妖怪の世界を牛耳る積もりなんです」

将皇は夜叉王丸の手を震える手で握った。

「お願いです。夜叉王丸様。私を、私たちを助けて下さい。お願いです……!!」

懇願するように夜叉王丸に頼む将皇。

「……安心して下さい。必ず奴らを叩きのめしてみせます」

夜叉王丸は将皇の肩を優しく叩いた。

しかし、左目の金色の瞳には燃えるような怒りが宿っていた。

『女子供に対する行為、許せん』

夜叉王丸は自室を出てベルゼブルに事の顛末を伝えた。

「……すると、捕らえた狸は将皇を殺す為に魔界に来た訳か」

ベルゼブルが葉巻を吸いながら夜叉王丸に聞いた。

「恐らくな。将皇殿の話では、奴らに礼儀はないそうだ」

「だから、無礼にも関所を破り城に乗り込んで来た訳か」

もう少し関所を強くさせるかと一人事をベルゼブルは漏らした。

「ああ。俺も他人の事は言えないが、無礼にも程がある」

「で、お前としてはどうしたい？」

紫煙を吐き金色の瞳で夜叉王丸を見た。

「どつとは？」

「助けを求められたんだろ？助けるのか？」

「助けたい」

「あの里には世話になったし、魍月も困っているからな」

それに、と付け加えた。

「あの糞狸は俺に唾を吐いた。喧嘩を売ったも同じだ」

「なるほど。まあ、俺としても関所を破壊して城に土足で入って来た無礼者を許すほど優しくない」

ベルゼブルは短くなった葉巻を灰皿に押し付けて消した。

「ただちに日本に行き奴らを叩け。悪魔を舐めた授業料は高い事を尻から首に掛けて教えてやれ」

「必要な物は揃えてやる。遠慮せずに暴れる。良いな？これは命令だ」

ベルゼブルの言葉を聞いて夜叉王丸は頷いた。

「安心しろ。元から遠慮なんてしないさ」

口端を釣り上げて笑う夜叉王丸にベルゼブルもニヤリと笑い返した。

ベルゼブルとの話を終えた夜叉王丸は将皇を任せて屋敷へと帰った。

第十七章：妖鳥族の里へ

屋敷に帰った夜叉王丸は城での出来事をダハーカ達に伝えた。

「俺らを敵に回すとは哀れな奴らだ」

ダハーカがジョーカーを蒸かしながら感情の無い声で言った。

「まったく。昔から妖狸は礼儀つてもんを知らないから困ったものだ」

茨木童子が舌打ちをしながらコーヒを口にした。

「どつち道これから殺すんだ。礼義なんて気にしないで良いだろ？」

フェンリルが欠伸を洩らしながら答えた。

「フェンの言う通りだ。これから死ぬ奴らに礼儀なんて要らねえよ」

ゼオンがフェンリルに賛同した。

「主人様。何時ごろ起つ積もりですか？」

ヨルムンガルドが一人用のソファアに座りながらセブンスターを吸う夜叉王丸に尋ねた。

「準備が出来次第に起つ。兵たちにも伝えて置け」

「畏まりました」

ヨルムンガルドは頷くと部屋を出て行った。

「ダハーカ。今回は、手加減なしで良い。殺戮の限りを尽くせ」

夜叉王丸の言葉を聞いてダハーカは不敵に笑った。

「ほおう。それは結構だ。バルト戦じゃ楽しめなかったからな」

口端を釣り上げて笑うダハーカ。

「話しは終わりだ。全員、準備をしとけ」

ソファアから立ち上がると夜叉王丸は素手でセブンスターを揉み消して部屋を出た。

自室へと足を向ける中で不意にジャンヌが出てきた。

「お帰りなさいませ。飛天様」

メイド服ではなく風呂から上がったのか白いネグリージエに水色のレースを肩に掛けている姿で梳かれた髪が微かに濡れていた。

「……あぁ。ただいま」

「どうかなさいましたか？」

夜叉王丸の様子が可笑しいのに気づいたのか心配そうに聞いてきた。

「近い内に戦に行く事になった」

戦と聞いてジャンヌは表情を硬くした。

「そう、ですか」

「……ああ。だから、暫く屋敷を開ける事になる」

「私は、戦に参加する事は出来ません。だけど、飛天様達が無事に帰って来る事を願っています」

頭を下げたジャンヌの蒼銀髪が揺れて夜叉王丸の鼻を刺激した。

「……心配するな」

夜叉王丸は一房摘むと口付けた。

「必ず帰って来る。だから、屋敷を頼むぞ」

名残惜しげに髪を離すと夜叉王丸は自室へと向かった。

「……鵜」

自室に入ると直ぐに鵜を呼び出した。

「お呼びでしょうか」

音も無く現れて片膝を着く鵜に夜叉王丸は命じた。

「日本に飛んで出来る限り情報を掴んで来い」

「御意」

鶴は直ぐに姿を消して夜叉王丸だけが残った。

「……この俺に喧嘩を売った事を後悔させてやる」

ギリツと唇を噛み夜叉王丸は妖狸に怒りを露わにした。

将皇が助けを求めて来てから一日が経ってから兵士たちに戦の事を説明した。

「これは、俺の私的が理由での戦で死んでも無駄死になるかもしれない」

「もしも行きたくない者がいるなら名乗り出る。咎めはしない」

暫く待ったが誰も名乗りを上げなかった。

「俺は、お前たちのような兵を持って幸せだ」

夜叉王丸の言葉に兵たちは照れ笑いを漏らした。

「ベルゼブルから必要な物は揃えると言われたから何か必要な物があるなら言え」

「それなら軍医殿が欲しいです」

一人の兵士が名乗り出た。

夜叉王丸の軍団には軍医が誰もいない。

「しかも美人で優しい女医さんが欲しい!！」

ダハーカの言葉に皆が頷いた。

「美人は保証できないが軍医は用意する。他には?」

「特にならないから美人女医を頼む」

「出来るだけ努力してやる」

夜叉王丸は溜め息を吐きながら答えると背中を向けた。

それからベルゼブルに報告しようと城に向かおうとユニコーンに乗り屋敷を出た時に門の前でソフィーと会った。

「ソフィー。どうした?」

夜叉王丸がユニコーンから降りて尋ねた。

「は、はい。この度、戦に行く噂で聞きまして、是非とも私を同行させて貰いたく来ました」

「同行?」

「はい。夜叉王丸の軍には医者がないと聞いております」

だから自分を軍医にしろと言うソフィー。

『女医で美人』

目の前にいるソフィーならダハー力達も顔見知りだし美人だから納得するだろう。

「よし。分かった。それじゃ、軍医として同行してくれ」

少し考える振りをして直ぐに結論を出した。

「は、はいっ」

ソフィーは大きく頷いた。

「何か必要な物があるなら言ってくれ。ベルゼブルに伝えるから」

ソフィーは手術道具など戦場で必要な物を要求した。

その他には、どうしても助けられない者に慈悲の心で止めを刺す為
に使用するステイレットまたの名をミセリコルディア、慈悲の短剣
と呼ばれる短剣を注文した。

他に必要な物が無い事を確認すると夜叉王丸はユニコーンに再び乗
ると魔天楼に向かった。

「……以上だ」

ベルゼブルに必要な物を言い終えた夜叉王丸はセブンスターを銜え
た。

「言われてみたら、お前の軍団には医者がいなかったな」

今さら気付いたように言うベルゼブル。

「ああ。よく今まで生き残って来たと思うよ」

苦笑する夜叉王丸。

「まあ今度からはソフィーがいるなら問題ないだろ？後、何人が医者を送るぞう」

「頼む。だけど、エリートやキャリア組は駄目だぞ」

「分かっている。その点は心配するな」

夜叉王丸の付け足した言葉に苦笑しながら答えるベルゼブル。

「なら良い。それじゃ、俺は帰る」

背を向けてドアに手を掛けようとした時に先にドアが開きシャルロットとシルヴィアが入って来た。

反射的にベルゼブルを見るがベルゼブルも困惑している表情だった。

「皇子様。今回も私たち近衛兵を置いて行く積りですか？」

「飛天様。私たち親衛隊は飛天様を護るために存在しているんです。それを置いて行くななんて酷いですよ」

何時もは仲の悪い二人だが今回は巧みな連係プレイで夜叉王丸に詰め寄って来た。

「いや、誰も連れて行かないなんて行っていないぞ」

内心では置いて行く積りだったが、嘘を吐いた。

「本当ですか？」

「前にもそんな事を言って置いて行かれた気がするんですけど？」

『何で、こついつ時に仲良く組むんだよ』

「今回は軍医も連れて行くから護衛する奴らが欲しかったんだよ。だから、お前らがいると助かる」

『私は貴方を護る為に存在するんです』

と口を揃えて言って夜叉王丸の言葉を一掃する二人。

「まあまあ、二人とも。軍医を護衛するのも大切な役目だぞ」

見かねたベルゼブルが助け舟を出した。

「軍医が居なければ傷ついた兵を助けられない。それに、こいつはダハーカという相棒がいる」

『あんな性欲の塊は当てに出来ません』

ベルゼブルの言葉も一掃する二人に夜叉王丸は嘆息した。

「あんまり言わないでくれ。あれはあれで頼れる所があるんだ」

「な？頼む。軍医の護衛をしてくれ」

もはや拝み倒しする形で頼む夜叉王丸に二人は渋々ながら折れた。

『……分かりました』

はあ、と親子二人は溜め息を漏らした。

「時に皇子様。牢に入れた妖狸の者はどうしますか？」

思い出したようにシルヴィアが言った。

「あいつらは海にでも放り込んでの海獣の餌にしる」

「サタナエルはどうなさいますか？」

「ああ、あいつもいたか」

「お前が殺さない限り生きてるぞ」

呆れた口調で喋るベルゼブル。

「飛天様から見ればサタナエルなど記憶する程でもない小物のいう事ですね」

シャルロットが皮肉気に笑った。

自分の父親を死に追い詰めたサタナエルを殊のほか憎んでいるのを夜叉王丸は誰よりも知っている。

「まあ、先に狸を始末してからサタナエルの事は片付ける」

夜叉王丸とシルヴィア、シャルロットはベルゼブルに一礼して部屋を出て二人と別れた夜叉王丸は将皇の元へと向かった。

「将皇殿。傷の具合は如何ですか？」

ベッドで寝ている将皇に尋ねた。

「はい。医者の手当が早かったお陰で何とか動けるようになりました」

傷は深かったが人間ではなかった事から思いの外に癒えるのが早いようだ。

しかし、激しい動きなどは出来る訳ではない。

「準備が出来次第にでも日本に行きます」

「将皇殿は傷もありますし、城で待っていて下さい」

夜叉王丸の提案を将皇は断った。

「いえ。私も同行します。一人、城で待つ事など出来ません。どうか共をさせて下さい」

傷口が開いたのか苦痛に顔を歪めながら将皇は夜叉王丸に懇願した。

「……分かりました。将皇殿も連れて行きましょう」

将皇に宿る意志の強さに夜叉王丸は何かを感じ取ったのか承諾した。

「ありがとうございます」

丁寧に頭を下げる将皇。

「では、出発の時にまた会いましょう」

夜叉王丸は将皇と別れると屋敷へと帰って行った。

二日で戦準備を済ませた夜叉王丸の軍団は傷ついた将皇を連れて日本の妖鳥族の里へと向かった。

「……これは、酷い」

妖鳥族の里は以前に来た時とは違い焼け跡の残骸などで廃墟と化していて屋敷も半分が焼け落ちていた。

「……奴ら夜、民家に火を点けて警備が手薄になった所を見計らって屋敷を襲ったんです。その時、姫様が……」

ギリツと夜叉王丸のユニコーンに乗った将皇は唇を噛んだ。

「……風疾殿は何処に？」

怒りを押し殺した声で将皇に尋ねる夜叉王丸。

「はい。無事な部分にいます」

将皇が先導して進み後に続いた。

焼け落ちていない部分の屋敷に入ると風疾が紫の布を額に巻いて寝込んでいた。

「お、おお、夜叉王丸様……………」

風疾は臣下に支えられながら起き上った。

「来て下さったのですね……………」

震える手で近くに寄って来た夜叉王丸の手を握る風疾。

その姿は弱々しく哀れな姿だった。

「娘を、緋夜を助けて下さい。お願いします」

涙ながらに頼む風疾。

「…………御安心ください。必ず緋夜殿と里の娘たちを取り戻してみせます」

風疾の手を強く握り締めながら夜叉王丸は励ますように言った。

礼を言う風疾を布団に寝かせた夜叉王丸は一人の臣下と話をした。

「里の兵はどうしましたか？」

「現在は、妖怪王の指揮する連合軍と一緒に妖狸の里に陣を構えています」

「敵の里に？」

「はい。奴らは城下町を取り囲んだ形の城に立て籠もっているんです。城の外に空堀を掘って、その上から幾つかの要塞を作って兵を散開させているんです」

「なるほど。籠城に塹壕ですか」

夜叉王丸は少し考える素振りを見せたが、直ぐに臣下に向き直った。

「分かりました。くれぐれも風疾殿を頼みますよ」

臣下が深く頷くのを確認して夜叉王丸は屋敷の外で待たせていた兵士たちに向かって叫んだ。

「これから妖狸の里に向かう。良いか？今回の戦、必ず勝つぞ。俺ら悪魔に喧嘩を売った事を骨の髄まで教え込んで二度と刃向えない位に叩くぞ！！」

おお！！と兵士たちは叫び声を上げて武器を掲げた。

「行くぞ！！」

夜叉王丸は飛竜姿のダハーカに乗ると天高く飛び妖狸の里へと向かった。

第十八章：新しい相棒

妖狸の里に着いた夜叉王丸は妖怪王、魍月の陣に向かった。

「地獄帝国から参った飛天夜叉王丸だ。妖怪王、魍月殿にお会いしたい」

陣幕の外で槍を構えていた兵たちは夜叉王丸の名を聞いて急いで陣幕を開けた。

「シルヴィアとシャルロット、それから部隊長は着いて来い」

ダハーカから降りて歩き出す夜叉王丸の後をシルヴィア達が追った。

「おお。飛天。よく来てくれた」

中央の椅子に座った赤の大鎧に身を包んだ魍月が立ち上がって夜叉王丸に笑い掛けた。

しかし、どこか影が落ちていた。

左右には妖狐、妖猫、四国狸が座って夜叉王丸達を奇怪な眼差しで見ている。

「だいぶ手こずっているようだな？」

「ああ。空堀の連中が思いの外に強くてな」

「こちらの戦力、被害は？」

「使える兵士がざっと三千人。被害は五千人だ」

「敵の方は？」

「こちらの倍で一万五千人だ」

「俺の軍を合わせても遠く及ばないな」

深刻な表情も見せない夜叉王丸に他の武将たちは訝しんだ。

「王よ。この方は役に立つのですか？」

「このような輩などいなくても我らだけで勝てます」

「他種族が割り込んで来るのは余計な気遣いです」

口々に夜叉王丸を批難する武将たちにシルヴィアとシャルロットは青筋を立てていた。

中でも痛烈に夜叉王丸を批判する者がいた。

妖狐族の王、月黄泉だ。

彼女の姿は、とても戦場で動く姿ではない。

赤い十二単に身を包んだ姿は戦場に出る姿とは思えない。

「たかが人間風情の悪魔が妾を助けるなど笑止千万。兵を連れて帰るが良い」

シルヴィアとシャルロットが剣を抜こうとし将皇も怒気を放っていた。

フェンリルなども牙を剥き出しにして今にも跳びかからんとしていた。

しかし、当の夜叉王丸は気にしていない様子だった。

「魍月。俺に何か渡す物はあるか？」

唐突に喋る夜叉王丸に魍月は驚いたが直ぐに理解したのか近くにいる従者に命じて何かを取りに行かせた。

「流石だな。気付いたのか？」

「まあな。鶴から聞いた」

今頃は城で情報を探しているだろうと笑う夜叉王丸。

他の武将たちは目を見張った。

「あの厳重な警備の城に侵入など……………」

驚きを隠せない武将たちを気に掛けもせず夜叉王丸は笑っていた。

暫くすると従者が三人係で布に包まれた大きな物を持ってきた。

「一本は俺からで、もう一本は鞍馬天狗からだ」

布を剥ぎ取ると紺色の鞘に収まった大太刀と紅色の十文字槍が見えた。

「……ほおう。中々の代物だな」

二本から放たれる気に夜叉王丸は目を細めた。

「太刀の名前は朧月。かの蛇神、夜刀神の骨から作り上げた刀だ。槍の名前は、朱鷹。こっちは天狗達の骨などから作り上げた」

朧月と朱鷹を夜叉王丸に向けて投げた。

二本を受け取った夜叉王丸に朧月は語った。

「その二本はお前の為に作った。だが、それを使いこなせるかは、お前の力次第だ」

「手懐かせるのが難しそうだな」

苦笑する夜叉王丸。

「それじゃ、ちょっと軽く使ってみるか」

朧月を背中に背負い朱鷹を右手に持つと夜叉王丸は陣幕を出ようとした。

「少し要塞を一つ壊して来る」

「気を付ける。妖狼族が護っている」

「金で雇われた狼など犬同然だ」

魍月は苦笑した。

「待て！！」

陣幕から出ようとした時に月黄泉が立ち上がって夜叉王丸に怒鳴り掛けた。

「貴様は妾の言った事が理解できないのか？妾は助けなど要らんと言ったのじゃ。直ぐに帰れ」

金色の瞳に怒気を宿し肩まである灰銀のセミロングを逆立たせて月黄泉は夜叉王丸を睨んだ。

「誰もお前みたいなのを助けるなんて言った覚えはない。俺が助けるのは攫われた娘たちだ。それにお前みたいに後ろで陣を構えて呑気にしている大将に指図をされる覚えはない」

月黄泉を見もせず夜叉王丸は陣幕から出て行った。

「妖怪王！あんな奴と一緒に戦うのですか？！」

月黄泉が怒鳴りながら魍月に食って掛った。

「月黄泉殿。奴の強さは本物です。そう怒らないで」

魍月が宥める口調で言った。

その時、城の方で大きな爆発音がした。

城を囲んでいた要塞が一つ炎に包まれていたのだ。

「ほおう。さっそく使いこなしたか」

ダハーカが目を細めた。

「……な、何じゃ？一体……」

月黄泉を始めとした武将たちは茫然としていた。

「戦の狼煙にはちょうど良いな」

月黄泉を宥めていた魍月が不適に笑った。

炎に包まれる要塞から黒い翼を出した夜叉王丸が陣幕に向かって飛んで来た。

「よお。中々の威力だな」

陣幕に降り立った夜叉王丸は朧月と朱鷹を掲げてみせた。

「よく短時間で手懐けたな」

魍月が感嘆の声を上げた。

夜叉王丸が要塞に行き破壊した時間、僅か三分。

「コツを掴めば簡単だ」

ニヤリと答える夜叉王丸。

身体から放たれる臭いは炎で焼けた者たちの臭いが微かにした。

「諸君。これからは夜叉王丸殿を加えて城を叩く。良いな？」

武将たちは魍月の言葉に頷くしかなかった。

要塞を一つ破壊された妖狸の軍勢は慌てて焼け石に水程度の防御壁を気付いた。

時刻は夕日になり夜になる所だった。

「今日は、ここまでだな」

魍月が従者に退却させるように命令すると兵たちは直ぐに退却してきた。

「明日の朝一に攻撃する」

総大将の言葉に武将たちは頷くと一人ずつ陣幕を離れた。

最後に残った月黄泉は夜叉王丸を力の限り睨んできた。

「……たかが人間風情が粹がるな」

去り際に夜叉王丸を見上げて囁いたが夜叉王丸は気にもしなかった。

「さあて、俺らも休むとするか」

夜叉王丸もダハーカ達を連れて陣幕を出た。

夜になり夜叉王丸は連合軍と離れた場所に野営陣を築いて軍議を開いた。

「鵜の掴んだ情報によれば攫われた娘たちは城の地下牢に閉じ込められているらしい」

セブンスターを蒸かしながら夜叉王丸は鵜の得た情報を口にした。

「地下牢か。それなら砲弾などで傷つく可能性は低いな」

茨木童子が左手に填めた大砲を撫でた。

「それからもう一つの情報は空堀の長さは二メートル。この距離じや騎兵や戦車部隊では突破できない」

「それじゃ、どうするんだ？」

ダハーカが腰に差した大剣の柄を握りながら尋ねた。

この大剣は別名を“破滅の序曲”と言い文字通り使った時に破滅へと誘う剣である。

「どんな城でも必ず手薄だったり脆い所がある。そこを突く」

ゼオンの言葉に夜叉王丸が頷いた。

「これが城の見取り図だ」

夜叉王丸が懐から見取り図を取り出し机の中央に乗せた。

「城の西側には要塞がなく堀だけだ。空堀は深くないし、飛び越えられる長さだ」

「弓警部隊と突撃部隊はバルト戦と同じく正面から突破してくれ」
フエンリルと弓警部隊の隊長は頷いた。

「鵜。お前は城に侵入している部下を引き連れて内部から敵を攻撃しろ」

後ろで控えていた鵜に命令する。

「放火、偽情報、暗殺、使える手は何でも使え」

鵜は一礼すると姿を消した。

「将皇殿には妖鳥族の軍を指揮して貰いたい」

「私が、ですか？」

「怪我で大変かもしれないが頼めますか？」

「この命に掛けても……」

将皇は片膝を着いて頭を垂れた。

「シルヴィアとシャルロットは軍医たちの護衛を頼む」

二人は不服そうだったが頷いてくれた。

「この作戦はスピードが勝負だ。素早く攻撃をして相手に反撃を与えさせず徹底的に叩け」

夜叉王丸の言葉に皆は頷いた。

軍議を終えると各部隊の隊長たちは兵士たちに作戦を説明して明日の準備に取り掛かった。

第十九章：決戦そして終戦

要塞を破壊した翌日のまだ一番鳥が鳴いていない内に夜叉王丸の軍団は行動を開始した。

茨木童子が指揮する砲撃部隊は要塞に届く距離まで木砲や野砲などを設置しヨルムンガルドが率いた騎兵隊と戦車部隊は西側の堀に移動した。

「ダハーカ。俺たちは鵜が放火したら動くぞ」

飛竜姿になったダハーカに話しかける夜叉王丸は右手に朱鷹を握っていた。

「了解した」

ダハーカが欠伸混じりで返事をした。

それから待つ事、十分後に城から煙が上がった。

「合図だ」

夜叉王丸の言葉と同時に砲撃が始まり連合軍も動き出した。

「さあ、行くぞー!!」

ダハーカが甲高い唸り声を上げて翼を広げ大空に舞い上がった。

続く様に数百匹の飛竜が飛び上った。

「攻撃開始！！」

夜叉王丸の言葉に一斉に飛竜達がプレスなどを吐いて城を上空から攻撃した。

上空からの予想外の攻撃で城は騒然とした。

西側は早くも門が破られて騎兵隊や戦車部隊が突入する激音がした。

突撃部隊は弓弩部隊の援護を受けながら空堀にいる妖狼族に突撃して激しい斬り合いをしていた。

砲撃部隊は適格に死角とも言える場所を砲撃して重要拠点などを狙い撃ちにした。

叫び声を上げ逃げ惑う民衆、腕や足を斬られて泣き声を上げる兵士、慌てて兵舎から出たが猛然と襲い掛かる大砲と矢の雨に再び兵舎へ逃げる兵。

一万五千という兵数と朝方と言う時間で奇襲されるのを予想していなかったのか敵は大混乱に陥っていて戦える状態ではなかった。

そこへ追い打ちを掛けるように連合軍が突入して来て空堀を突破した何人かの兵士が正門の攻略に掛った。

「……月黄泉の奴、あんな所に陣を構えてたら襲われるぞ」

上空から見えた月黄泉に夜叉王丸は呆れ果てていた。

月黄泉のいる場所は東側で城から放たれた矢の雨が降り注いでいた。

「お前が言った事を気にしてるんじゃないか？負けず嫌いな性格に見えたしな」

ダハーカが炎を注水拠点に向けて吐きながら答えた。

「言ってる傍から敵に襲われている。しかも、仲間に裏切られてな」

「ダハーカ。月黄泉を助けに行くぞ」

「あんなペチャパイ女帝の為に健気だな」

呆れた口調で言いながらも月黄泉の方角へと飛ぶダハーカ。

「貴様らっ。裏切るか!!」

月黄泉は周りを取り囲んだ部下達に怒鳴った。

「私たちは貴方様のやり方にうんざりしました」

部下達は刀を月黄泉に向けて言った。

「おのれ!!」

月黄泉は掌に炎を作り部下に向けて放った。

何人かには当たったが、その隙に何人かの部下達が斬りかかって来た。

襲い掛かる白刃を月黄泉は必死に避けたが長い裾が邪魔で思うように動けずに転倒してしまった。

「……………ぐっ」

立ち上がるうとしたが喉元に刀を突き付けられて動けなかった。

「命乞いでもしますか？」

「誰がするか!!」

月黄泉は狐火を作ろうとしたが部下に足で腕を踏まれて出来なかった。

「せっかくの気持ちが無駄にするとは、馬鹿な女だ」

冷やかな眼差しで月黄泉を一瞥すると刀を振り下ろそうとした。

『不覚!!』

金色の眼をきつく瞑ったが、何時まで経っても刀が振り下ろされな
い。

「……………」

うつすらと瞳を開けると槍で胸を抉られて絶命する部下がいた。

周りも一撃で絶命している部下と敵がいた。

「大丈夫か？月黄泉」

部下の後ろから顔を出したのは夜叉王丸だった。

「や、夜叉王丸!」

「怪我はないか?」

槍を貫いた部下の身体から引き抜きながら左手を差し出した。

鮮血が飛び散り夜叉王丸を赤く染めて恐怖を感じさせた。

「よ、余計な世話じゃ!」

差し出された手を振り払い立ち上がろうとしたが、左足に鈍い痛みが走り倒れそうになった。

「足でも挫いたか?」

倒れそうになった月黄泉を抱き止めながら夜叉王丸は足を見た。

「は、放せ!? 下郎!」

抱き止められた身体を突き飛ばそうとしたが、ビクともしなかった。

「動くな」

低い声を耳元で言われて月黄泉はビクリとした。

「足を挫いたな。慣れない事をするると痛い目に遭うんだ」

「き、貴様が悪いんじゃない。貴様が妾を馬鹿にする事を言うから」

「あれ位で怒るとは若いな」

何処か馬鹿にしたような口調で喋る夜叉王丸に月黄泉は激怒した。

「黙れ！放せ！指揮が取れぬではないか」

夜叉王丸を渾身の力で突き飛ばして歩こうとしたが痛みが走り再び転倒しそうになった。

「そんな足で指揮なんて出来ないだろ？」

嘆息を漏らしながら夜叉王丸は月黄泉の身体を片手で肩に抱き抱えた。

「な、何をする？降ろせ！降ろさぬか！？」

力の限り暴れたが夜叉王丸は一向に放す気を見せずに月黄泉の狐耳に囁いた。

「・・・俺の言う事を聞け」

さっきよりも低く少し苛立ちが籠った口調で言われて月黄泉は大人しくなった。

生まれてから今まで男に命令口調で言われた事はなかった。

しかし、目の前に立つ男は命令口調で自分に物を言っている。

遅しい肉体は城で働いていた武将たちよりも頼り気だった。

「……大人しくなったか。良い子だ」

耳元で囁かれる言葉に月黄泉はどうしようもない感覚を感じた。

夜叉王丸は片手で月黄泉を抱いていない手で懐の中から包帯を取り出して月黄泉の足に巻いた。

「これで応急処置は終わりだ」

月黄泉の足を軽く叩く夜叉王丸。

「指揮を取りたいなら俺と来るか？」

月黄泉は小さく頷いた。

「ダハーカ。こいつも乗せるぞ」

飛竜姿のダハーカに抱えていた月黄泉を見せる夜叉王丸。

「どうせなら巨乳の美女を乗せるよ。こんなペチャパイで勝ち気な女を乗せるのは俺のポリシーに反するぞ」

文句を垂れながら頭を低くするダハーカ。

「だ、誰がペチャパイだ!!」

月黄泉はダハーカに怒鳴った。

「ペチャパイをペチャパイと言って何が悪いんだよ。ペチャパイ女帝」

「貴様ツ！！」

月黄泉が狐火を作ろうとしたのを夜叉王丸が止めた。

「そう怒るな。今は戦闘中だぞ」

夜叉王丸の言葉に月黄泉は頷くしかなかった。

その時、何かが破られる音がした。

「ほおっ。どうやら正門が破られたようだな」

眼を細める夜叉王丸。

「そろそろ終幕だな」

夜叉王丸は月黄泉を抱えたままダハーカに乗ると飛び上った。

「ひゃっ」

月黄泉は初めて空を飛んだ事で悲鳴を上げた。

「心配するな。俺にしがみ付いてれば問題ない」

ポンポンと背中を叩く夜叉王丸の首に月黄泉は腕を巻き込んだ。

「ダハーカ。城に行け。要塞は他の奴らに任せておけ」

「分かったぜ。相棒」

ダハーカは城に向かって突っ込んだ。

「俺は天守閣で降りる。お前は殺戮しろ」

夜叉王丸は天守閣の上に月黄泉を抱えたまま飛び降りてダハーカは急降下して妖狸の軍勢に襲い掛かった。

「今から下に降りるから、しっかり掴まっている」

朱鷹を振り下ろすと瓦が壊れて天守閣が崩れ落ちた。

下に降りると禪姿で唾液を垂れたビール腹が目立つ中年の男と破かれたのかあられも無い着物を着た緋夜と金髪の似合う女性がいた。

「な、何者じゃ？貴様はっ」

男は夜叉王丸と月黄泉の姿を見て狼狽した。

「地獄帝国、飛天夜叉王丸男爵だ。攫われた娘たちを取り戻しに来た」

月黄泉を下ろすと夜叉王丸は朱鷹の槍先を男に向けた。

「魍月に取って代わろうとは愚かな奴だ」

ニヤリと笑う夜叉王丸。

「黙れ！！たかが悪魔ごときが！？」

男は刀台に手を掛けようとしたが夜叉王丸の投げた朱鷹で刀を破壊された。

「動くな。次は無いぞ」

背中の朧月に手を掛ける夜叉王丸。

「で、出会え！！敵だ！出会え！出会え！！」

声を聞いたのか刀を持った妖狸が襖を開けて入って来た。

「夜叉王丸！こ奴らは妾が相手をする。主は、その腹狸を殺せ！！」

月黄泉が狐火を宿しながら夜叉王丸に向かって叫んだ。

「さあて、どう料理をしてやるのか？」

夜叉王丸が一步でると男が一步さがった。

「……ま、待ってくれ。む、娘たちは返す。だから、助けてくれっ」

「皇帝からお前らを徹底的に叩けと命令されてるんでね」

朧月を引き抜きながら答えた。

蒼白い光を放つ朧月。

「……じゃあな。腹狸」

夜叉王丸は背を向けた男を右袈裟に斬った。

鮮血が部屋を真つ赤に染め男は一撃の元で絶命した。

後ろを見ると月黄泉が最後の敵を狐火で燃やしていた。

「……」

夜叉王丸は朧月に着いた鮮血を振り払って鞘に収めると緋夜と女性に近づき片膝を着くと陣羽織を二人に掛けた。

「……遅くなってすまなかったな」

「……夜叉王丸様」

緋夜と女性は震える手で夜叉王丸の胸元に飛び込んで泣いた。

今まで恐怖と戦って来たが、助けに来た夜叉王丸の姿を見て我慢していたものが爆発したのだ。

「……もう大丈夫だ。心配するな」

夜叉王丸は二人を優しく抱き締めた。

暫くの間、二人の鳴き声が天守閣から漏れていた。

第二十章：宴と女難

夜叉王丸が斬った男が妖狸の王で大将を失った妖狸族は戦える兵も僅かであった事から全面降伏して雇われ兵だった妖狸族も降伏して一件落着となった。

攫われた娘たちは地下牢から救い出されて親たちの元へと帰って降伏した妖狸族は唯一連合軍に着いた四国狸が厳密な管理の元で拘束され妖狸族は王と家老が自害する事で治まった。

妖狸族の王は、浪費癖が激しく今回も金目当てで雇われた事で兵たちは無理やり徴兵された事で罪は問われなかった。

この戦で風の翼の被害者は各部隊長の報告で合計三百人の死者が出て負傷者は百五十人だった。

軍医がいたので救える命もあつた事から軍医が居なければ五百人は死んでいたと言われている。

戦が終わっても夜叉王丸は直ぐに魔界に帰還せずに負傷者の治療と妖鳥族の里を直す為に日本に残った。

軍医であるソフィーは診療所を閉めている訳にはいかないのでシルヴィアとシャルロットが護衛として着いて行った。

日本に残って三か月あまりが経ち漸く復旧の目途も付いた事で今夜は戦勝を祝う事と里の復旧を願い宴が模様された。

「わははは！！もつと飲め飲め！？」

ダハーカが大声を上げて戦友たちに酒を飲ませた。

楽師が演奏を奏でる中で舞姫たちが勝利の舞を舞って、それを酒の肴つまみとしている者もいれば意気投合して飲み合う者もいる。

重傷を負った風疾は将皇が労わるようにして支えて、それを女中たちに取り囲んでいた。

むろんプレイボーイであるゼオンなども女中たちと楽しげに会話を
してフェンリルやヨルムンガルドも同じだった。

茨木童子は家老たちと釣りの話題で盛り上がっていた。

そんな皆が楽しげに酒を飲み交わす中で一ヶ所だけ険しい空気の前で酒を飲んでい
る者がいた。

妖獣大戦の英雄である夜叉王丸だ。

彼の左右には二人の女性が座っていた。

「……飛天よ。妾の酒を飲んでたもれ」

右側に座った赤い十二単を着た月黄泉が夜叉王丸にもたれ掛かるようにしてお猪口で夜叉王丸の盃に酒を注ごうとした。

「そんな女狐より私の酌を受けて下さいよ。飛天様」

左側に朱色の振袖を着た緋夜が月黄泉と同じようにしてもたれ掛かりながら夜叉王丸の盃に酒を注ごうとした。

「小娘の酌などより妾の酌の方が良いじゃろ？」

「ふん。女狐が」

「鳥娘が」

バチバチツと火花を散らす中で夜叉王丸は嘆息した。

戦が終わってから今の状態が続いている。

月黄泉は夜叉王丸の手伝いと称して妖鳥族の里に留まっているが夜叉王丸が目当てだと直ぐに解る。

戦中に夜叉王丸の姿や態度で、どうやら好意を得た様子で緋夜は最初から夜叉王丸に好意を抱いていた。

二人がいがみ合うのに時間は掛らなかった。

『……酒くらい静かに飲ませてくれよ』

切実な願いを叫んだが、その願いは聞き入られずに宴が終わるまで続く事になった。

宴が終わった三日後に夜叉王丸は軍を率いて日本を去り月黄泉も里を出る事になったが去る時も一騒動あった。

「飛天。何か、あれば直ぐに頼りをくれ。主の為なら何でもするぞ」

「飛天様。こんな女より私を頼って下さい。きっと力になります」

その時も互いに言い合って決定的な仲となった。

「……とんだ女に惚れられたもんだな。飛天」

飛竜姿になつて夜叉王丸を頭の上に乗せて飛びながらダハーカは意地悪な笑みを浮かべた。

「うるせえ」

不貞腐れた口調で返事をした。

「まあ、何はともあれ戦には勝利したのですから良いではありませんか」

ヨルムンガルドが宥めるように言った。

「まあ、な。これに懲りて戦なんて起こさないだろう」

日本の方角を見て喋る夜叉王丸。

「さあて、早く帰ってジャンヌに報告しないと」

ダハーカの手綱を強く握り前に向き直る夜叉王丸。

後に月黄泉と緋夜の力を借りる事を夜叉王丸達は知らない。

第二十一章：商人からの依頼

魔界に帰った夜叉王丸をジャンヌが温かい笑みで迎えてくれて夜叉王丸は心が癒された気がした。

妖獣大戦で戦死した兵たちは屋敷の庭にバラテから移した戦死者と一緒に戦没者の墓に埋められた。

戦没者の墓には今まで死んでいった兵士が眠っているが軍法を破った者の墓はなく名前すらも抹消されている。

夜叉王丸は何時も墓を見る度に居た堪れなくなる。

自分の戦略が間違っていたから大勢死なせたのか？と思う事がある。

戦なのだから割り切るしかないのだが、どこか心が痛む。

そんな夜叉王丸だからこそ皆は尊敬して命を投げ出すのだと兵士たちは言っている。

戦没者の埋葬を終えてからベルゼブルに戦報告を伝えた。

「そうか。分かった」

ベルゼブルは書類を見ながら短く言った。

最初から夜叉王丸が勝つ事を分かっている口調だ。

「じゃあな。俺は帰る」

要件を伝えた夜叉王丸は城を出て屋敷へと帰還した。

「飛天様。お帰りなさいませ」

屋敷の門を潜り玄関に着くとジャンヌが待っていたのか出迎えてくれた。

「ただいま。ジャンヌ」

夜叉王丸は笑顔でジャンヌの出迎えに答えた。

「俺を待っていたのか？」

少し期待して聞いてみた。

これにジャンヌは少し頬を赤くした。

その姿を見れば待っていたと解る。

「……お客様が見えておりますので」

耐えられなかったのかジャンヌは恥ずかしそうに口を開いた。

「客？」

「はい。万魔殿の貿易商人さんが」

フォカオル達ではない事に安堵しながら夜叉王丸は靴を脱いで屋敷へと上がりジャンヌと一緒に客室へと向かった。

客に気を利かせた洋室の客間だった。

「お久し振りです。夜叉王丸様」

商人は身軽ながら身繕いされた服装に身を包んだ男は夜叉王丸が入って来ると椅子から立ち上がったで一礼した。

「おお。久し振りだな」

夜叉王丸は気さくな笑みを浮かべて男に笑い掛けた。

ジャンヌは自然な動作で夜叉王丸の後ろに控えた。

パール王の徹底とした教育が行き渡っている事が窺える。

「何か用か？」

ソファアに座って足を組みながら聞いた。

「はい。実は、インドまで荷の護衛を頼みたいのです。以前に夜叉王丸様が盗賊などを退治してくれて問題ないと思っっているんですが、念の為に……」

「別に構わないぜ。引き受けた」

「ありがとうございます」

「男爵になっても助けるって言っただろ？」

男に笑い掛ける夜叉王丸の瞳には優しさが宿っていた。

「お礼は金貨と酒で宜しいですか？」

「ああ」

男はソファーから立ち上がると夜叉王丸とジャンヌに一礼して部屋を出て行った。

「依頼って何ですか？」

「男爵になる前に用心棒として働いていたことがあってな」

「用心棒？」

「ああ。金が無かったから色々な事をして金を働いていたからな」

パール王から夜叉王丸の一通りの事は聞いていたが用心棒をしていたなど聞いていなかった。

「そつだ。お前も来るか？」

唐突にジャンヌに言った。

「え？」

「用心棒が終わったら、また旅に出かけるからな。お前も旅行気分でどうだ？バルトに残した妹が心配なら里帰りをしても構わん」

夜叉王丸としてはジャンヌと一緒に旅をしたいと思っていたが口に

は出さなかった。

「私で良ければ一緒に行きます」

「そうか。ありがとう」

子供のような笑みを見せる夜叉王丸にジャンヌは微笑んだ。

「それじゃ、着替えとか準備しておいてくれ」

嬉しそうに部屋を出る夜叉王丸。

夜叉王丸が去ってからジャンヌも洋室を出て与えられた自室へと向かった。

ジャンヌ達メイドの為に用意した部屋は高級ホテル並みの設備が整った部屋で夜叉王丸なりに感謝の気持ちでもある。

自室に入るとパール王から貰った革のスーツケースに衣服を入れた。

何でスーツケースを送られたか分からなかったが、今になってスーツケースを渡した理由が分かった。

一通りの準備を済ませたジャンヌは上質な木材で作られたオフィスデスクの椅子に座ると二段目の引き出しから白紙を取り出して鳥ペんにインクを付けて文字を書き始めた。

「新愛なる妹、ティナへ」

バルトでの仕事はどうですか？幾ら都で勉強してきたとしても慣れない事では大変じゃない？何かあったら手紙を下さい。力にな

りますから。

私は魔界で飛天様のお世話をしています。パール王様が用意してくれた他のメイドの方々と仲良くしているので安心して下さい。

飛天様が戦に出かけた時は心配でしたが無事に戻って来てくれました。それから、これは嬉しい知らせです。

近い内に飛天様と旅行に行く事になりました。飛天様から一緒に行かないかと誘われた時には嬉しくて飛び上りたくなりました。旅から戻ったら、また手紙を書きますね。

貴

方の姉、ジャンヌより』

手紙を書き終えたジャンヌは夜叉王丸と行く旅に仄かな期待を胸に抱いて止まなかった。

一方、自室に戻った夜叉王丸は革トランクの中に衣服などではなく手榴弾や分解した凡庸アサルトライフルG3/SG1とフランス外人部隊が使用しているコンバットナイフにセブンスターを一パック入れた。

魔術などを積極的に使うのは避けたい夜叉王丸は改造した人間界の武器を使用する事が多く弾は全て銀の弾丸だ。

トランクに詰め込むと背面に装着したヒップ・ホルスターからモーゼル・ミリタリーM712を取り出した。

モーゼルC96の最終バージョンとして作られてクリップ装填から弾倉式に変えてフルオートも撃てるようになった軍用拳銃だ。

しかし、今ではベレッタなどの新式自動式拳銃に押されて何処の国

にも採用されていないが数少ない愛好者もいる。

モーゼルの遊底を引くとガチンッと音がして7・63mm弾が装填された。

初弾を装填したモーゼルをバックサイド・ホルスターの中に入れると壁に立て掛けていた黒鞘に収まった九州肥後同田貫を手に取った。

身巾がひろく嵩ねは厚く堅牢な造り込みの実用刀として、戦国期に需要の高かった派の一つだったが実用刀として酷使され健全な現存品は少なく、加えて作柄の出来、見処（鑑賞価値）に乏しい作刀が多いことから、著名で高価なわりに現代の刀剣界において評価の低い刀工群でもある。

しかし、何処か無骨でありながら気高い心を持った猛々しい獅子のような印象を与える同田貫を夜叉王丸は好きだった。

人間界では持ち歩いているが魔界では常に腰のベルトにフックでぶら下げて持ち歩いている。

鞘から抜くと白刃が夕陽の光に当たって輝きを放って夜叉王丸の瞳に当たり眩しさに金色の瞳を細めたが直ぐに鞘に収めると壁に掛けて部屋を出た。

三日後に夜叉王丸はジャンヌと一緒に商人の馬車に乗り魔界を離れてインドへと旅立った。

第二十二章：黒闇天

朝の早い内に魔界を出発した事で夜叉王丸は低血圧を発揮して馬車の中で眠っている。

服装は何時もと変わらず黒一色に黒のロングトレンチコートに黒のソフト帽だ。

ジャンヌの方は低血圧でもないため商人と談笑していた。

話しによると商人は香辛料や羅針盤などを売りに行くらしい。

水色のワンピースに身を包み蒼銀髪の髪はポニーテールではなくストリートヘアにしていた。

「それじゃ飛天様は民衆の英雄なんですね」

「はい。私たちが理不尽な目に合っていると必ず助けに来てくれました」

長身の身体を伸ばして寝息を立てる夜叉王丸を優しく見つめるジャンヌ。

「この方は本当に英雄です。民の為に懸命に行動してくれています。そして誰よりも部下思いな方です」

手綱を握る商人の口調は誇らしげだった。

「だから、皇帝陛下も夜叉王丸様を信頼しているのです」

ジャンヌは改めて夜叉王丸の凄さを実感して、この男に仕えている事に誇りを持った。

瞬間魔法などを使って三時間後にインドに無事に到着した。

「それでは、お礼は後ほど……」

商人は馬車から降りた夜叉王丸とジャンヌに一礼して市場の中へと消えた。

「何もなくて良かったですね」

ジャンヌが隣で欠伸をする夜叉王丸に笑い掛けた。

「……ああ。これで役目は終わりだ。少し市場でも見て回るか？」

夜叉王丸の提案にジャンヌは笑顔で頷いた。

「よし。それじゃ行くぞ」

革トランクを左手に持つとジャンヌを誘って市場を歩き始めた。

市場には色々な物が売り買いされていた。

「賑やかな所ですね」

ジャンヌが市場を眺めながら隣を歩く夜叉王丸に話しかけた。

「ああ。民が幸せそうな笑みを浮かべている」

淡泊な言い方だが、優しさが溢れていた。

暫く歩いていると馬の蹄が大量に聞こえてきた。

「……何だ？」

夜叉王丸が訝しげに辺りを見回すと行き成り矢が飛んできた。

反射的にジャンヌを背後に隠してトランクで矢を叩き落とした。

「大変だ！ラーヴァスが来たぞ！！」

一人の民衆が大声を上げて逃げた。

「おらおら！どけ！！愚民共が！！」

「はははは！良い眺めじゃ」

漆黒の馬に乗りながら剣を振り回す大柄な男と一緒に乗っている少女が高笑いを漏らした。

その後ろを屈強な体格をした男たちが控えていた。

「誰だい？あの木偶の棒は？」

近くにいた男に尋ねてみた。

「インド魔界の王であるラーヴァナ様の次男でラーヴァスですよ」

男は小声で答えた。

「父親がご病気である妃の看病で忙しいから好き放題なんですよ。ご長男のインドラジット様も今は留学中ですので……」

「一緒に乗っている娘は？」

「黒闇天という娘で毘沙門天様と吉祥天様の娘らしいですよ」

「毘沙門天殿と吉祥天殿の娘？」

夜叉王丸は眉を顰めた。

自分の記憶が正しければ“夜叉”の称号を得て宴に参加した時に紹介されたのは一人だけだった。

「何でも姉の白明天様の影に隠れていたそうで殆ど顔を見せなかつたらしいです」

男と話している内にラーヴァスは馬に乗ったまま剣や弓矢で市場を破壊していた。

ラーヴァスは心から楽しんでいるようだったが、黒闇天の方は無理をして笑っているように見えた。

「……ジャンヌ。暫く待っている」

ジャンヌを壁に隠すと夜叉王丸はラーヴァスの前に立った。

「おい。ここは市場だ。馬を走らせる場所じゃねえ」

「何だ？貴様は」

「お前らに名乗るような名前はない。さっさと消えろ」

懐からセブンスターを取り出してジッポで火を点けた。

「貴様、俺が誰か知らないのか？」

「馬に乗って女を侍らした馬鹿な餓鬼だろ？」

「……どうやら死にたいようだな」

ラーヴアスは馬から降りて後ろに控えていた男たちに片手を上げて手を出すなと合図した。

長身である夜叉王丸を遥かに超えた身長だ。

「馬鹿で図体がでかいとは絵に描いたような暴君だな」

紫煙をラーヴアスに向けて吐いた。

その直後にラーヴアスの右拳が夜叉王丸に襲い掛かった。

しかし、繰り出された拳を軽く横に払うと飛び膝蹴りを顔面に食らわせた。

「ぐあっ」

ラーヴアスは鼻血を出して悲鳴を上げた。

間を置かずに夜叉王丸はガラ空きの脇腹に連続攻撃を食らわした。

ラーヴアスはもんどりを打って地面に大きな音を立てて倒れた。

その音を聞いた馬がヒーンと鳴き声を上げて前足を上げて暴れ回り乗っていた黒闇天が落ちた。

「……ッ」

地面に叩き付けられた女は気絶した。

夜叉王丸に倒されたラーヴアスは部下が慌てて抱えるようにして馬に乗らせると女を置いて走り去って行った。

「……女を捨てるのは男の屑だな」

夜叉王丸は苛立った口調で吐き捨てるのと片膝を着いて意識を失った黒闇天を間近で見た。

女というよりは少女と言った年齢だ。

十七、十八で腰まで伸びたアメジストと白が混ざって色彩が薄い紫の長髪に宝石のような瑠璃色の瞳だったが今は閉じている。

手に持っていた扇は離れた場所に転がっていて手に取って開いてみた。

「・・・・・・・・」

“我が娘、黒闇天”

毘沙門天の筆跡で書かれていた字を見て夜叉王丸は間違いなく毘沙門天の娘だと確信した。

「飛天様。その娘は大丈夫ですか？」

壁に隠れていたジャンヌが夜叉王丸に近づいてきた。

「頭を打って気を失っただけだ」

首に手を当てて脈がある事を確認してから答えた。

「ともかく手当てをしないと」

ジャンヌが心配そうに黒闇天を見下ろした。

「近くの宿に部屋を借りよう」

黒闇天を片手で軽々と抱き上げると左手にトランクを持って宿を探し始めた。

残った市場の者は夜叉王丸とジャンヌの背中を信じられない様子で見っていた。

第二十三章：望まれなかった子供

「……………ん」

額に冷たい感触がして黒闇天は閉じていた瞳を開けた。

「……………ここは？」

辺りを見回して何処かの部屋だと分かった。

「気が付きましたか？」

ドアが開いて粥の入った器を持ってジャンヌが入って来た。

「頭の方は大丈夫ですか？」

ジャンヌに言われて黒闇天は馬から落ちて頭を打った事を思い出し頭痛がした。

「大丈夫ですか？」

器を木製のテーブルの上に置くとジャンヌは黒闇天の寝るベッドに歩んだ。

「ここは、何処ですか？」

黒闇天は敬語で尋ねた。

ジャンヌから放たれる気品さに圧倒されたのだろう。

「ここは宿です。気を失った貴方を飛天様が運んでくれたのです」

「飛天様？」

「気が付いたようだな」

再びドアが開き夜叉王丸が中に入って来た。

「お前はッ」

ベッドから起き上がろうとしたが頭痛が酷くなって額を抑えた。

「無理をしてはいけません」

ジャンヌが白い手で黒闇天を優しく抑えた。

その優しさが黒闇天には新鮮な感じがした。

「この主人に感謝しろよ。暴れたお前を休ませてくれたんだからな」

足を進めてジャンヌの隣に立つと威圧的な眼差しで見下ろした。

「……お前の名は？」

「飛天夜叉王丸だ。こっちはメイドのジャンヌだ」

「そうか……お前が“夜叉”の棟梁になった悪魔か」

納得したように頷く黒闇天。

「夜叉”って何ですか？」

ジャンヌが夜叉王丸に尋ねた。

「仏教を護る八つの種族だ。男爵の爵位を得た時に天竺の友人から推薦されてなった」

“夜叉”とは仏教を守護する天竜八部衆の一種族である。

八部衆とは鬼神、戦闘神、音楽神、動物神などが仏教に帰依した護法善神の集団で天衆、龍衆、夜叉衆、乾闥婆衆けんたつば、阿修羅衆あしゅら、迦楼羅衆かろうら、緊那羅衆きんなら、摩羅伽衆ましろかの8つの種族を指す。

八つの種族には、それぞれの特徴や特技があり戦闘に置いては夜叉、阿修羅が随一の強さを誇っている。

「悪魔が善である仏教の守護衆になって良いのですか？」

というか他宗教に所属してはいけないのではないか？

「仏教の場合は天界みたいに戦闘で片を付ける気はないからな。寧ろ共存できるようにしてくれているから問題ない」

ジャンヌの不安を一掃した。

「自己紹介は終わったから質問させてもらうぞ。何であんな事をしたんだ？黒闇天」

自分の名前を呼ばれて黒闇天は目を見張った。

「市場の奴に聞いたが、毘沙門天殿の娘らしいな」

「ふん。世間的には娘じゃ」

「世間的？」

「そうじゃ。貴様も知っているじゃろ？ 毘沙門天殿と吉祥天殿には自慢の娘がいる事を」

「白明天殿か」

「白明天様とは？」

「俺と同じ八部衆に所属していて筆頭種族の“天”の棟梁を務める娘でこいつの姉だ」

「向こうは童を妹として認識してないわ」

「どうやら家庭に問題があるようだな」

夜叉王丸は目を細めた。

「童の容姿と身に宿った力が問題じゃ」

黒闇天は皮肉気に笑って話し始めた。

「両親の容姿と力を受け継いで生まれた白明天殿とは逆に童は容姿も似ず混乱と破滅を齎す力を持って生まれた」

「なるほど。だから、隠れて育ったのか？」

「自分から隠れたのじゃ。偏見と差別の眼差しから逃げる為に」

「そんな……………」

ジャンヌは悲しそうな表情をした。

「主も似たような体験はしたじゃろ？夜叉王丸」

ジャンヌから背けるようにして夜叉王丸を瑠璃色の瞳で見た。

「まあ、な」

ヘルブライ男爵達の差別と人間の頃に味わった屈辱を思い出し苦笑する。

黒闇天も恐らく生まれた時から蔑みと差別の眼差しを受けて来たのだらう。

「童だつて好きで邪神の力など持つて生まれてきた訳じゃない。それなのに……………」

“邪神の肩が”、“出来そこない”、“一族の恥さらし”、“生きる資格なし”、“紫の髪に瑠璃色の瞳を持つ邪神”

数えれば切りがない蔑みの言葉を言われ続けたと話す黒闇天にジャンヌは深い悲しみがあった。

「周りから爪弾きにされて唯一の味方だと信じていた両親からも決別された」

“お前は娘じゃない”

「この言葉を言われた千五百歳の時に屋敷を出てインドに渡って、ラーヴァスと出会ったのじゃ」

「奴は魔王の子。邪神である童には似合う男じゃと思って付き合ってた」

「だが、奴は逃げたぞ。お前を置いて」

淡々とした口調で話す夜叉王丸。

「自分さえ良ければ他人など、どうなっても良い男じゃからな」

投げ槍な口調で話す黒闇天。

「童をどうする積りじゃ？」

「さあな。あの木偶の棒はラーヴァナ殿に言って罰を与えて貰うが、お前の場合は毘沙門天殿に渡すのが筋だろ」

「渡すのか？」

「渡して欲しいのか？」

質問に質問で返されて黒闇天は苦笑いした。

「童としては渡されて欲しくないの。あんな“牢獄”に戻るの嫌じゃ」

自分の生家を“牢獄”と称する辺り余程の悲惨な思い入れがあるのだろうと夜叉王丸は感じ取った。

「そうか。それなら、俺が罰を与える」

「どんな罰じゃ？」

投げ槍な口調で尋ねる黒闇天を見てジャンヌは『出来るだけ軽い罰をと眼で訴えた。』

「ここで働いて金を稼いで壊した物を弁償しろ」

「何じゃ？その罰は？」

黒闇天は拍子抜けした顔で夜叉王丸を見た。

「弁償も立派な罰だ。お前の性格も家庭問題から来たものだど市場の奴らも言っている」

胸を張って喋る夜叉王丸に黒闇天は可笑しいのか笑いだした。

「くっ……ははっはは。面白い男じゃ。初めてじゃぞ。主のような男は」

「……良かろう。主の罰を受ける」

笑い終えた黒闇天は頷いた。

「宿の主人には話を付けてある。今日は粥を食べて休んで明日からでも働け」

「分かった」

「それじゃあな。後、何か遭ったら内に来い。客人として住ませてやる」

背を向けて部屋を出る夜叉王丸。

「それから、これ返す」

夜叉王丸は振り返って布団の上に扇を放った。

扇を投げると夜叉王丸は振り返らずに部屋を出て行った。

「黒闇天さん。弁償が終わったら魔界に来て下さい。力になりますから」

ジャンヌは黒闇天の手を優しく握ると笑い掛けた。

「と言っても殆ど力はありませんけど、それでも話し相手にはなりませんから」

その笑顔が本当に自分を心配している顔で黒闇天は嬉しかった。

「……はい。きっと行きます」

黒闇天はジャンヌに深く一礼した。

「それじゃ、身体には気を付けて下さいね」

握っていた手を放して黒闇天の頭を撫でると部屋を出た。

一人になった黒闇天はジャンヌが持ってきた粥を口にした。

温くなったが、優しさという温かさが含まれていて黒闇天の身体を温めてくれた。

宿の主人に黒闇天の事を頼み終わると夜叉王丸とジャンヌはインドを去り何処かへと旅に出た。

インドを後にした夜叉王丸とジャンヌは半年間の旅を終えて魔界に帰還した。

魔界に帰還した夜叉王丸を待っていたのは養父である皇帝ベルゼブルの結婚話だった。

第二十四章：皇帝の結婚

ベルゼブルに呼び出された夜叉王丸は城に向かい書斎に入るとベルゼブルと結婚相手が待っていた。

「あー、紹介する。こっちが、俺の妻になる源月美夜だ」

夜叉王丸が来ると恥ずかしそうに隣に立つ娘を紹介した。

十五、十六と見える顔立ちで腰まで伸びた艶のある黒髪に大きい黒真珠の瞳は神秘的な美しさがあり肌は白磁の陶器のように滑らかな肌だった。

その姿は一流の人形師が精魂を込めて作り上げた渾身の一品とも言える人形のようなだった。

「は、初めまして。源月美夜と言います。歳は十五歳です」

年齢を聞いて夜叉王丸は我を取り戻した。

「おい。“義親父”」

ビクツと反応するベルゼブル。

夜叉王丸が彼を“義親父”と呼ぶ時は非常に怒っている時である。

「……馬鹿でエロの塊だと常々ながら思っていたが、とうとう未成年にまで手を出したか」

震える左手を同田貫の鐔に掛ける夜叉王丸にベルゼブルは慌てた。

「お、落ち着け！まだ手を出していない。ほ、本当に結婚したいんだ！？」

「その言葉で幾人の女を泣かせたかな？」

「み、美夜！助けてくれ！！」

ベルゼブルは美夜の後ろに隠れた。

もつとも夜叉王丸と同じ位の身長を持つベルゼブルが165の美夜に隠れても見え見えなのだが……

「や、夜叉王丸さん。ベルゼブルは私を愛しています。本当です」

「そうだ。本当だ！！」

美夜の背後から夜叉王丸に言うベルゼブル。

「私からもお願いするわ。飛天さん」

背後から声がして振り返ると昼間なのに青いミディアムに身を包んだ美女が立っていた。

リリムと同じ容姿だが、身体はリリムを遙かに超えた豊満さと大人の女性としての魅力を感じた。

「リリスちゃん」

夜叉王丸は養母を見た。

初代皇帝サタンの正妻であるリリス。

サタナエルとリリムの母にして夜叉王丸の養母でもある。

「美夜も本気でベルゼブルを愛してるし彼も本気よ」

赤い瞳で夜叉王丸を見つめるリリスの表情は本気だった。

「・・・美夜ちゃん」

夜叉王丸は美夜を真っ直ぐに見つめた。

「こいつと結婚するって事は、全悪魔の母親になる事を意味しているよ」

「それでも良いのかい？」

「・・・覚悟は出来ています」

「・・・絶倫の女たらしで浮気癖のある男だけど良いの？」

真剣な話から行き成り変な話に変わって美夜は恥ずかしそうに顔を赤くしたが頷いた。

「飛天！！」

「・・・私は、絶倫の女たらしのベルゼブルでも愛しています」

真剣な眼差しで夜叉王丸を見る美夜。

「ベルゼブル。ちゃんと面倒を見るよ？」

その言葉を聞いてベルゼブルは夜叉王丸に抱き付いた。

「飛天！ありがとう！！」

「放せ。男に抱かれる趣味はない」

冷酷な声でベルゼブルを横に引つ叩いた。

しかし、その顔は何処か二人の結婚を祝福しているように微笑んでいた。

「これから頼むよ。母上」

美夜の手を取り気さくに笑い掛けて夜叉王丸は城を後にして屋敷に戻るとジャンヌにベルゼブルの結婚を伝えた。

「まあ、皇帝陛下が結婚を」

「ああ。俺に結婚しろとか言っていたが自分が結婚する事になった」
自室のソファーに座りながら夜叉王丸は立っているジャンヌに微笑んだ。

「お相手は人間なのですね？」

「何でも俺らが旅に行っている間に人間界で一目惚れして色々と裏

で動いてハートを射止めたらしい」

「大丈夫なのでしょわか？」

「何とかなるだろ。俺も出来る限り力を貸すからな」

夜叉王丸の言葉を聞いてジャンヌは自分のように喜んでいた。

ベルゼブルから結婚の話が聞かされてから半年後に魔天楼で盛大に結婚式が行われる事になった。

当初から懸念していた美夜暗殺などは起らず妃の誕生を喜ぶ声や手紙などが城に寄せられた。

『……用心が過ぎたか』

自分の用心深さに苦笑する夜叉王丸。

今は軍服に身を包んで式場の中で警備の役として立っている。

皇子として本来ならば参加するべきなのだが、堅苦しいのは嫌である為に無理を言っ警備の役に着いたのだ。

「皇子様。以上はありませんか？」

シルヴィアが小声で夜叉王丸に話しかけてきた。

式は始まっていて王族と一部の貴族が参加しているだけで周りは近衛兵などが固めている。

「今の所は以上ない。だが、最後まで気を抜くな」

「心得ております」

夜叉王丸に一礼してシルヴィアは持ち場に離れた。

何時もならシャルロットが割り込んで来るのだが、現在は式場の外を警備している。

初めはシルヴィアと一緒に式場の中を警備させる予定だったが、喧嘩になつては堪らないため夜叉王丸が二人を放したのだ。

『……何事もなく終わってくれ』

夜叉王丸は軍帽を深く被り直して侍従長の前に立つベルゼブルと美夜に視線を移した。

ベルゼブルは詰襟型の黒の軍服を身に纏い腰には装飾が施されているが貫禄のある大剣がぶら下がっていた。

美夜の方は最上級の青と言われる群青色のロングドレスに身を包み髪には色取り取りの宝石が詰められたティアラを被っていた。

魔界では白などは天界などを意味して忌み嫌われて逆に黒や青などが最上級の色とされている。

群青色のドレスを着た姿は地獄に舞い降りた美の女神のようだった。

「地獄帝国皇帝パール・ゼブルと源月美夜を夫婦と認めるため永遠の杯を……」

侍従長の言葉を合図に侍女が盆に載せた黄金の杯を二人に渡して赤い酒を注いだ。

「……我、バル・ゼブル。源月美夜を永遠の伴侶とする事を誓う」

「……源月美夜。バル・ゼブルを永遠の伴侶とする事を誓います」

二人は互いに杯を口に当てて酒を飲んだ。

「この場に居る者。二人が永遠の伴侶である事を認めるか？」

王族達と貴族は頷いた。

「ここに、二人を夫婦として認める」

侍従長が言い終わると拍手が出て二人を祝福し夜叉王丸も小さく手を叩いて養父の結婚を祝った。

式が終わると直ぐに舞踏会場に移り披露目会が始まったが夜叉王丸は披露目会には出ずに舞踏会場を出て帰ろうとした矢先に呼び止められた。

「……夜叉王丸様」

碧色のミディアムドレスを身に纏って腰まで伸びたウェーブの掛った鳶髪を垂れ流して緑色の瞳が夜叉王丸を熱く見つめていた。

『…………アモンの姪じゃねえか』

ヘルブライ男爵を助けた時の娘である事に夜叉王丸は不味い相手に会ったと後悔した。

妖獣大戦が始まる前に何度か夜会に出た度に何処からか視線を感じていたが殺気や敵意などを感じていなかった事から気にしていなかったが、視線の正体はこの娘だったのか。

「この前は危ない所を助けて頂いてありがとうございます」

エレナ嬢は優雅に洗礼された物腰で一礼した。

その仕草などから生まれ持つての品格さだと夜叉王丸は感じながらむず痒さを覚えた。

「いや、あれは前にも言った通り俺の揉め事で巻き込んだ事だから謝らなくて良いよ」

夜叉王丸は柔らかな口調で答えたがエレナ嬢は引かなかった。

「いいえ。あの時、私もう駄目かと思いました。私を助けるために怪我を負ってしまった……………」

静かに歩み寄って夜叉王丸の胸に触れようと手を伸ばしてきた。

「本当に気にしないでくれ」

さらりとエレナ嬢の手から逃げた。

「それよりこんな所には変な噂が立つから早く戻った方が宜しいですよ」

このような場所で年頃の娘が男と居れば変な噂が忽ち流れるのは必定だ。

特に宮廷侍女の情報網は侮れないと夜叉王丸は肌で実感していた。

「私は夜叉王丸様となら噂になっても構いません」

軽い脅しで言ったがエレナ嬢は馬鹿にしたと取ったようで強気な口調で言ってきた。

「父も兄も夜叉王丸様を慕っております。だから、私と噂になれば寧ろ喜びます」

「しかし、私は男爵です。侯爵家とは天と地の差もありますよ」

「男爵と言えど夜叉王丸様は皇子です」

ああ言えばこう言うので一步も引かないエレナ嬢。

『……どうすれば良いんだよ』

どうやったらエレナ嬢から逃げられるか思索していた夜叉王丸に声を掛けてくる人物が現われた。

「あら？誰かと思えばエレナじゃないの」

青色のミディアムドレスに身を包んだりリムはエレナ嬢に挑発的な

口調で話し掛けてきた。

「貴方つて本当に猪突猛進ね。飛天様が困ってるのにお構いなしな
んだから」

「これは私と夜叉王丸様の問題です。リリム様は黙っていて下さい」
紫の瞳でリリムをキツク睨むエレナ嬢。

「義兄である飛天様が困っているのに助けない訳にはいかないわ」

「……………」

「……………」

バチバチツと互いに火花を散らす二人。

夜叉王丸は知らないが、この二人は互いに認めるライバル関係なの
だ。

同じ歳で同じ学年の同じ科でプライドも家柄も高い二人は常に意見
が衝突し成績や人気などでも争っている程の犬猿の仲なのだ。

「…………リリム様。私、負けませんわよ」

「それは私も同じよ」

エレナ嬢の挑戦状にリリムは真っ向から受け止めた。

二人がいがみ合っている内に夜叉王丸が帰ったのを二人はまだ知ら

ない。

城を出た夜又王丸は暫くの間は夜会には出まいと考えていたが、その考えは無残にも打ち砕かれた。

結婚式の後日、披露目会なども終わって一段落が終わった頃に夜又王丸宛にベルゼブルから手紙が来た。

手紙の内容はエレナ嬢との見合い話だ。

第二十五章：侯爵令嬢と見合い

「……ふざけるなよ」

城に赴いた夜叉王丸は怒りを押し殺した声で肘掛椅子に座るベルゼブルに言った。

「結婚だと？冗談じゃない。誰が好き好んであんな人生の墓場に行くかつ」

「まあそう怒るな。俺としても無理強いはしたくなかった。だが、こいつが煩くてな」

隣に足を組んで座るサタンに視線を送るベルゼブル。

「飛天。お前も良い歳だ。そろそろ身を固めるべきだ。ベルゼブルだつて結婚したんだぞ」

落ち着いた口調で諭すように話すサタン。

「それに、相手もアモンの姪ともなると断り辛いんだよ」

「という訳で明日の夕方に万魔殿のレストランで見合いをしてみらうぞ」

二人は笑顔で“命令”だと言った。

養父二人の言葉に夜叉王丸は頂垂れて何も言えずに城を出て行った。

その頃、美夜はベルゼブルに“可愛がられた”ため昼過ぎになっても未だにベッドから起き上がれずにいた。

屋敷に戻った夜叉王丸は気落ちした状態で自室に向かっていているとメイド服に身を包んだジャンヌが前方から洗濯物を持って歩いてきた。

「お帰りなさいませ。飛天様」

夜叉王丸の姿を見るとジャンヌは洗濯物を置いて頭を下げた。

「……ああ。ただいま」

気落ちしたまま返答する夜叉王丸。

「……どうかなしましたの？」

心配そうに話し掛けて来るジャンヌに夜叉王丸は見合いの事を話した。

「……左様ですか」

話しを聞き終えたジャンヌは声が落ち込んでいたが直ぐに明るい声で笑い掛けた。

「飛天様。侯爵家の姫様と見合いするなんて良い話ではありませんか。それに話してみれば好きになるかも知れませんよ」

言葉では夜叉王丸を励ましていたが心情では見合いなどして欲しくないと言いたかった。

しかし、メイドという立場である事が自分の口を堅く閉じさせていた。

「明日の見合い、頑張ってください」

落ち込む夜叉王丸に笑い掛けてジャンヌは洗濯物を持って早歩きで去った。

夜叉王丸から離れないと涙が出て自分の思いを言いそうであったからだ。

『……私はメイド。主人が幸せになる為に存在する身』

自分に言い聞かせたが、溢れ出す涙は止まる事を知らず干したばかりの洗濯物を濡らしてしまった。

ジャンヌが去ってから夜叉王丸は自室に戻って部屋にある木材で作られたオフィスデスクテーブルの隣にあるサイドテーブルの引き出しを開けてキューバ産の高級葉巻モンテクリストを取り出してイムコのオイルライターで火を点けた。

口の中にスパイシーの強烈な味が広がった。

普段はセブンスターを愛好しているが機嫌が最高潮に悪い時か落ち込んでいる時は味や香りの良い葉巻を愛好する。

煙を肺の中に入れたが少し吐いた。

紫煙ではなく白煙が部屋に広がり辺りを白く包んだ。

「……見合い、か」

一人呟くと再び煙を肺の中に入れた。

葉巻を吸い終えた後はダハーカ達を部屋に入れて夜通しに渡って自棄酒を煽った。

翌日の昼過ぎに一人で目を覚ました夜叉王丸はキングサイズのベッドから起き上がって未だに眠い意識を覚醒させるために浴室に行き冷水を頭から被った。

冷たい水が寝ぼけた意識を覚醒させた。

意識を覚醒させた夜叉王丸は自室に戻りタンスの中から軍服を取り出して素早く着ると垂れ下げたままの髪を後ろで結って少し伸び出した髭を剃った。

身嗜みを整えた夜叉王丸は腰のベルトに同田貫をぶら下げると自室を出て屋根伝いに馬小屋に行きユニコーンに乗って屋敷を出た。

ジャンヌに顔を合わせるのが何故か無性に申し訳ない気持ちからの行動であると夜叉王丸は思った。

見合いの場所は万魔殿にある高級レストランで貴族でも中々行けるような場所ではない。

レストランに行くとボーイが一礼してきて夜叉王丸を部屋の奥へと案内した。

店の中にいた者たちは黒髪の長髪に彫りの深い夜叉王丸の姿に釘付

けになったが夜叉王丸本人は気にもせず奥へと歩いた。

「こちらでございます」

店の奥へと案内されて開けられたドアを潜り部屋に入るとフリルの付いた赤いイブニングドレスを着たエレナ嬢が一人で座っていた。

『……あの馬鹿、騙したな』

ベルゼブルからは先に行って待っていると聞いたが、居ない事を見ると自分とエレナ嬢を二人だけにさせる為の嘘だったようだ。

「……遅れてすみません」

夜叉王丸はドアが閉まると椅子に座る前にエレナ嬢に一礼した。

「……いいえ。私が早く来ただけですから」

夜叉王丸を直視せずに緊張した声でエレナ嬢は喋った。

「……そうですか」

夜叉王丸は椅子を引いて座るとチラリとエレナ嬢に視線を動かした。

エレナ嬢は夜叉王丸と眼が合うと直ぐに視線を逸らしてしまった。

『……昨日と豪く違うな』

疑問に思ったが敢えて聞かない事にした。

双方無言で時間は過ぎて行った。

夜叉王丸は無言の空間が嫌で煙草を吸いたくてむずむずしてきた。

「・・・エレナ殿」

「は、はいっ」

エレナ嬢は大きな声で返事をした。

「煙草を吸ってもよろしいかな？」

エレナ嬢は首を大きく振った。

葉巻を取り出してオイルライターで火を点けて煙を吐きながら考えた。

『・・・このままでは埒が開かないし俺から断るか』

男から断るのは女性を蔑んだ事とされているが、それで見合い話が出て来ないのならそれで良いと夜叉王丸は思った。

「・・・エレナ殿。私は貴方と結婚できない」

葉巻を携帯灰皿に押し付けて消すと自分の気持ちを伝えた。

エレナ嬢は眼を見開いて口を開こうとした。

「私は貴方に相応しくない。貴方にはもっと相応しい男が居る筈です」

早口に言つと夜叉王丸は席を立ちドアノブに手を掛けた。

「待つて下さい！夜叉王丸様は私が嫌いなのですか？」

後ろからエレナ嬢の縋りつく声が聞こえた。

「嫌いではありません。ただ私に貴方のような若くて美しい方は相応しくないだけです」

振り返らずに答えた。

「私のように歳を取った男より、もっと若くて誠実な若者を選びなさい」

ドアを開けて部屋を出ようとした。

「夜叉王丸様！私、諦めません。必ず貴方の妻になってみせます！」

エレナ嬢が泣きながら訴える声を聞きながら夜叉王丸は部屋を出てレストランを後にした。

レストランを出て屋敷に戻ると直ぐに軍服を脱いで何時もの服装に戻った。

「ベルゼブル達に怒られるだろうが、仕方ないよな」

苦笑しながら葉巻ではなくセブンスターを吸っているとドアを叩く音がした。

「はい。どうぞ」

入るのを促すと失礼しますと控えめな口調でドアが開いてメイド姿のジャンヌが入って来た。

「お帰りなさいませ。飛天様」

ジャンヌは夜叉王丸に一礼した。

「ただいま。ジャンヌ」

夜叉王丸はジャンヌに微笑んだ。

「あの、見合いはどうしたんですか？」

言い辛い口調で聞いてきた。

「相手方に失礼だと思っていたが俺から断った」

ジャンヌは嬉しくて喜びそうになったが、心押し殺した。

しかし、夜叉王丸は分かっていたのか意地悪な笑みを浮かべた。

「俺が見合いを断わって嬉しかったか？」

「え？は、はい」

思わず答えてしまって慌てて口を塞いだ。夜叉王丸は腹を抱えて笑った。

「ははははは。正直な女だ」

ジャンヌは恥ずかしくて赤面したまま俯いた。

『私ったら何をしてるんだろ』

恥ずかしくて穴があったら入りたい気持ちになった。

暫く夜叉王丸に笑われているとドアを叩く音がした。

「誰だ？」

夜叉王丸が椅子に座ったまま尋ねた。

「ヨルムです。ビレト様とザパン様がお見えになっています」

ドア越しに控えめな声で喋るヨルムンガルド。

「あの堅物コンビが？」

夜叉王丸は何事かと首を傾げた。

ベルゼブルが創立した八工騎士団の総長を務める王族のビレトとザパン。

二人とも生まれ持つての気質なのか軍人肌の王族で厳つい顔をして何時も猛禽類のような鋭い眼差しをしている。

新米の騎士や兵士を鍛え上げる教官として知られているが二人の訓

練を受けた者は内務勤務か除隊を申し出るなど新米潰しとして恐れられている。

夜叉王丸も二人の訓練を受けたが無事に切り抜けて一部の新米からは羨望の眼差しを受けている。

「何の用だと？」

「はあ、見合いの件で話があると……」

見合いの話と聞いて夜叉王丸は感じた。

『……怒りに来たな』

まだ数時間も経っていないのに情報を掴むとは流石はベルゼブルの側近だと思いながらどうしようかと考えた。

下手に追い返すと余計に怖い目に遭う事を夜叉王丸は過去の経験から知っているため覚悟を決めてヨルムンガルドに二人を部屋に入れるように言った。

二分と経たない内にドアが開き軍服を纏ったビレットとザパンが入って来た。

その表情は何時も以上に険しかった。

ジャンヌは二人の表情を見て強張らせた。

「ジャンヌ。少し茶を淹れて来てくれ」

夜叉王丸は逃がすようにジャンヌを部屋から出した。

『……飛天』

ビレットとザパンが火山の大噴火の如く怒りを抑えた声で夜叉王丸の名前を呼んだ。

『この……』

夜叉王丸は次の事を予想して椅子からコーヒーターブルに移り頭を下げた。

『大馬鹿者があああああ！！』

大音量の音が屋敷を覆って弱余震を起こした。

「……あんまり怒鳴らないでくれ。屋敷が壊れる」

テーブルの下から顔を出して二人に忠告した。

「……貴様がわし等を怒らせるような真似をしたのだから」

怒りが治まったのかビレットが低い声を出しながら夜叉王丸を睨んだ。

「だからって大声を上げ過ぎだ。それに何でおっさん達なんだよ。普通はベルゼブル達が怒る筈だろ？」

「ベルゼブル様もサタン様も奥方に怒られている」

ザパンの返答に夜叉王丸は首を傾げた。

「何で怒られてるんだ？」

「自分たちに相談も無しに見合いをさせたのが許せないらしい」

「それで、おっさん達が代わりに？」

「そうだ。これでも貴様の“保護者”であると自負している」

ビレトの言葉を聞いて夜叉王丸は苦笑した。

彼らが言う“保護者”とは文字通り夜叉王丸を保護する役職である。

昔の夜叉王丸は自暴自棄で戦場に死に場所を求めるような男だった。

それを心配したベルゼブルがビレトとザパンを“保護者”という名目で護衛役として付ける事にした。

今は自暴自棄ではなくなった事からシルヴィアやシャルロットに護衛役を任せているが夜叉王丸の父親的存在としては自負している。

「俺みたいな息子を持って御苦労様だな」

「自覚しているなら結婚して親を安堵させんか」

「まだ結婚する気ない」

互いに一步も引かずに口論しているとドアを控えめに叩く音がした。

「飛天様。お茶を淹れて来ました」

ジャンヌの声がして夜叉王丸は自分からドアに近づいて開けてやった。

「ありがとうございます。飛天様」

紅茶とコーヒーを載せた盆を両手に持ったジャンヌがドアを開けている夜叉王丸に微笑えんだ。

「気にするな」

微笑み返す夜叉王丸を見てビレットとザパンは何かを感じ取り眼を細めた。

「そなたが天使のメイドか？」

ビレットが鋭い眼差しを向けて尋ねた。

「は、はい。飛天夜叉王丸様のメイドを務めるジャンヌ・シエル・ベルサイドです」

ジャンヌは緊張しながら盆をテーブルの上に置いて一礼した。

「パール殿から聞いていたが聞きしに勝る娘だな」

ザパンの言葉にジャンヌは首を傾げた。

「あの、一体……」

「いや。類い稀なる美貌と品格を具えた天使の娘に飛天が熱を上げ

ていると噂を聞いたのだ」

「え？あの……」

ジャンヌは恥ずかしそうに頬を赤面させて俯いた。

「そなたと飛天の姿を見て解った。このような美人が相手なら見合
いを断わりたくもなる」

鋭い眼差しを優しくに緩めて笑うザパンとビレト。

「ふん。お節介な奴らだ」

夜叉王丸は舌打ちしながらも笑っていた。

夜叉王丸がエレナ嬢と見合いを破棄してから一年が経った時に魔界
で大きな出来事が起きた。

地獄帝国皇帝のベルゼブルの妻である美夜が妊娠したのだ。

第二十六章：義妹の誕生

夜叉王丸はベルゼブルから突然、城から呼び出されて美夜の妊娠を言われて啞然とした。

「何だよ。少しは喜んだらどうだ？お前に妹が出来るんだぞ」

「妹って、もう分かってるのか？」

「まだ分かんが女の子が良いな。美夜に似て可愛い娘が欲しい」

隣に座る美夜の腹を撫でるベルゼブル。

「私はベルゼブルみたいに格好良い男の子が欲しいな」

美夜の方はベルゼブルとは逆の意見を述べた。

「美夜に似た女の子だったら魔界一の姫になるよ」

「男の子だったら魔界一の美形になるわ」

周りの眼など気にせずラブラブな雰囲気を出す二人に夜叉王丸は呆れ果てて部屋を出た。

「まったく。惚気話を聞かせる為に呼び出したのかよ」

溜息を吐きながら廊下を歩く夜叉王丸。

今の時間は午前でリリムなどは学生であるため学校に行っている事

で大手を振って歩ける。

シルヴィアやシャルロットなども仕事でだしペイモンなどはベッドの上だろう。

「たまには自分の部屋で昼寝でもするかな」

バラテに引越してから城の部屋に行つた事はない。

「・・・行つてみるか」

気紛れで行く事を決めた夜叉王丸は城にある自分の部屋へ足を運んだ。

自室に赴くと部屋は定期的に整理されているのか埃一つ無く当時の面影が残っており煙草の臭いも染み付いていた。

「どこの誰だか知らんが物好きだな」

夜叉王丸は綺麗に整理されたベッドの上に靴を履いたまま乗ると身体を放り出して寝ころんで五分と経たない内に意識を失った。

朝早くにベルゼブルに呼び出された為に低血圧と寝不足が一緒になったからだ。

意識を放つてどれ位の時間が過ぎたか分からない。

眼を覚ますと辺りは夕日になっていて侍女や兵士などは帰る支度をする者もいた。

「……かなり寝ていたようだな」

ベッドから起き上がるうとした時に身体に毛布が掛れていたのに気づいた。

「誰かが掛けてくれたのか」

微かにジャスミンの香りがした。

「……シャルロットか？」

ジャスミンなどの花の香水を付けるのはシャルロット辺りだ。

ペイモンは薔薇などのキツメの香水を使うしシルヴィアやベリフェゴールなどは職業柄か香水の類は嫌っている。

「……まあ、誰でもいいか」

毛布を丁寧に畳むとベッドの上に置いて身支度を整えて部屋の窓から翼を広げて屋敷へと飛んだ。

「……そういえばサタナエルの野郎を殺すのを忘れていた」

ほったらかしにして忘れていたが夜叉王丸が殺さない限り牢獄にいるサタナエルは生き続ける。

「まあ、明日にでも殺すか」

物騒な事を言いながら夜叉王丸は養父夫妻の子供誕生に喜んでいた。

屋敷に帰るとジャンヌに美夜の妊娠を伝えた。

「まあ、妃様に御子が出来たのですか」

ジャンヌは夜叉王丸から受け取ったトレンチコートを受け取って驚きの声を上げた。

「ああ。ベルゼブルは女が欲しいって言ってた」

「俺としても女が望ましいな。ベルゼブルに似たら苦労が絶えない」

苦笑する夜叉王丸に釣られてジャンヌも笑った。

「まあ、どっちが生まれても喜ぶだろうな」

夜叉王丸はジャンヌにコートを預けると自室へと向かった。

ジャンヌは手に持ったコートを持って自室に行くと継ぎ接ぎだらけのコートを黒い糸で縫い始めた。

縫い終わるとティナに再び手紙を書く事にした。

『新愛なるティナへ』

バルトはどうですか？飛天様の屋敷は春の季節が訪れた事を表すように庭で桜が咲いています。桜というのは飛天様の故郷である日本の代表的な花の木です。桃色の花弁がとても綺麗です。

飛天様は夜になると桜の下で日本酒を一人で飲んでいたのですが、この前は屋敷の皆を混ぜて花見をしました。その時は私もお酒を飲んで楽しかったです。

休暇が取れたら是非とも魔界に来て下さい。飛天様も歓迎して

くれると言っています。

それでは、また手紙を書きますね。

貴

方の姉、ジャンヌより』

手紙を書き終えると夜叉王丸のコートを持つと部屋を出て夜叉王丸の部屋に向かった。

夜叉王丸は後日、サタナエルを牢から出してサタン達が見守る中でサタナエルを殺した。

最後まで泣き叫んで命乞いをしたサタナエルを夜叉王丸は無情に斬り殺した。

サタナエルを殺して反乱分子は殆どを根絶やしにする事ができた。

それから時が経ち美夜は十六歳という若さで女の子を産んだ。

娘の名前は真夜と名付けられて夜叉王丸の義妹として地獄帝国皇女となった。

第二十七章：皇女のお披露目

母子ともに健康な女の子は真夜と名付けられて大切に育てられた。

真夜の容姿は黒髪に金眼で両親の容姿を均等に受け継いで赤ん坊ながら将来美人になる事を約束された娘であった。

城の者からは魔界の天使などと言われて溺愛されてベルゼブルの愛情は半端ではなかった。

そんな真夜を貴族たちに対して披露する披露目会が今夜、魔天楼で行われるのだが……

「ほぎゃー！！びえええん！！」

控えの間で大声で泣く赤ん坊がいた。

地獄帝国皇女、真夜だ。

「あー、よちよち。泣かないで。真夜ちゃん」

必死に泣き止まない真夜を抱きながら宥めようとする美夜。

「ほら？パパだぞ？」

ベルゼブルが笑顔で真夜を覗き込んだ。

「びいやああああん！！」

真夜は更に泣き声を大きくした。

「陛下っ。真夜様を泣かせてどうするんですか?!」

「そつだぞ！我が子を泣かせるなんて最低だぞ!？」

外野のビレットやルシユファー達が口々に避難の声を上げた。

それに拍車を掛けるように真夜の泣き声も大きくなった。

「どうしたら泣き止んでくれるの?」

途方に暮れる大人達を尻目に真夜は泣き続けた。

「どうかしたのかい？美夜ちゃん」

扉を開けて軍服姿に身を包んだ夜叉王丸が入って来た。

今夜の疲労会でも護衛という事で出るために出席したのだ。

「あ、飛天さん。真夜ちゃんが泣き止まないの」

美夜が助かった、という表情をした。

「どうせ、その馬鹿が泣かせたんだろ？」

ベルゼブルに呆れた眼差しを向けながら美夜から真夜を受け取るとさつきまで泣いていた真夜が泣き止んだ。

「おお、よしよし。良い子だな」

抱きながら真夜の頭を優しく撫でた。

「うー、きゃあきゃあきゃあ」

真夜は嬉しそうに笑った。

「真夜ちゃんはお兄ちゃん子ね」

美夜が紫色の瞳を細めて笑いながら真夜の指を撫でた。

ベルゼブルと式を上げてから美夜は魔族になった証として瞳の色が変化して黒から紫色になっていた。

「何で、俺の子供なのに……」

ベルゼブルは完全に不貞腐れて夜叉王丸を睨んだ。

「子供は本当に優しい奴を理解するんだよ。なあー真夜」

夜叉王丸が笑い掛けると真夜は頷いた。

「そ、そんな……!!」

ベルゼブルは奈落の底に落とされたように呆然とした。

真夜が泣き止んでから十分後に披露会に出た。

護衛をする予定だったが真夜が夜叉王丸から離れるを泣いて嫌がったので夜叉王丸が抱いた状態で披露目する事になった。

「この方が真夜様だ」

侍従頭が夜叉王丸を促して一段高い場所に立たせた。

『何で俺がしなきゃいけないんだよ』

嘆息しながら真夜を高々と上げた。

「きゃあきゃあきゃあ」

真夜は高い高いをされたと思ったのか嬉しそうに笑った。

その笑顔を見た貴族たちはほうと溜め息を吐いた。

赤ん坊ながら類い稀なる容貌と純粋な笑顔に癒された。

物の数分で披露は終わり宴が幕を上げた。

何時もなら風のように立ち去る夜叉王丸だったが真夜を抱いたまま
で帰る訳にはいかない事から宴に残る事になった。

「皇女様の誕生、御喜び申しあげます」

「可愛い姫様ですね」

「夜叉王丸様って子供好きなんですか？私も子供好きなんです」

何人もの貴族が真夜を抱いた夜叉王丸に言葉を掛けて自分を売り込
んでいた。

エレナ嬢との婚約を破棄したが、逆に誇り高い皇子と取られてしまつて人気が更に高くなつた。

「あつっ。きゃあきゃあ」

夜叉王丸が作つて渡した風車を持ちながら笑顔を振り撒いていた。

その間ベルゼブルは不機嫌を通り越して不貞腐れた状態で美夜が宥めていた。

「なあ、真夜。そろそろ帰つていいだろ？」

些かうんざりしてきた夜叉王丸は真夜に話しかけた。

「むうー、めっ!！」

言葉を理解したのか不明だが、真夜は頬を膨らませた。

「……勘弁してくれ」

項垂れて嘆息する夜叉王丸。

「皇子様」

落ち込む夜叉王丸に軍服姿に身を包んだシルヴィアが話し掛けてきた。

「悪いな。シルヴィア。護衛をすっぱかして」

「本来なら皇子様も参加する筈だったのですから構いません」

事務的な口調で話すシルヴィアに夜叉王丸は苦笑した。

「そんな態度だと真夜が怖がるぞ」

抱いていた真夜を見せる。

「臣下である私が皇女様に馴れ馴れしく出来ません」

あくまでも事務的な態度を取るシルヴィア。

「やれやれ。このお姉ちゃんは駄目だな」

夜叉王丸は真夜に話しかけた。

「めっ、めっ」

真夜はシルヴィアを小さな乳白色の指で指した。

「あらあら。皇女様に怒られるなんて臣下としてなってないんじゃないですか？」

困惑するシルヴィアにグレーの軍服を着たシャルロットが口端を上げて笑い掛けてきた。

「白豹っ」

シルヴィアは鋭い眼差しをシャルロットに向けた。

「こんばんは。飛天様」

シャルロットはシルヴィアを無視して夜叉王丸に話しかけた。

「おう。警備ご苦労様」

夜叉王丸は労いの言葉を掛けた。

「いいえ。大切な飛天様と皇女様の身を護るためなら何でもありません」

真夜に笑い掛けるシャルロット。

「きゃあきゃあ」

シャルロットの笑顔に答えるようにして笑う真夜。

「まあ、笑ってくれましたわ」

喜ぶシャルロット。

「くっ」

シルヴィアは悔しそうに齒ぎしりした。

「あら？悔しいなら貴方も真夜様に笑ってもらえば良いじゃない」

「もつとも事務的な口調で臣下の態度しか取れない堅物に真夜様は笑ってくれないでしょうけどね」

「……私に喧嘩を売っているのか？」

低い声で喋るシルヴィアにシャルロットは不敵に笑った。

「別に。ただ事実を言っただけよ」

シャルロットは平然とした態度を取った。

「……」

「……」

互いに無言で睨み合った。

夜叉王丸は危機感を感じたのか急いで真夜を抱いて離れた。

「腹が減ったな」

真夜を抱いていると腹の虫が小さく鳴いた。

「何か食物でも調達してくるかな？」

隅っこのテーブルに置かれている食べ物を見る夜叉王丸。

しかし、真夜を抱いたままで取るのは難しい。

「誰か預けられる奴はいないか？」

ベルゼブル達は貴族たちと談笑をしてダハーカ達は屋敷で留守番役。

「あ、あの、ひ、飛天様っ」

背後からリリムが話し掛けてきた。

「リリム。ちょうど良い。真夜を暫く預かってくれないか？」

問答無用でリリムに真夜を抱かせた。

「真夜。少しリリムお姉ちゃんと遊んでくれ」

ポンポンと優しく頭を叩き食べ物を取りに行った夜叉王丸を真夜は笑いながら手を振った。

「うー、きゃきゃ」

真夜は小さな手でリリムの髪を掴もうとしていた。

「……………可愛い」

リリムは赤ん坊を優しく見つめた。

『飛天様なら子供を優しく育ててくれそう』

夜叉王丸なら自分との間にできた子供と一緒に育ててくれると甘い妄想を描くリリム。

「……………こんばんは。リリム様」

妄想していたリリムの頭が一瞬で冷めた。

「あら？貴方も来ていたの？エレナ」

リリムは真夜を抱いたまま振り返った。

「ええ。夜叉王丸様が来ると聞いたので」

「振られたのに諦めないの？」

「我が家の家訓で諦めは負けを意味するので」

「諦めも肝心って言うわよ」

「そんなものは敗者の戯言です」

「諦めたら負けです。だから、私は諦めません」

真つ直ぐにリリムを睨むエレナ。

「・・・・・・・・」

リリムは真つ向から受け止めた。

「ん？ひい、ひいんっ」

真夜は二人の険悪な雰囲気を感じたのか泣き出そうとしていた。

「ちょっと真夜ちゃんが泣きそうじゃないの」

紫のロングドレスと着たペイモンと黒のロングドレスを着たベリフ
エゴールが近づいてきた。

「まったく女の子が赤ちゃんを泣かせるなんて情けない」

ペイモンはリリムから取り上げるように真夜を抱き上げた。

「そんな事じゃ飛天に嫌われるわよ」

ベリフェゴールが眼鏡のズレを直しながら二人を見つめた。

『うつ……』

二人は口籠った。

「もつとも貴方達みたいに未熟な娘じゃ飛天は振り向かせられないけどね」

ペイモンが意地悪そうに笑った。

「飛天は“大人”の女性が好みなのよ」

真夜を抱きながら豊潤な胸を強調させるペイモン。

「違うわよ。飛天は“知的”な女性が好みよ」

ベリフェゴールが対抗するように言った。

違うなど違わないなど言い合う二人。

「どっちも大して好みじゃない」

そこへ夜叉王丸が美夜を連れて割って来た。

「俺の好みは優しくて癒される女性だ」

真夜を美夜に渡しながら夜叉王丸は答えた。

「飛天さんって意外と古典的な女性が好みなのね」

美夜が意外そうな顔をした。

「自分勝手な女には散々な目に遭ったからな」

苦笑しながら夜叉王丸は答えた。

「ふうん。それで、好みの女性は近くに居るの？」

「ああ。俺の身近にね」

「もしかして……」

美夜が何かを言おうとしたのを夜叉王丸は指を唇に当てて抑えた。

「そこから先は言わないでくれ」

口を抑えられながら美夜は頷いた。

「じゃあ、俺は帰るよ」

夜叉王丸は真夜の頭を撫でると舞踏会場を去って行った。

第二十八章：最愛の女性

真夜の披露目会が終わって何か月が経った。

その間に何も起こらずに平和な時が過ぎて行き季節は桜や梅が散って草木が緑色に代わって春が終わり六月になっていた。

六月のある日、夜叉王丸は一人で人間界のとある場所に来ていた。

海が見える場所の高い丘で小さな墓石が立っていて墓石名には“最愛の女性”と書かれていた。

彼女の最後を叶える為に遺骨を埋めた場所。

『海の見える見晴らしの良い場所がいいな』

生前に彼女が言った願いを叶えて夜叉王丸は人間の手が来ない場所に彼女を移した。

この場所は誰にも知られていない場所で人間の手が入っていないため自然が豊かで海も綺麗なままだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜叉王丸は墓石に一輪の花を、胡蝶蘭を捧げた。

彼女が愛した白く美しく気高い花。

六月には季節外れの花だが彼女には似合っている。

天使のように純粹で優しく女神のように気高かった彼女。

世間から爪弾きされた自分を暗闇から救ってくれたが、非業の死を遂げた彼女。

夜叉王丸はソフト帽を取ると胸に当てて黙祷した。

瞳を閉じると何時も鮮明に思い出す。

自分が無力だったばかりに彼女を見殺しにしてしまった。

それが悔しくて悲しかった。

しかし、それよりも嫌な事は時が経つ事に彼女との思い出を忘れる自分だった。

「……時とは残酷だな」

一人呟くように夜叉王丸は言った。

その声は哀感に満ちていた。

墓石を眺めていると雨が降り始めた。

傘を差さずに立つ夜叉王丸に容赦なく雨は降り注いだ。

全身が雨で濡れても夜叉王丸は墓石を眺め続けた。

不意にセブンスターを取り出してジッポで火を点けると紫煙を吐い

た。

「……………」

雨で濡れて湿った煙草を素手で揉み消すと懐に仕舞い背を向けて歩き出した。

「……また来るよ」

墓石に語りかけるように言って夜叉王丸は丘を降りた。

夜叉王丸が去ってから雨は止まずに無情にも墓石に添えられた胡蝶蘭を襲ったが、それでも胡蝶蘭は気高さを失わなかった。

それは夜叉王丸が愛した彼女を表しているかのようにも見えた。

墓石を去った夜叉王丸は雨に濡れながら道を歩き続けた。

六月は雨の季節。

この月は夜叉王丸にとって一番嫌な季節であった。

雨が降る中で彼は自分の無力さを知った。

魔力もなく力もなく権力もなかった自分は好きな女一人も護れなかった情けない男だと知らされたのだ。

それが悔しくて悲しかった。

雨で濡れた彼女は血を流しながら目を見開いて死んだ。

その瞳は無念で満ち溢れていた。

時が経つ事に彼女との想い出を忘れる中で瞳だけは忘れない。

何故、自分が殺されるのかと訴えている瞳。

本来なら幸せで笑顔を見せる筈だった瞳を一瞬にして奪った奴ら。

あいつらが憎い。

あいつらを見逃した法が、警察が、彼女の死を面白おかしく報道したメディアが、娼婦だからと白い目を向けた世間が……全てが憎い。

何度も滅ぼそうと考えたが、夢の中で彼女が現われて止めるのだ。

『こんな事はしないで。私を忘れて』

何度も自分に懇願する彼女を何度も抱き締めた。

しかし、眼を覚ますと温もりも彼女もなかった。

あつたのは虚しさだけ……

「……俺はどうしたら良いんだ」

苦しそうに呟く夜叉王丸。

その言葉を隠すように雨が酷くなり雷が鳴った。

第二十九章：ずっと傍に

ジャンヌは気を揉んでいた。

今朝、夜叉王丸を起こしに部屋に行ったら既に夜叉王丸の姿はなかった。

誰に聞いても知らないと言っていた。

ダハーカ達も用事があると言って出かけて屋敷にはジャンヌを含めた使用人と風の翼の兵士だけだ。

夜になっても夜叉王丸は帰らなかった。

「・・・飛天様」

もう寝ようかと思って寝室に向かおうとした時に玄関から音がした。玄関の方へ向かってみると全身をずぶ濡れにした夜叉王丸が立っていた。

「飛天様！どうしたんですか？」

ジャンヌが駆け寄ると夜叉王丸は音も立てずに倒れるように前につきのめった。

「飛天様！！」

夜叉王丸を支えようとして抱き締めたが、体格の差で押し倒されそ

うになった。

何とか踏ん張って夜叉王丸を支えて、かなりの時間を労したが夜叉王丸の自室まで運んだ。

自室まで運ぶとキングサイズの質素なベッドに寝かせた。

酒の臭いがした事から恐らく飲んで来たのだろう。

「……どうしてこんなに飲んだのかしら？」

普段の夜叉王丸は嗜む程度しか飲まないのに、今日は酔い倒れるまで飲んだのには何か理由があるはずだ。

しかし、詳しくは詮索せずには濡れの夜叉王丸を何とかせねばいけない。

「待ってて下さいね。直ぐにタオルを持ってきますから」

急いで部屋を出ようとしたが後ろから腕を掴まれて強い力で引き戻された。

「え？」

振り向いた瞬間に夜叉王丸に唇を奪われた。

「!!!」

一瞬なにをされたか解らなかったが直ぐに理解して夜叉王丸を押し退けようとしたが太い腕で抱き締められた。

抱き締める腕は力強くも優しく壊れ物を扱っようだった。

「……………神流」

抱き締められて耳元で囁かれる言葉。

「……………神流？」

ジャンヌの声を聞いて夜叉王丸は意識を取り戻したのか、ゆっくりとジャンヌを引き離れた。

「……………すまない」

夜叉王丸はジャンヌから目を背けて謝った。

「……………大丈夫です」

高鳴る鼓動を抑えながらジャンヌは夜叉王丸を見つめた。

「……………神流とは恋人ですか？」

聞いてはいけないと理解していたが、口が勝手に動いて言葉を出した。

夜叉王丸は一瞬だけ驚いた顔をしたが直ぐに視線を逸らすと話し始めた。

「……………神流は、俺が人間だった時の恋人だ」

恋人と聞いてジャンヌは胸が痛くなった。

「もっとも当の昔に死んでいるが、な」

どこか自嘲気味に笑う夜叉王丸。

「俺が無力だったから神流は死んだんだ」

「飛天様が無力？」

「ああ。俺が弱かったばかりに神流は目の前で八つ裂きにされた」

「!?!」

ジャンヌは息が止まった。

「神流は娼婦だった。だけど、俺はあいつが本気で好きだった」

それから夜叉王丸は自分の過去を話し始めた。

人間の頃は、魔術師の一家に生まれたが魔力がない事で一族から村
八分にされて十八歳の時に家を出てフランスの外人部隊に入り戦場
を駆け巡り数年後に日本に帰国して、神流と出会ったと・・・・・・・・
・・・・・・・・

「俺とあいつは結婚の約束をした。だけど・・・・・・・・あいつ
等が、あの糞共が神流を殺した」

ギリッと唇を噛む夜叉王丸。

「娼婦を汚らわしい存在だと言って神流を殺した」

「俺は復讐に燃えて乗り込んだが、何も出来ずに敗れ去った」

「神流を殺したのに警察は権力の前に平伏してメディアも猟奇的殺人だと面白おかしく書いた。誰も、神流の死を悲しまなかった」

「神流を失った俺は、復讐のために人間を捨てた」

ジャンヌは夜叉王丸に何も言えなかった。

『……何て悲しい方なの』

「悪魔になっても夢に出て来るんだよ。いつも悲しそうな瞳で俺を見て抱き締めるんだ」

「俺も抱き締めたが目を覚ますと神流も温もりもなく在るのは空虚だけだった」

「きつと神流は俺を怨んでいるのさ。俺が無力だったから見殺しにしたんだと。そして誰かを好きになれば、また何処かへ行ってしまうと言っているんだ」

悲しげに笑う夜叉王丸にジャンヌは何も言わずに抱き締めた。

服が濡れたが気にせず夜叉王丸を抱き締めた。

「……そんな悲しいことを言わないで下さい」

「神流さんは飛天様を怨んでなんていませんよ」

夜叉王丸の濡れた髪を愛しむように撫でた。

「・・・飛天様は何も罪を犯していません。だから、自分を責めな
いで下さい」

「大丈夫です。私が貴方の傍にいます」

ずっと傍で貴方を支えてみせる。

だから、そんな悲しい顔をしないで。

ジャンヌの言葉を聞いて夜叉王丸は涙を一筋、流した。

罪という名の鎖をジャンヌが経ち切ってくれたのだ。

夜叉王丸が涙を流す間ジャンヌはずっと抱き締めて頭を撫でていた。

幼い子供を慰めるような母親のようにして……………

ジャンヌに抱き締められながら夜叉王丸は何時の間にか眠ってしまった。
った。

眠ってしまった夜叉王丸を抱き締めながら横にするとジャンヌも一
緒に横になって二人で眠った。

第三十章：悪い予想

ジャンヌに鎖を断ち切ってもらってから既に三年の時間が過ぎた。

その間に夜叉王丸の軍団である風の翼では変化が起きていた。

民間医だったソフィーが正式な軍医として風の翼に配属されたのだ。

妖獣大戦を機に大きな戦は起きなかったが小さな小競り合いなどが頻繁に起きていたので夜叉王丸の軍団も戦っていた。

その度にソフィーは参加していた事で正式に軍医として働きたいと夜叉王丸に進言してきた事で軍医となった。

ソフィーの他にも何人かの医者が軍医として参加してきた。

しかし、戦がない時は民間医として万魔殿の民衆の治療をしている。

今は戦もないので夜叉王丸は桜の木の下で昼寝をしていた。

そこに近づく小さな影があった。

影は夜叉王丸の前で止まると小さな手で夜叉王丸を揺さ振った。

「ひーてん」

幼い声で夜叉王丸の声を呼んだが夜叉王丸は眠ったままだった。

「ひーてん！ひーてん！！」

起きない夜叉王丸を小さな手は何度も揺さ振った。

「まあ、真夜様。入らっしゃったのですか」

ジャンヌが幼子、真夜に話し掛けた。

「あ、ジャンヌー。ひーてんが起きないの。遊んでくれるって約束したのに」

真夜は金色の可愛らしい瞳を輝かせながら頬を膨らませた。

「飛天様。起きて下さい。真夜様が来ていますよ」

ジャンヌが鈴を転がしたような声で夜叉王丸に話しかけると直ぐに眼を覚ました。

「ん？おー、真夜。来たのか」

寝ぼけた眼差しで真夜の黒髪を優しく撫でた。

「むー、遊んでくれるって言ったのに」

真夜は頬を膨らませて睨んだ。

「悪い悪い。寝不足でな」

ポンポンと真夜の頭を撫でる夜叉王丸。

「ひーてんは何時もお昼寝してるね」

真夜の言葉に夜叉王丸は苦笑した。

「そうでもないぞ」

幼い真夜を軽々と抱き上げる夜叉王丸はジャンヌを促して歩きだした。

「あ、真夜！！来たのか？」

フェンリルが尻尾を振りながら夜叉王丸に抱かれている真夜に駆け寄った。

「フェン。こんにちは」

真夜は夜叉王丸から降りるとフェンリルの頭を撫でた。

「おお、真夜。いらっしやい」

茨木童子が真夜の頭を撫でた。

「これは真夜様。ようこそ屋敷へ」

ヨルムンガルドも真夜の姿を見ると笑顔で出迎えた。

「真夜！！会いたかったぞ！！」

ダハーカは真夜を力いっぱい抱き締めた。

「く、苦しいよー」

真夜はジタバタ暴れた。

「おい。真夜様が苦しんでるぞ」

ゼオンがダハーカから真夜を奪い取った。

「大丈夫ですか？真夜様」

「うん。ありがとう。ゼオン」

真夜の笑顔を見てゼオンも釣られるようにして笑った。

三歳になった真夜は何度か夜叉王丸の屋敷を訪れるようになった。

勿論、護衛は一緒だ。

護衛はビレットとザパンの二人。

どちらも王族で叩き上げの軍人として名高い。

この二人の他にも夜叉王丸付きの護衛であるシルヴィアとシャルロットがいる。

本来なら夜叉王丸の護衛だと言って反対するのだが、夜叉王丸たつての頼みと真夜の護衛をすれば主人である夜叉王丸の屋敷に訪れられるという利益がある事で護衛をする事にした。

「シルヴィア達は？」

夜叉王丸がゼオンから真夜を受け取り尋ねた。

「玄関で待ってるよ」

「それじゃ迎えに行こうか」

真夜の頭を撫でながら夜叉王丸は玄関へと向かった。

玄関に行くと軍服に身を包んだビレット達が待っていた。

「ほおう。珍しく低血圧ではないのだな」

ビレットが物珍しそうに言った。

「こいつが起こしたからな」

肩に抱き上げている真夜の頭を撫でた。

「まあ、立ち話もなんだ。上げれ」

夜叉王丸はビレット達を屋敷へ招き入れた。

「いらっしやませ」

ジャンヌとメイド達がビレット達に頭を下げた。

「お久し振りだな。ジャンヌ殿」

ビレットとザパンはメイドであるジャンヌに頭を下げた。

彼女が夜叉王丸を三年前に救ってくれてから皇帝を始めとした王族から信頼されて敬意を表されるようになった。

「こんにちは。ジャンヌさん」

シャルロットが気さくに挨拶するとジャンヌも返答した。

母親が墮天使であるシャルロットは魔界で生きるジャンヌに強い感銘を受けて仲良くしている。

「……失礼する」

ぶすつとした表情でシルヴィアも挨拶した。

貴族であり純血であるシルヴィアはジャンヌを下賤な天使風情と見下していたが夜叉王丸の逆鱗に触れた事で雷を落とされたため不服だが敬意を表している。

「まあ、座れや」

夜叉王丸に勧められてビレト達が座った。

「真夜。少しジャンヌ達と遊んでてくれないか？」

何かを感じ取ったのか夜叉王丸は真夜を降ろした。

「えー！遊んでくれるんじゃないの？」

頬を膨らませる真夜。

「ちょっと話をするだけだ。直ぐに終わる」

「うん。分かった」

夜叉王丸の言葉を真夜は素直に受け入れた。

ジャンヌをちらりと見ると頷いてみせて真夜を抱き上げた。

「さあ真夜様。私どもと遊びましょう」

「うん！」

メイド達と真夜が出て行くと客室は空気が重くなった。

「・・・何か遭ったのか？」

椅子に座った時にビレトとザパンの瞳に重大な事を隠していると夜叉王丸は見抜いた。

「ああ。お前も知っていると思うが、天界に不穏な動きがある」

ビレトが重く口を開いた。

「まあな。ベルゼブルに秘密警察があるように俺も鵜という頼れる奴がいる」

夜叉王丸が呼ぶと鵜が音もなく現れた。

「鵜。どんな情報を掴んだ？」

「はつ。私の掴んだ情報に寄れば天界が戦を仕掛けて来ます」

しかも大戦を、と付け加える鶴。

バルト戦を機に大きな戦は特に無かったが各地で小競り合いが勃発していて双方ともに大戦の準備をしていた。

表向きは互いに悟られまいと行動していたが、裏では秘密警察などが天界に侵入して情報を流してキャッチしていた。

「鶴の言った通りかい？おっさん」

夜叉王丸の言葉にビレトとザパンは頷いた。

「ああ。良い部下を持ったな。飛天」

「まあな」

淡泊な答えを返したが声色で誇っているのが分かった。

「恐らく類を見ない大戦になる。恐らく七天使も全員が出る」

「……………ほおう。七天使がねえ」

夜叉王丸の瞳に一瞬だけ憎悪が浮き出たのをビレトとザパンは見逃さなかった。

「陛下はミカエルを倒したお前に期待している。頼むぞ。飛天」

ビレトとザパンの言葉に夜叉王丸は頷いた。

「安心しろ。飛天には俺らが付いている」

ダハーカの言葉にゼオン達は頷いた。

話を終えた後は真夜との約束通り遊んだ。

真夜が帰った後で夜叉王丸はジャンヌを自室へと呼んだ。

「……近い内に大きな戦が起きる」

夜叉王丸の言葉にジャンヌは少し怯えた表情を浮かべた。

「俺は、ここも戦場になるかもしれない。だから、お前をバルトに避難させようと思う」

「他のメイドもお前の所に避難させる。それから、美夜ちゃんと真夜も一緒に避難させたいんだがどうだ？」

「私は飛天様の意見に従います」

ジャンヌは声が震えるのを感じた。

夜叉王丸が自分を避難させるという事は、とても大きな戦という事だ。

そうなったら夜叉王丸も前線に立つ事で危険に曝される。

「バルトまでは俺が護衛する」

「・・・分かりました」

ジャンヌは一礼して夜叉王丸の部屋から退出した。

一人になった夜叉王丸は懐からセブンスターを取り出して口に銜えてジツポライターで火を点けた。

「・・・八つ裂きにしてやるよ。あの女を・・・・・・・・！！！」

憎悪を露わにした表情で夜叉王丸は紫煙を吐いた。

第三十一章：作戦会議と援軍

一週間が経ちジャンヌ達を護衛して夜叉王丸の軍団はバルトに旅立った。

山道を超えて三日目の夕方にバルトに入った。

「……戦が終わり次第に必ず迎えに来る」

心配そうに馬上の夜叉王丸を見上げるジャンヌに笑い掛ける夜叉王丸。

「死なないで下さいね」

ポロリと一筋の涙を流すジャンヌ。

「大丈夫だ。お前の為に死なない」

夜叉王丸はジャンヌの頭を一撫でして軍団を率いて魔界へと帰還した。

魔界へ帰ると直ぐに城に召喚されて軍議に参加させられた。

軍議に参加しているのは七つの大罪と王族、軍と騎士団の上層部であるバル、エギユン、リヴァイアサン、フォカロル、ビヒモフなどが参加している。

「先ず、何処で戦をするかだ」

ベルゼブルがテーブル上に置かれた魔界の地図を見た。

「・・・敵は恐らく北部から来ると思えます」

「確かに最短距離だが、境線にある要塞バルトを取られている。その上、屈強な軍が護る北から来るだろうか？」

陸軍大将のビヒモフが異議を唱えた。

「寧ろ防御が手薄である西や南から来るのでは？」

「それでは進軍に時間が掛る。それでは我らに反撃の時間を与える」

「四方から攻めるのでは？」

「それは戦力を分割して無駄な死を招くだけだ」

「逆に我らから進軍してはどうでしょうか？」

リヴァイアサンが進軍を申し立てた。

「しかし、手薄を狙われては元も子もない」

フォカロルが慎重な意見を述べた。

「飛天。お前はどうか？」

皆が論争する中で静寂を護っていた夜叉王丸にベルゼブルが聞いた。

「進軍だな」

「敵も総力戦で来る筈だ。それなら俺らも答えるのが戦場の礼儀つてもんだろ？」

気高い天使様へのと笑いながら喋る夜叉王丸。

「確かに。飛天の言う通りでもある」

「……………殿」

音もなく鵜が会議室に現われた。

数人の者は驚いたがりヴァイアサンやフォカロルなどは驚きもしなかった。

「どうした？何か情報でも手に入れたか？」

「はっ。どうやら敵は真正面から我らと戦うようです」

「下手な小細工は無しで挑む気か」

「恐らくは……………」

「分かった。引き続き情報収集に当たれ」

鵜は一礼すると姿を消した。

「……………これで腹は決まった」

ベルゼブルは椅子から立ち上がった。

「魔界軍は正面から天界の軍を迎え撃つ。良いな？」

威厳ある言葉で辺りを見ると皆は黙っていた。

その後はどの軍を配備するか戦陣から戦略、防御策などを話し合っ
て三時間くらいして小休憩を挟む事にした。

「夜叉王丸様。お客様が見えていますか？」

部屋を出て窓際で一服しているとメイドが話し掛けてきた。

「客？」

「はい。何でも是非ともお会い……………」

最後まで言う前にメイドを押し退けて二つの影が夜叉王丸の胸に飛
び込んで来た。

「お久し振りです！飛天様！！」

「久しいな。飛天！」

「緋夜！月黄泉！」

夜叉王丸は二人の登場に驚きの声を上げた。

「戦があると聞いたので援軍に駆け付けました」

「主の為に兵を率いて参ったぞ」

二人はスリスリと夜叉王丸の胸元に甘えてきた。

メイドの方を見ると何が何なのか解らずに混乱していた。

「ちょっと何時まで飛天様に抱き付いてるのよ。女狐」

緋夜が真紅の瞳で月黄泉を睨んだ。

「何を言う。そちらこそ妾の飛天から離れる。鳥娘が」

二人が睨み合っていると騒ぎを聞き付けたシャルロットとシルヴィアが駆け付けてきた。

「貴様ら！皇子様から手を放せ！！」

「ちょっと飛天様から放れなさいよ！？」

「貴方達！私の飛天に何をしてるのよ?!」

「飛天から放れなさい！！」

更にペイモンとベリフェゴールが加わって事態は急展開になり始めた。

六人の美女が睨み合って周りは険悪なムードになった。

互いに牽制し合う六人に夜叉王丸は嘆息した。

「月黄泉。緋夜。止める」

夜叉王丸の声を聞くと直ぐに睨み合うのを止めた。

「戦が起きるって誰に聞いたんだ？」

「妖怪王から聞きました」

緋夜が月黄泉を押し退けるように答えた。

「魍月が？」

「はい。父上も飛天様を助けるようにと言われましたので来ました」

「月黄泉は？」

「妾も妖怪王から聞いたのじゃが、新しく設立した隠密部隊からも聞いた」

「何だ？お前、作ったのか？」

夜叉王丸が意外そうな顔をした。

「うむ。主が進めてくれたからな」

するりと夜叉王丸に擦り寄る月黄泉。

十二単から放たれる侍従の香が鼻を刺激した。

「作って損はなかっただろ？」

「うむ。損どころか益があったわ」

主に会えるという益だと笑う月黄泉。

後ろでは緋夜達が憤怒の表情をしていた。

それに危機感を感じたのか優しく月黄泉を夜叉王丸は引き離して距離を置いた。

「まあ、援軍に来てくれたのは感謝する」

夜叉王丸は緋夜と月黄泉に頭を下げた。

「いいえ。飛天様の役に立てるなら……」

「主の為なら何でもすると言ったじゃろ？」

仲良く？夜叉王丸に甘える緋夜と月黄泉をシャルロットとシルヴィアにペイモンとベリフェゴールは親の仇とでも言わんばかりに睨んでいた。

休憩時間が終わると夜叉王丸はベルゼブル達に月黄泉と緋夜が援軍に来た事を伝えた。

「ほおう。援軍に駆け付けて来るとは大したものだ」

感嘆したように喋るベルゼブル。

「その二人の軍はお前に預ける」

他の者も異議なしと言った。

「これより天界との戦の準備をする。十分な準備をしておくように」
ベルゼブルの言葉で軍議は幕を閉じた。

緋夜と月黄泉の軍は双方を合わせて五千と二百。

妖獣大戦の傷痕が未だに消えない事もあり思うように集まらなかったらしいが、それでも少数の軍団である夜叉王丸にとっては有り難かった。

緋夜の率いた軍には将皇の姿もあり夜叉王丸との再会を喜び恩を返すと意気込んでいた。

緋夜と月黄泉の軍団を連れて屋敷に帰ると部下達に緋夜と月黄泉の事を説明した。

「以上で説明は終わる。取り合えず何時でも戦えるように準備はしておけ」

軍団長の夜叉王丸の言葉に兵士たちは頷いて兵舎へ戻った。

夜叉王丸も和風の自室に戻り押入れの中に布で巻いて仕舞っていた朧月や朱鷹、村正などを取り出した。

「・・・・・・・・」

朧月を無造作に抜くと青白い光が妖しく輝いて夜叉王丸の瞳に映った。

第三十二章：天魔大戦

軍議を終えてから半年後に天界から宣戦布告の手紙が送られてきて魔界は直ぐに兵を上げた。

「皆の者！今日こそ我らを地獄に追い込んだ憎き天界を撃ち滅ぼすぞ！！」

ベルゼブルは私兵である蠅騎士団の前で演説した。

「おお！！」

演説が終わると騎士団は剣を抜き高々と掲げた。

「さあ！行くぞ！！！」

ベルゼブルが先頭を切ってユニコーンに乗って走ると護るようにビレット、ザパンが並んで後ろに蠅騎士団が続いた。

サタン、ルシユファー、ベリフェゴール、レヴィアタン、マモン、アスモデウスも続く様に各々の軍団を率いた。

夜叉王丸の軍団も後に続いて進軍を始めた。

飛竜が空を駆け巡り鎧に身を包んだ兵士たちが地面を隙間なく覆い尽くした。

天界と戦う場所は双方の境界線で何も無い平地だった。

境界線まで行くと天使軍が先に到着していてミカエル率いる七天使使達が兵を後方に下がらせて白銀の鎧に身を包んで悪魔軍を見つめていた。

ベルゼブル率いる七つの大罪と夜叉王丸も兵を後方に下がらせて進み出てミカエル達と眼と鼻まで近づいた。

「……久し振りですね。兄上」

ミカエルが漆黒の鎧に身を包んだルシュファアに碧色の瞳を向けて口を開いた。

「久し振りだな。ミカエル」

アイスブルーの瞳を冷たい氷のように鋭くさせてミカエルを睨んだ。神の右の席に座る事を許された天使長ルシュフェール。

今は双子の弟であるミカエルが受け継いで天使長を務めている。

双子の天使は無言で睨み合ったままだ。

夜叉王丸は七天使の中で唯一白銀の鎧ではなく漆黒の鎧に身を包んだ白銀の女性を睨んだ。

女性は夜叉王丸の視線に気づくと煌々とした深紅の眼差しで見つめてきた。

「……今日こそ、貴様の首を取ってやる」

朱鷹を女性の眼筋で止めてドスの籠った声で喋る夜叉王丸。

「嬉しいわ。その眼。少しも変わってないわね」

まるで名刀みたいに鋭い瞳だと言って恍惚とした眼差しで夜叉王丸を見つめる女性は死天使長、サリエル。

「ふん。貴様こそ相変わらず胸糞悪い笑みを浮かべるな」

吐き捨てるように言う夜叉王丸。

二人の会話を七つの大罪も七天使も黙って聞いていた。

「……必ず貴様の首は頂く。そっちの“偽善者”の首と一緒に、な」

サリエルの隣に控えめに立つ女性も睨む夜叉王丸。

「……飛天」

癖のかかったブラウンの髪を靡かせながら女性はサリエルとは対照的に悲しそうに見つめてきた。

「その憐れむ瞳を抉り出して魔獣の餌にしてやるよ。ラファエル」

口端で笑う夜叉王丸に女性、ラファエルは悲しげに視線を逸らした。

暫く互いに睨み合っていたが双方ともに背を向けて軍に戻ろうとした時にミカエルが夜叉王丸を呼び止めた。

「・・・私の恋人を救ってくれたこと感謝する」

一瞬なにを言っているのかと首を傾げたが、直ぐにバルト戦で助けた天使の娘だと分かった。

「別に戦いで民間人が死ぬのは嫌いだからな」

背中を向けたまま突き放した口調で言うと夜叉王丸はベルゼブル達の後を追った。

どちらからともなく開戦の合図であるラッパを鳴らした。

ここに例を見ない大戦、天魔大戦が幕を開けた。

第三十三章：激突する戦士達

「天使共を皆殺しにしろ！！」

ビヒモス大将が先頭を切つて両手に斧を持って天使軍の歩兵を蹴散らし後に部下達が槍や剣を手に斬りかかった。

対する天使軍も特攻隊長であるメタロンが重武装兵を率いて迎え撃つた。

互いに刃を交わして斬つたり斬られたりして大量の血が大地を赤く染めた。

空も飛竜と天馬がぶつかり合い雷鳴や炎が飛び散り、まさに天が割れるかの如く巨大な音が天に響いた。

頭上に降り注ぐ矢の雨、血塗れになりながら剣を振り獅子奮迅の戦いをする兵士に地面に倒れ力なく横たわる兵士。

血で血を洗う修羅場であった。

その中でも夜叉王丸の軍団は一際に目立っていた。

砲弾を撃ち矢を放ちランスで敵陣を貫き剣などで相手を斬り月黄泉の軍団と緋夜の軍団が魔術などで相手を焼き殺し氷漬けにした。

「怖がるな！怯まずに先を進め！！」

朱鷹を片手に持ち夜叉王丸は迫り来る天馬部隊を蹴散らしながら下

で戦っている部下達に怒鳴った。

部下達に聞こえたのか更に天使軍達を押しした。

飛竜姿のダハーカに乗った夜叉王丸は朱鷹を巧みに操り天馬の翼や兵士の腕を狙った。

朱鷹は十文字槍で、この槍は斬れば薙刀、突けば槍、払えば鎌と万能槍と知られ巧みに攻撃方法を変えて迫り来る敵を薙ぎ倒した。

他の飛竜使いも天馬部隊の兵士を倒したり急降下して爆撃をしたり活躍を見せていた。

戦いは何時間も過ぎて多くの天使悪魔が命を奪い奪われた。

夜になり一時休戦する事にした。

「今の内に武器の手入れや疲れを癒して置け。ただし油断するなよ」

夜叉王丸は地面に腰を下ろす部下達に労いの言葉を掛けながら釘を刺した。

休戦とは言え、夜襲があるかも知れないからだ。

部下達に命令を言うと夜叉王丸も武器の手入れを始めた。

朱鷹は大量の血を吸い槍先が真っ赤になっていたが、刃こぼれ一つなかった。

ミカエルとの戦いで壊れてしまった鎧は新たに新調した鎧で前の鎧

に比べて強度から身軽さまで全てが上だ。

背中に背負っている朧月は一度も抜いていないが、いつ抜くか分からない事から手入れは怠らなかつた。

武器の手入れをしながら周りを見た。

血を流しながら必死に痛みを耐える者、僅かな休憩の内に睡眠を取る者、酒を飲み恐怖を押し殺そうとする者、大勢の者が入り混じっていた。

軍医であるソフィーは後方で担ぎ込まれてきた兵士の治療に当たっていた。

しかし、大勢のけが人の中には既に手遅れの者もいる。

そんな者たちは戦場において悪魔、天使を問わずに暗黙の了解でステレットと呼ばれる慈悲の剣で止めを刺す。

ソフィーにもステレットは渡されている。

どうしても助けられずにいる兵士を一思いに楽にさせる為だ。

医者として邪道ではあるが、少しでも苦しみから解放するためには仕方のない事だと夜叉王丸は考えている。

夜叉王丸も過去に何度か瀕死の者を手に掛けた事がある。

止めを刺すと苦しみから解放されて笑いながら死んでいった。

空しい気持ちになるが、そんな事を気にしていたら戦場では生き残れない。

戦争を経験した事のない者は人殺しや冷酷だと言うが戦争という殺し合いに参加した事のない者に戦争を批判する資格はない。

それなのに、世間は戦争で戦う兵士を批判する。

批判されても文句が言えない戦争もあるが、批判する権利がない者に批判されるのは我慢できない。

武器の手入れを忘れて感傷に浸っていると一人の兵士が近づいてきた。

「夜叉王丸様。皇帝陛下がお呼びです」

「分かった」

朱鷹を杖にして立ち上がると兵士に案内されてベルゼブルの所まで来た。

「その様子だと大丈夫のようだな」

椅子に座りながらベルゼブルは夜叉王丸に笑い掛けた。

皇帝であるベルゼブルは後方で戦の指揮を取る事に徹底している。

周りは近衛兵がしっかりと護っている。

夜叉王丸の護衛であるシルヴィアとシャルロットには再びソフィーたち軍医の護衛を任せている。

かなり反対されたが、“命令”と称して有無を言わせなかった。

「何か用か？」

夜叉王丸は淡々とした口調で聞いた。

「天界から使者が来て余興を一つどうかと言われた」

「余興？」

「互いに一人ずつ武將を出して戦わせて腕を競い合わせるらしい。そしてお前を志望している」

「まあ、建前はそんな所だが本当はお前を殺して士気を下げるのが目的だ」

「ふん。随分と遠回りな手を使うんだな」

「大勢の兵士の前でお前を殺す自信があるんだろう」

「その余興、出させてもらおう」

夜叉王丸の言葉を聞いてベルゼブルはニヤリと笑った。

「お前ならそう答えると分かっていた」

直ぐに了解したと伝えて来ると言っただけでベルゼブルは伝令を走らせた。

「相手は空中戦を望んでいる」

「俺に空中戦を挑むとは自信満々だな」

夜叉王丸はゲリラ戦や野戦を得意としているが空中戦でもピカイチの強さを誇っている。

自分の陣地に戻り休んでいたダハーカを起こし余興の事を伝えた。

「……ほおう。俺らに空中戦を挑むとは、楽しめそうだ」

飛竜姿のダハーカは口の周りの血で染めながら剥き出しの牙を見せて笑った。

牙の間には肉の欠片などが挟まって戦慄を覚えた。

間もなくして伝令が戻って来て夜叉王丸を案内した。

案内された場所に行くと黄金の天馬に乗った真紅の鎧に身を包み金髪を三つ編みにした女性がいた。

歳はジャンヌより少し年上で朱色の瞳が真っ直ぐに夜叉王丸を見つめていていた。

「……飛天夜叉王丸男爵か？」

流れるような綺麗で凜とした声で夜叉王丸に聞いてきた。

「以下にも飛天夜叉王丸だ。貴殿は？」

「私は死天使第七十部隊、隊長レオノチス・ヴィクトリア・ヴァレンティン子爵だ」

「ほおう。あの“紅の墮天使”と呼ばれているヴァレンティン子爵か」

夜叉王丸は眼を細めた。

死天使第七十部隊、隊長レオノチス・ヴィクトリア・ヴァレンティン。

またの名を“紅の墮天使”と呼ばれている。

死天使部隊の中で唯一の女性隊長を務め愛用の大鎌で何人もの悪魔を斬り殺してきた天使である。

そのヴァレンティンが夜叉王丸の相手をするのだ。

『……中々の余興だな』

初めは面倒な余興だと思っていたが少しは楽しめそうだと思い直した。

戦に出て強者に会って血が沸き立ち勝負心が芽生えてくる。

昂る気持ちでいる夜叉王丸にヴァレンティンは右手に持った大鎌を向けた。

「我が長であるミカエル様を倒した罪により貴様を倒す」

「くっ。随分と勇ましい女騎士様だな」

口端で挑発的に笑う夜叉王丸にヴァレンタインは額に青筋を立てた。

「・・・さあ？始めようか」

夜叉王丸はダハーカに飛び乗ると飛躍してヴァレンタインも追うようにして天馬に乗って飛び上った。

ここに双方の歴史に残る名勝負が生まれる事になった。

第三十四章：隻眼の天使殺しVS紅の墮天使

地上で大勢の双方の兵たちが見守る中で夜叉王丸とヴァレンタインの戦いは始まるうとしていた。

夜叉王丸は飛竜姿のダハーカに乗り朱鷹を構え天馬に乗ったヴァレンタインは大鎌を肩に掛けていた。

天魔両兵士が開戦のラツパを鳴らした。

「・・・・・・・・」

「死ね！！」

音を合図に天馬を片手で操りながらヴァレンタインが夜叉王丸の左肩を目掛けて鎌を振り下ろしてきた。

夜叉王丸は冷静に太刀筋を呼んで朱鷹で受け止めて横に受け流すと素早くヴァレンタインに突きを入れた。

「はっ！！」

ヴァレンタインは夜叉王丸の突きを交わし再び振り下ろそうとしたが、朱鷹の払いを諸に右脇腹に食らった。

「・・・・・・・・くっ」

僅かに顔を歪めて天馬から振り下ろされそうになったが、立ち直り夜叉王丸と距離を置いた。

『噂通りの強さだな。伊達に女で隊長を務めている訳ではないようだ』

ヴァレンタインの攻撃に感嘆しながら夜叉王丸は左手でダハーカの手綱を掴んだ。

「今度は俺らから仕掛けるぞ」

「了解」

夜叉王丸はダハーカに乗ったまま荒い息をしていたヴァレンタインに突っ込んだ。

「むんっ」

朱鷹を左斜めから振り下ろすとヴァレンタインは苦痛に顔を歪めながらも大鎌で朱鷹の攻撃を受け止めた。

どうやら夜叉王丸が与えた一撃が大きかったようだ。

それでも攻撃の隙間を見ては反撃するヴァレンタイン。

兵士たちは夜叉王丸とヴァレンタインの空中戦に息を飲んだ。

飛竜に乗る夜叉王丸と天馬を操るヴァレンタイン。

通常は天馬の方が飛竜に比べて劣るのだがヴァレンタインは天馬を巧みに操り夜叉王丸と互角の勝負を見せていた。

戦いを始めてから一時間が過ぎた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ヴァレンタインは荒い息をしながら大鎌を構えた。

対して夜叉王丸は息切れ一つせずにはいた。

「その武器、お前専用で作られた武器じゃないだろ？」

「・・・何故、分かる？」

「見てて動きがギコチない」

夜叉王丸の言葉が凶星だったのかヴァレンタインは何も言えずに押し黙った。

「これからも使い続けると身体が持たないぞ？」

「だ、黙れ！！」

ヴァレンタインは何かを振り切るかのように大声を発して天馬を操り夜叉王丸の頭上に着くと大鎌を振り下ろした。

しかし、それよりも速く夜叉王丸がヴァレンタインの鎌を振り払って後方に飛ばし天馬の翼を斬り落とした。

天馬は悲鳴を上げてヴァレンタイン諸とも地上に落下した。

魔界軍は歓喜の声を上げて天界の軍は悔しげに歯ぎしりした。

その日の戦いは終わった。

翌日の早朝に戦いは再び幕を開けた。

「突っ込め！奴らを皆殺しにしろ！！」

背中の朧月を抜いて夜叉王丸は天馬を斬りながら下の兵士に指示をとばした。

ヴァレンタインとの戦いで朱鷹は刃こぼれ一つしなかったが、今日は念のため朧月を使用している。

この太刀は抜刀に適した打ち刀とは違い反りが強くほぼ垂直になっている。

通常の数倍はある長さの刀を夜叉王丸は片手で使い天使軍を軽く振りで五人は片付けていた。

圧倒的な戦いをしていると背後から名を呼ばれた。

「……昨日は、油断したが今日は負けない」

天馬には乗らずに翼を出して飛んでいるヴァレンタインが立っていた。

左足は木の棒と布で固定されていた所を見ると昨日の戦いで天馬と一緒に地面に叩きつけられた時に足を折ったのだろう。

「……昨日で勝負は着いただろ？」

眼を細めながら夜叉王丸はヴァレンタインを見た。

隈の辺りが赤くなっていて髪も乱れていた。

恐らく仲間の前で敗北したのが悔しくて涙でも流したのだろう。

「昨日は油断しただけだ。だが、今度は負けない」

鎌を構えるヴァレンタイン。

しかし、足が痛むのか苦痛に顔を歪めていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夜叉王丸は断つても戦うだろうと分かったのでダハーカから降りて翼を出した。

「ダハーカ。俺はヴァレンタインを相手にする。お前は、他の奴らを叩け」

ダハーカは頷くと天使軍に襲い掛かって行った。

「なぜ飛竜から降りた？」

「お前が天馬に乗っていないのに俺だけが乗る訳にはいかない。騎士としての貴殿に対する礼儀だと思ってくれ」

馬鹿にした口調でもない様子を見てヴァレンタインは夜叉王丸に一礼した。

ヴァレンタインなりの感謝の表わし方なのだろう。

「ここでは、外野が煩い。どこか離れた場所ではないか？」

夜叉王丸の提案にヴァレンタインは無言で頷いて、その場から離れた。

第三十五章：第2ラウンド

戦場から離れた夜叉王丸とヴァレンタインは少し離れた場所に来ていた。

「ここなら邪魔者はいない」

夜叉王丸は翼を出したまま臙月を右肩に掛けた。

「・・・・・・・・・・」

ヴァレンタインは鎌を両手で持って右脇に構えた。

「・・・・・・・・ツ」

左足が痛いのか唇を噛んだ。

「・・・・・・・・行くぞ」

夜叉王丸は臙月を正眼に構えて一気に間合いを詰めた。

「はっ！！」

臙月を上段から振り下ろした。

ヴァレンタインは身体を斜めに動かし避けると鎌の石突きで夜叉王丸を攻撃してきた。

石突きを交わすと第二撃として右脇に構えた鎌が襲い掛かって来た。

「ちっ」

頭を低くして避けると間合いを取った。

「なるほど。昨日とはまったく違うな」

「ふっ。私を甘く見るな」

得意気に笑うヴァレンタイン。

『プレッシャーに負けたな』

昨日は全軍の前で戦った事からプレッシャーに負けたのだろう。

「……俺も少し本気で行くか」

夜叉王丸は翼を仕舞い背中の鞘に朧月を収めると左脇に構えた。

日本剣術独自の武術である居合の構えだ。

「……さあ、来な」

右手の親指を朧月の柄に掛けて不敵に笑う夜叉王丸にヴァレンタインは何かを感じたのか気を引き締めた。

「……」

「……」

互いに睨み合っていたがヴァレンタインが先に動いた。

「てや!!」

奇声を上げながら鎌を下段から斬り上げた。

しかし、それよりも速く夜叉王丸が朧月を抜いてヴァレンタインの首に襲い掛かった。

「甘い!!」

だが、ヴァレンタインは鎌を捨て鎧から赤い布を取り出して目の前に出してた。

「何っ!!」

朧月が空を切って手応えがない事に夜叉王丸は驚きの声を上げた。

「貰った!!」

右から声が出て来て向きを変えるとヴァレンタインが両刃の長剣、ロングソードで斬りかかって来た。

この剣は騎兵が使う為に作られた物で通常の剣よりも長い造りになっている。

しかし、重量という訳でもなく片手でも操れる事でサーベルと同じ位に重宝されている。

夜叉王丸は咄嗟の事で反応が遅れて完全に交わし切れず顔に付けて

いた仮面に傷が衝いた。

「まだまだ!!」

ヴァレンタインは間を置かずに突きを入れてきた。

それを何とか交わすと夜叉王丸は間合いを取った。

『・・・こりゃ思っていた以上に強敵だな』

自分の見方に少し呆れながら夜叉王丸は再び居合の構えをした。

ヴァレンタインはロングソードを右手で突きの構えをして赤い布を左手で持った。

その姿は牛を迎え撃つ闘牛士のような。

「・・・・・・・・」

夜叉王丸はヴァレンタインの間合いを詰めると上段から斬り降ろした。

ヴァレンタインは布で受け流して再び突きをしてきた。

今度は交わし切れずに左胸を抉った。

「やった!!」

歓喜の声を上げたが夜叉王丸の身体は黒い羽根へと変わった。

「な、につ……！！！」

目の前に黒い羽根が広がるのをヴァレンタインは茫然とした。

「……………ハッ」

上から殺気を感じて見上げると夜叉王丸が翼を出して突きをしてみた。

「くっ」

避けようとしたが左足が痛んで動けずに右肩を突かれ横に挟られた

「……………ぐっ」

激痛が肩を襲い思わず呻き声を上げた。

「……………黒羽静夜暗殺剣、旋風の舞」

剣を落として肩を抑えながらも地面に膝を着かないヴァレンタイン。

「その闘志は見事だ。だが、その腕では戦えないだろ？」

夜叉王丸は故意に剣を握る右の肩を狙ったのだ。

「ま、まだまだ！私にはまだ切り札がある！！！」

ヴァレンタインは瞳に魔術を込めた。

「デス・アイ！！！」

瞳から強力な魔術が放たれた。

このデス・アイとは死天使の隊長だけが操れる技で瞳に魔術を込めて相手を見て呪殺する技だ。

しかし、夜叉王丸はデス・アイを受けても倒れなかった。

「な、何で………」

ヴァレンティンは茫然としたが、敗北を認めたのが大人しくなった。

「殺せ。貴様に殺されるなら武将として本望だ」

諦めの声でヴァレンティンは瞳を閉じた。

しかし、夜叉王丸は朧月を鞘に収め背中に背負い背を向けた。

「ま、待て！なぜ殺さない?!」

背後でヴァレンティンが声を荒げて聞いてきた。

「あんたは殺すには惜しい。だから、殺さない」

背を向けたまま答えた。

「殺せ！敵に情けを掛けて行き残りたくない!!」

ヴァレンティンの声は涙声に変わっていた。

「……だったら、自分で自害しろ」

それだけ言うと夜叉王丸は背を向けて歩き出した。

「待て！殺せ！！私を殺せ………きゃあ！！」

背後を振り返るとヴァンタインの身体に無数の矢が突き刺さり夜叉王丸にも襲い掛かって来た。

「ちっ！」

朧月を抜いて矢を切り捨てるとヴァンタインを庇うように立った。

「何者だ？姿を見せろ」

ドスのきいた声で矢の放たれた場所に言うと周りを囲むようにして兵士たちが出てきた。

「初めまして。飛天夜叉王丸殿」

兵士たちの中から上官らしき男が出てきた。

「お前、味方であるヴァンタインを何で殺そうとした」

「我が軍は彼女のような恥さらしを生かしておくほど甘くありません」

男は人差し指で頬を撫でた。

「昨日の余興を言っているのか？」

「はい。この女は推薦されながら負けた。まさしく天使の恥です」
ヴァレンタインは何も言えずに俯いた。

「おまけに足を怪我して汚名返上とばかり今日も挑んだのに貴方様に二度も敗北するという情けなさ」

蔑む言葉を出すと周りを囲む兵士たちも笑いだした。

「……………」

夜叉王丸は何も言えずに黙るヴァレンタインをちらりと見た。

恐らく昨日も言われたのだろう。

「女でありながら死天使の実働部隊の隊長を務めるのも甚だしいのに、更に負けるなど生かしておく必要はありません」

「貴方様にも死んで頂きます」

兵士たちが弓を引き絞った。

「…………お前ら屑に殺されるほど俺は雑魚じゃない」

夜叉王丸は右の眼帯を外して真紅の瞳を露わにした。

「貴様らは、この場で八つ裂きにしてやる」

朧月を右上段に構えた。

「たった一人で一個師団を相手にする積りですか？」

馬鹿にした口調で夜叉王丸を見た。

「戯言はそれだけか？」

夜叉王丸は朧月に魔力を込め始めた。

「幾多の屍を作り、その身を血に濡らし続けた蛇神、夜刀ノ神よ。その力で目の前の敵を一掃したまえ……蒼月刃！！」

朧月から蒼い刃が放たれると同時に四方から矢が放たれた。

放たれた矢は一瞬で消滅して男と周りを巻き込むと爆発を起こし周りにいた兵士たちも消滅させた。

「ふん。雑魚が」

唾を地面に吐いて夜叉王丸は朧月を持ったまま唾を広げると何処かへ飛んで行き残されたヴァレンタインは目の前の現場を呆然としていた。

天魔大戦は三日間も及び双方ともに限界まで発達して双方の痛み分けという事で決着が着いた。

この三日間の激戦で双方の兵士が死に絶えた。

四日目の朝に七つの大罪と七天使は双方の意志で和睦する事になった。

和睦の条件として

- 1、互いの領土を侵略または占領しない。
- 2、これからは互いの存在を認める事。
- 3、どちらかが第三世界の種族、国家に攻撃された場合は互いに助ける事。

の三カ条だ。

戦が終わると互いに捕虜などを送り返したりして七日後に領土へ戻って行った。

ただし、一人だけ天界へ帰還する事が許されない人物がいた。

死天使第七十部隊、隊長レオノチス・ヴィクトリア・ヴァレンタインだ。

第三十五章：第2ラウンド（後書き）

えー、お久し振りです。ドラキュラです。かなり時間が掛りましたが悪魔な男爵の一部が完結です。

これからも二部、三部と続きますが、次の更新は何時になるかわかりません。

今度は現代物を書きたいと思えますので宜しくお願いします。

終章：伝説の始まり

「……もう一度、言え」

夜叉王丸は怒気を抑えた声で跪く兵士に尋ねた。

鎧からジャケット姿になったが、戦が終わって間もない事から殺伐とした雰囲気を出していた。

「……は、はい。ヴァ、ヴァレンタイン子爵殿は、せ、戦死したと……」

兵士は夜叉王丸から放たれる氣に怯え震える声で答えた。

「ほおう。お前らの軍団では立派に戦った武將を殺すだけでなく一人だけ置いて行くような鬼畜なのか？天使が聞いて呆れる」

「そ、それは……」

「何だ？文句があるならヴァレンタインを連れて行け」

ギロリと兵士を睨み下ろす夜叉王丸。

「あ、いえ……その……」

兵士は夜叉王丸の威圧的な態度に怯えた。

しかし、直ぐに夜叉王丸は視線を逸らした。

「・・・行け」

地を這うような声を聞いて兵士は礼もせず一目散に部屋を出て行った。

夜叉王丸がいる場所は天界と魔界の境界線に立つバルト。

ベルゼブル達は先に魔界に帰還したが、夜叉王丸はジャンヌ達を迎えに行くために立ち寄った。

そして、夜叉王丸との戦いで傷ついたヴァレンタインの治療の為だ。

夜叉王丸との戦いを終えた後すぐにヴァレンタインは捕虜となったが人道的な扱いを受けて捕虜交換を待っていたが、それは兵士の言った言葉で適わなくなった。

『・・・くそ。何て奴らだ』

ギリツと唇を噛みながら夜叉王丸は怒りを抑えた。

「・・・貴方が怒る必要はないわ」

夜叉王丸に静かに声をかけたのはベッドに上半身を起こしていた他ならぬヴァレンタインだった。

左足には包帯と固定具が巻かれていた。

「それに、戦死って扱いも悪くないわ」

どこか悲しげに笑いながら呟いた。

「捕虜になったのなら家の恥に、婚約者の家の恥にもなるけど、戦死なら恥にはならないわ」

「……婚約者がいたのか」

「ええ。ユニエールっていう侯爵家の長男。とても優しくして紳士な方よ。本当なら子爵の私とは歴然とした差があるのに婚約してくれたの」

嬉しそうに話していたが、でも、と付け加えるヴァレンタイン。

「私が捕虜になったと聞けば、あの人の恥になる。だから、戦死で良かったの」

夜叉王丸は何も言えなかった。

勝者が敗者に掛ける言葉など慰めであり嫌味でしかない。

「……私、どうなるのかしら」

天井を見上げて誰に言う訳でもなく呟いた。

『……前例がない以上は分からんな』

過去の一度も、こんな状態にならなかった事で夜叉王丸は考えた。

捕虜なら、しかも貴族なら和睦などの良い条件を付けられたが戦死

扱いとなると何も出来ない。

戦略価値もないなら殺すのが常套手段だが、夜叉王丸はヴァレンタインを殺す気にはなれなかった。

価値も無く家族にも見放されたヴァレンタイン。

それは、過去の自分に似ていた。

同情は、自己満足に過ぎない。

しかし、夜叉王丸は同情などよりもヴァレンタインが哀れでならなかった。

『……くそつ。どうすれば良いんだ』

考えに苦しんでいるとドアを叩く音がした。

「誰だ？」

「ダハーカだ。美夜ちゃんが呼んでる」

ドア越しに掛けられた声に返事をするヴァレンタインをちらりと見て部屋を出た。

「美夜ちゃん。どうかした？」

案内された場所に行くと一人で美夜がソファに座っていた。

「あの、ヴァレンタインさんの事なんだけど……」

どこか鎮痛そうな表情をする美夜を見て夜叉王丸は理解した。

「彼女は戦死者として天界に帰る事を許されなかったよ」

美夜は悲しげに沈黙した。

ダハーカもどこか同情的な表情をした。

「……その彼女、どうなるの？」

「前例がないから俺にも分からないんだ」

「……ねえ。彼女、魔界に連れて来れない？」

美夜の言葉に夜叉王丸とダハーカは目を見張った。

「どこにも行く宛がないなら面倒を見れないかな？客人として迎えれば」

「……なるほど。確かに、その手があったな」

夜叉王丸は頷いた。

かなり危険ではあるが、今の状態で放り出す訳にもいかない。

「分かった。ヴァレンタインに話してみるよ」

美夜に礼を言って夜叉王丸はヴァレンタインの部屋に戻って客人の事を話した。

「……私を客人として？」

「ああ。王妃から頼まれた」

ヴァレンタインは夜叉王丸の言葉が理解できない顔をしていた。

「俺としても、あんたみたいな武將は丁重に扱いたいと思っている」

「……………」

「無理にとは言わない。だけど、もし良ければ魔界に来てくれ。俺も出来るだけ、力になる」

励ます口調で言うと夜叉王丸はヴァレンタインの部屋から出た。

部屋を出るとすすり泣く小さな嗚咽が聞こえてきたのを敢えて聞かないようにした。

ヴァレンタインの部屋を出た夜叉王丸はジャンヌの所へ向かった。

ジャンヌの所へ行くと真夜、ソフィー、シャルロット、シルヴィア、月黄泉、緋夜と一緒に談笑していた。

「あ、ヒーてん」

夜叉王丸の姿を見ると真つ先に真夜が飛び込んで来た。

「おお、真夜。久し振りだな」

ポンポンと真夜の頭を撫でる夜叉王丸。

殺伐とした府に気を一掃させて大らかな雰囲気を出した。

「お帰りなさいませ。飛天様」

水色のワンピースを着たジャンヌが優雅に一礼した。

「ああ。ただいま」

ジャンヌに笑みを返した。

「皇子様。ヴァレンタインは？」

シルヴィアが真剣な顔つきで聞いてきた。

一人の武将としてヴァレンタインの事を気にしていたのだろう。

「天界では戦死者として扱われて帰還できないから魔界で引き取ることにした」

胸元に抱く真夜の髪を撫でながら言った。

「引き取り相手は？」

シャルロットが気になった様子で聞いてきた。

「んー、たぶん俺かな？」

「俺が倒したし他の奴らだと信用が怪しい」

「しかし、敵であった者を皇子様の屋敷に住まわすなど」

シルヴィアがうろたえた口調で喋った。

「まあな。だけど、あいつを放っておく訳にもいかん」

「それに、あいつは寝込みを襲うような性格じゃない」

どこか断言した口調で言う夜叉王丸にシルヴィアは口を閉じた。

「流石は妾の惚れた殿方。敵にも情けを掛けるとは天晴れじゃ」

月黄泉が近寄って夜叉王丸の頬に触れた。

「つーきーよみー。あっぱれってなあに？」

真夜が夜叉王丸にしがみ付いたまま尋ねた。

「素晴らしいという意味よ。真夜ちゃん」

月黄泉の変わりに緋夜が答えた。

「ひーてんは、あっぱれー」

真夜が手を叩いて笑った。

その光景を見て皆は顔を綻ばせた。

ヴァレンタインの身柄は夜叉王丸が引き取る事をベルゼブルに報告

すると予想していたのかすんなりと了承された。

三か月後に夜叉王丸は真夜達を連れて魔界へと帰還した。

天魔史上に、その名を残す飛天夜叉王丸。

彼の傍には常に大勢の妻たちが存在していた。

そして大勢の妻たちの中には、ジャンヌ、シルヴィア、ソフィー、シャルロット、月黄泉、緋夜、ヴァレンティン、真夜の名前が名簿に載っていた。

悪魔な男爵第一部、完

番外編：好きな相手だから……

虫も眠る時間と言われ魑魅魍魎が跋扈し百鬼夜行が暗躍する午前2時。

その時間に一对のベッドの中で男と女が交じ合っていた。

男は女を下から突き上げ女は貫かれた腰を淫らに動かし喘いだ。

両人の身体からは汗が流れ出ていた。

女の褐色した肌から流れ出た汗はスラリとした身体のラインを伝って下へと流れ男の身体にも触れた。

男の身体は全身に切り傷や銃痕があり浅黒い肌のせいで夜なのに余計に見えた。

女が快楽に喜び喘ぐ中で男の表情は沈痛だった。

何かに罪悪感を感じている様子だった。

やがて女は限界が近づいて来たのか腰を更に淫らにリズムカルに動かし、絶頂を迎えた。

ビクッ、ビクッ、ビクッ

女はバタリと男の見た目だけ出なく本当に鍛えられた胸に倒れ込んだ。

男は絶頂を迎えずにいたが何も言わずに女を優しく抱き締めた。

行為が終わると男は上半身が裸で黒のジーンズを穿いてベッドの端に腰を下ろし煙草を蒸していた。

銘柄はセブンスターだ。

「……………どうしたの？」

女が紺色のネグリージエを着て男に話し掛けた。

湯浴みをしてきたのか腰まで伸ばした黒髪が湿っていた。

「……………」

男は肺にセブンスターの煙を入れ少し残った煙を吐き出した。

女は返事をしない男に苦笑した。

「罪悪感を感じてるの？」

予想が当たっていたのか男は苛立ちを隠さずにセブンスターをベッドの脇に置かれて灰皿に押し付けた。

「凶星のようね」

女は笑いながら男に長細いグラスを渡した。

中には氷と透明な液体に薄くスライスしたライムが入っていた。

「ジン・トニックよ」

ジンをベースにしたカクテルで辛さと苦みがある。

食前酒と知られているが運動後のドリンクとしても知られている。

運動後には良いでしょ？と笑いながら女は真つ赤なマニキュアで塗った指でライムを握り数滴を垂らしたジン・トニックを男の右頬に当てた。

男は黙って受け取ると一気に半分まで飲んだ。

半分になったジン・トニックを乱暴にテーブルの上に置いた。

「湯に浸かって来たら？」

女の提案に男は間をおいて答えた。

「……そうする」

男は立ち上がって浴室に向かった。

女は男の傷だらけの背中を見つめた。

背中には女が付けた引っ掻き傷が小さくあった。

「……私を抱きながら、貴方の心は別な女に向いている」

微かに女の心に嫉妬の炎が浮かんだ。

しかし、直ぐに消えた。

自分が望んだことだ。

あの男は自分に見向きもしない。

これからも同じだと思っている。

「……厄介なものね。恋なんて……」

女はテーブルの引き出しからパーラメントを取り出して赤い紅を塗った唇に銜えてカルティエのライターで火を点けた。

ふうー、と煙を吐いて女は自嘲気味に笑った。

「こんな献身的な女は他に居ないわよね？」

好きな相手は自分ではなく他の女を愛している。

しかし、抱けない。

溜まる欲望の捌け口となる自分。

断れるのに断らない。

それは男を好きであり、欲望の捌け口でも自分を必要としてくれるためだ。

悲しいと思う時は幾度となくあったが、意地もプライドも高い自分には去る男を引き止められなかった。

プライドなんてものは、本当に譲れない所で示すもので常に示す必要はない。

以前に男が言った言葉を思い出した。

「……貴方の言う事は、どうして正しいのかしらね？……
飛天」

女は愛する男の名前を言いながらパラメントを吸った。

パラメントの味は少し塩の味が混ざっていた。

番外編：決闘と言つ名の処刑（前書き）

夜叉王丸が残酷で、悪魔になっています。

残酷な描写があるので、見る人は自己責任でお願いします。

番外編：決闘と言う名の処刑

薄暗く、上から水が滴り落ちる中で一人の青年が、吠え立てていた。

「出せー！！俺は、第一皇子だぞ！？こんな所に閉じ込めて良いと思っっているのか？！」

既に声は枯れ切っているが、青年は吠え続けた。

彼の名はサタナエル。

初代魔界皇帝サタンの長男で第一皇子。

サタンに似た容姿ではあるが、性格は愚劣の一言に尽きると周りからは言われている。

政治では自らの欲ばかり考えて、行動し権力を行使する。

戦でも同じ事で、兵たちを前線へと送るが、自分は決して前線に行こうとはせずに後方で妾などを囲い安全な場所にいる。

更に負け戦となると、直ぐに側近たちを連れて敵前逃亡という武将として有るまじき行為をした。

これには軍人だけでなく貴族達からも批難が来た。

父親であるサタンは、早くから息子の性格を熟知していたのか

『我が愚息。魔界史に残る愚将にして、恥曝しである』

と日記に書き記していた。

この歴史に名を残す第一皇子とは対比したように、第二皇子、飛天夜叉王丸は好印象に書かれている。

『この男、我と友人であるベルゼブルとの養子で血の繋がりはないが、実の息子以上に愛して止まない』

と書かれており、民などからも好意的な印象を持たれていた。

戦では常に最前線へと身を置き、決して部下を見殺しにはせず捕虜にも人道的な対応をするなど人格者としても各国から称賛されている。

そんな夜叉王丸をサタナエルが嫉妬と憎悪の眼差しで見ていたのは、言うまでも無く書くまでも無い。

彼は、常に夜叉王丸を『人間の血を持つ下賤な悪魔』と蔑み在らぬ噂を流し、果ては暗殺までしようとした。

自分に無い物を彼は持ち、両親の愛情さえ彼にあるのが許せなかったのだらう。

嫉妬の権化であるレヴィアタンは、こう語った。

「嫉妬は誰にでもあるものだ。自分より優れた者を恨むのは当然。しかし、サタナエルの場合は、嫉妬を超えた憎悪だ」

嫉妬も超えれば憎悪とレヴィアタンは称して、サタナエルが夜叉王

丸を暗殺しようとしたのも領けると、肯定した。

しかし、こう付け加えた。

『憎悪するのは勝手だが、他を巻き込むのは、最悪以外の何でもない。そして、他を巻き込むのを夜叉王丸が一番嫌う』

『もしも自分だけを殺そうとしているなら、夜叉王丸は素直に討たれたかもしれない。しかし、他を巻き込んだから、サタナエルを殺した』

それはサタナエルが悪いし、ただ憎悪ばかりして自分で行動しなかったサタナエルが悪いとレヴィアタンは結論付けた。

逆にレヴィアタンとは反対に好色の権化、アスモデウスはこう結論付けた。

『ある意味、夜叉王丸も悪い。下手に奴を挑発したり、殺されようと見せかけたりしたから、数百年も争う形になった』

『早く、会った瞬間にでも奴の首を切り落としてしまえば、早く決着は着いていた』

アスモデウスは、夜叉王丸が会った瞬間にサタナエルの首を切り落としていれば良いと結論を出した。

サタナエルは、数か月前に夜叉王丸を暗殺しようとして自ら動いたが、難なく取り押さえられて地下牢へと幽閉されて、処罰を待った。

直ぐに皇帝を始めとした王族・宰相・貴族などが地獄会議を開きサ

タナエルの処罰を議論した。

皇帝を始めとした王族は、『決闘』という処罰を下した。

決闘とは文字通り、1対1の戦いを意味し、勝った方が生き残るシンプルな方法ではある。

しかし、この方法は名誉を掛けた争いで行すべきもので、サタナエルには名誉など無いと宰相・貴族が反対した。

『サタナエルは、皇子ではある。しかし、皇子とは名ばかりの愚者である。そんな者に決闘の資格を与えるのは魔界の恥である』

と反論をして逆の処罰を下した。

宰相・貴族が下したのは、『惨死』であった。

この処罰は、魔界の中でも一際に目立つ処罰で重い処罰である。

まず、手足を切り落とし、それを魔獣に喰わせる。

その光景を見せる事で相手の恐怖・絶望などを心の底に焼き付けさせるのだ。

次に市中を引き回して、市民などから石を投げさせ罵倒させる。

位が高い者が市民に誹謗中傷されて、屈辱感を植え付けるのだ。

そして、七つの罪である憤怒・傲慢・嫉妬・怠惰・好色・強欲・暴食を相手に見せつけてやる。

最後に八つ裂きにして煉獄の炎で生きながらにして灰も残さず焼き尽くす。

これほど残酷な刑は無いとまで言わしめられる処刑方法だ。

宰相・貴族は、サタナエルの悪行は、惨死に値すると結論付けて下したのだ。

しかし、皇帝・王族は、こう言い加えた。

『決闘をさせるが、それは、貴族達などの前で行う』

決闘は名誉を掛けた戦いであるため1人だけ見届け人を残し、誰も見る事は禁止されている。

だが、サタナエルの決闘は貴族達に見せつけて、サタナエルへの憎悪を晴らせると同時に見せしめの為でもある。

サタナエルに与した貴族などもいる。

逆に夜叉王丸に与する貴族もいれば、サタナエルに見切り・絶望して夜叉王丸の軍門に下る者もいた。

サタナエルが捕まった今、大抵の貴族は軍門に下ったが、未だにサタナエルに味方する貴族が居るのもまた事実。

理由は様々ではある。

ある貴族は、義を重んじ理屈が夜叉王丸の方にあると、サタナエ

ルを裏切れない。

またある貴族は、人間である夜叉王丸にサタナエルが負ける筈がないという、差別的な見方をする者もいた。

前者と後者を比較すると、サタナエルに義理を重んじて味方するのは、アルバルド公爵家だけだった。

どちらも一歩も引かずに議論を続けたが、サタナエルの父親であり初代皇帝のサタンの一言で決定した。

『あの愚息を魔界に産んだのは、我。ならば、その愚か者を処刑する方法も我が下すのが魔界の道理である』

この一言で宰相・貴族は口を閉じ、サタナエルの処罰は『決闘』という形だけの公開処刑が決定した。

サタナエルは地下牢に閉じ込められてから、毎日のように叫び続けていた。

皇子として生まれた自分が何故、地下牢に閉じ込められているのかという疑問と屈辱で身も心も気が変になりそうになっていた。

「出せ！！私は第一皇子、サタナエルだぞ！！」

分厚い魔術が施された鉄の扉を叩き続けていると、扉が開いた。

「出る。皇帝陛下が、お呼びだ」

兜と鎧、そして、槍と剣で武装した兵士がサタナエルを両方から抑

えるようにして地下牢から出した。

「は、放せ！！私は……………」

「お前は、もう皇子でもなければ、魔界の民でもない。ただの愚かな馬鹿者だ」

兵士は、冷たい声でサタナエルに告げた。

「なんだと！！」

「先ほど、貴様の父君であったサタン様が貴様を破門とした」

「破門だと?!」

「そつだ。これから、貴様は夜叉王丸様と1対1で戦ってもらおう」

「ふ、ふはははははは！！あの人間風情と決闘だと？笑わせるな？

！この私は……………あが！！」

最後まで言う前に、兵士にサタナエルは、殴られた。

「夜叉王丸様は、正式な魔界の皇子。貴様などが侮辱する権利は何処にもない」

口と鼻から血を出して、項垂れるサタナエルを二人の兵士は、無表情で決闘場と言う名の処刑場へと連れて行った。

「.....」

決闘場では、貴族達が席に座りサタナエルの登場を待っていた。

周りは、ローマのコロッセオのように円形闘技場の造りとなっていた。

その下では、漆黒の衣装に外套に身を包んだ男、飛天夜叉王丸が立っていた。

口には煙草を銜えており、後ろには彼の仲間の内3人がいた。

「さて、あの馬鹿はどんな死に方をするのかな？」

一番、大きな体格をしたアジ・ダハーカが口端を上げて笑みを浮かべた。

「処女を失った女みたいに泣き叫ぶんじゃないか？」

隣で夜叉王丸の腹心であるフェンリルが下駄な笑みを浮かべて答えた。

「違うない。あいつならそれくらい泣き叫ぶな」

普段、下駄な話などでは笑わないヨルムンガルドでさえ声を立てて笑っていた。

「おい。あまり笑うな」

夜叉王丸は、煙を口の隙間から吐いて、仲間を叱った。

「豪く不機嫌だな」

ダハーカが夜叉王丸の後姿に語り掛ける。

「・・・あんな餓鬼の為に時間を費やすのが嫌なだけだ」

「だろうな。今の時間ならジャンヌちゃんと茶でも飲んでる頃だし、な」

ダハーカは笑いながら述べた。

淡泊で、これから決闘をやるような言葉ではないように思えるが、彼らから言わせればサタナエルなど道端の小石に過ぎない。

「お前から見れば、あんな餓鬼は小石に過ぎないだろうな。最も俺みたいに歳を取った奴から見れば、あんな餓鬼は小石どころか空気にも見えん」

ダハーカは爬虫類のように縦眼を細めた。

「どうやら来たようだぜ」

「……ああ」

「お前が負けるとは思っていないが、しくじるなよ？」

「誰に向かって言っている？」

「ふつ。それだけ言えるなら十分だ」

ダハーカ達は、後ろへと下がった。

サタナエルは兵士たちに両脇から抑えられる形で現れた。

貴族達は、その姿を見て失笑を浮かべた。

その中には、未だにサタナエルに従っている者もいた。

「味方からも笑われるとは、ほんとあいつは道化師だな」

「道化師でも無い。ただの愚者だ」

ダハーカの呟きを夜叉王丸が訂正した。

煙草は地面に捨て、靴底で消し去っていた。

「言えてるな」

ダハーカは笑った。

夜叉王丸は数歩、前に歩み寄った。

兵士たちは夜叉王丸に一礼してからサタナエルを解放して下がった。

サタナエルは、膝を着きそうになりながら立つと夜叉王丸を、濁り切った汚い眼差しで睨んだ。

「……人間。今日こそ、貴様を打ち倒してやる」

「そういう言葉は俺を殺してから言え」

「ふん。強がりも今の内だ。貴様の屋敷に仕えている天使の娘、名は知らぬが、かなりの美人だそうだな。貴様を倒したら、我が妾として可愛がってやる」

「……禁句を言いやがった。あの馬鹿」

ダハーカが小さく呟いて、フェンリルとヨルムンガルドも最早、勝負は着いたと思った。

夜叉王丸の前で、ジャンヌの悪口、または蔑むような言葉を言えば、言った本人が辿る末路は既に決まっている。

それは、彼に仕える近衛兵隊長、シルヴィア・エターナル・ゾルデイス女侯爵が身を持って実感している。

夜叉王丸は無言でサタナエルを見ていた。

左目の金色の瞳の奥には、激しい憎悪が宿っていた。

彼は、右の眼帯を外して後ろに投げた。

眼帯の下には、紅の瞳が宿っていた。

「それを持っている。今は、それでも抑えられない」

「了解した。しかし、直ぐに殺したりするなよ？ 蠅王とサタンからも長い時間を掛けて殺せと言われているんだろ？」

「知った事か」

無下に言う夜叉王丸にダハーカは、ここまで怒り心頭では止められないな、と半ば諦めのk状態に入った。

二人の間にサタンが割って入った。

「これよりサタナエルと飛天夜叉王丸との決闘を開始する。互いに剣を取れ」

サタナエルは地面に刺さった剣を抜いた。

両刃の剣で頑丈そうな作りだった。

対して夜叉王丸は、腰に差していた伊勢千子村正を抜いた。

「夜叉王丸よ。冷静さを失うな」

「……………」

「そなたが怒りを覚えるのも解かる。しかし、これは、父としての願いだ。決して、変化をするな」

「……努力しましょう」

サタンの真摯の眼差しに夜叉王丸は、出来る限りはすると言い、村正を両手で持ち、正眼に構えた。

対してサタナエルを見るサタンの瞳は、冷酷で、かつて天界に戦いを挑んだ男の眼差しであった。

「我が愚息よ。貴様を今まで生かした事を、我は一生、後悔するぞ」

「はっ。父上は何時もそうだ。私より、人間風情の悪魔を贖する」

「黙れ。貴様は、魔界の恥だ。リリースとリリムも貴様を恥と言っているぞ」

後ろから青いドレスを着たりリスとリリムが姿を見せた。

「サタナエル。貴方をそれなりに息子として可愛がったわよ。けど、ここまで来ると息子とは言え、許せるものじゃないわ。お願いだから、綺麗に死んでね」

母親とは思えない言葉を吐くリリス。

「母上。貴方と言い、父上と言い、どうして私を蔑むのですか？どうして、そのような人間風情の味方をするんですか」

「人間風情と言うけど、少なくとも貴方より飛天さんの方が、悪魔よ。貴方みたいに“欲望に溺れた小僧”と一緒にしないで」

「母上の言う通りです。貴方は、“溺れた者”でしかない」

リリムが止めとばかりに告げた。

「……夜叉王丸を殺したら、貴方達を手始めに殺させて頂きます。そして、蠅王を殺し私が新たな魔界の王になる」

サタナエルは、もはや尋常ではない気を出して、家族に向かって言った。

「おい。お喋りはその辺にしろ。こっちは、早く貴様の首を切り落として帰りたいんだ」

夜叉王丸が、急かした。

サタナエルは、夜叉王丸を睨み一気に走り剣を振り上げた。

地下牢に居た時とは、まったく違う。

「・・・・・・・・・・」

剣を避ける夜叉王丸は間を取り、剣を構え直した。

「死ね。人間！！」

サタナエルは攻撃を再開した。

夜叉王丸は剣を交わしながら、サタナエルを見続けた。

金と紅の瞳は、じっとサタナエルを見ている。

「どうした？何故、攻撃しない」

攻撃を繰り返しながらサタナエルは、夜叉王丸に問い掛けた。

「・・・・・・・・・・」

対して夜叉王丸は無言だった。

しかし、次の瞬間、サタナエルに飛び掛かると、彼の反対方向に移動していた。

血が付着していない村正の刃を一度、払うと静かに鞘に収めた。

「・・・勝負、あつたな」

ダハーカが耳まで口を裂けて笑った。

次の瞬間、サタナエルは、体中から血を流した。

「がっ！！！」

止めなく溢れる血は、大地を赤く染め、吸った。

貴族達は、何が起きたのか分からないと言う顔だった。

しかし、ダハーカ達は分かっていた。

サタナエルの攻撃を交わしながら、夜叉王丸は斬っていたのだ。

常人には分からない速さで、的確に相手の急所を……………

「な、何が起きた……………?」

サタナエルは剣を杖にしながら夜叉王丸の方を見た。

「自分に起きた事も分からんか。愚か者が」

夜叉王丸は振り返った。

その顔は、とても残酷な顔に歪んでいた。

「ひ、ひい！！！」

サタナエルは思わず悲鳴を上げた。

「どうした？さっきまでの威勢は？俺を殺した後、サタン様とベル

ゼブルを殺して魔界の王に君臨するんじゃないやなかったのか？」

夜叉王丸はサタナエルに歩み寄った。

「俺を殺して、ジャンヌを妾にしようとしているらしいが、そんな事は俺が許さん」

貴族達には聞こえないように喋った。

「あいつは俺の物だ。身体も魂も。全てな。あいつを俺から持ち去るなら、あいつを殺すだけだ」

だが、それは俺が望んでいる事ではない、と夜叉王丸は付け足した。

ダハーカは、それを聞いてまだ理性は失っていないかと安堵した。

「よ、寄るな。化け物!!」

「俺が化け物なら、お前は何だ？人間か？悪魔か？天使か？それとも神か？」

「……………それとも、ただの愚者か？」

「よ、寄るな!!だ、誰か助けてくれ!!」

サタナエルの悲鳴に近い懇願に誰も動こうとはしなかった。

「さあ、掛つて来い。まだ殺さない。もっと痛めつけてから、たっぷり殺してやる」

バキバキ、と手の節を降り、夜叉王丸は言った。

「ひい！！だ、誰か、助けてくれ！！」

サタナエルの言葉は、それが最後だった。

次の瞬間には、夜叉王丸の村正が一閃していた。

首が胴から離れ、胴は足から離れた。

首は高く宙を舞った。

胴と足は、地面に倒れた。

宙を舞った首は、控えていた魔獣の口の中に入り、バキバキバキと音を立てて喰われた。

「・・・ふんっ。もう終わりか。情けない。酒の肴にもならんな」

夜叉王丸は、魔獣を見ると、こちらに来いと言った。

魔獣は直ぐに走って来た。

「この肉を喰え。血は、全て吸え。一滴も一欠片も残すな。全て喰って吸え」

魔獣は夜叉王丸に頭を垂れた。

夜叉王丸は魔獣の頭を優しく撫でた。

その姿は、魔界の者として、次世代の王として相応しい光景で、貴族達は、早くも新しい王の誕生だと囁いた。

サタン達は、サタナエルの遺体が無表情に見つめていた。

「最後まで愚かな死に様だな」

サタンは冷たく呟いた。

「仕方ないわよ。生れた時から、愚か者のストーリーが出来上がっていたんだから」

「ストーリーは、自分で描く物。それをサタナエルは、しなかった。だから、当然の結末でしかないですね」

リリスとリリムは、人生を物語に例え、自分で作り上げる筈の人生を、ただ最初から作られていた物語に進んだサタナエルの死は、当然だと言った。

サタンが声を張り上げて、言った。

「これで決闘は終わった。飛天夜叉王丸は、勝利しサタナエルは死んだ。これにて決闘を終える。そして以後、夜叉王丸に敵対する者は、魔界の敵である！！」

貴族だるうが、何人だるうが、夜叉王丸に矢を射るという事は地獄帝国に反旗を翻すという事。

それをするなら一族郎党、牛馬なども問わず皆殺しにするとサタンは告げた。

サタナエルを応援していた貴族達は、サタンの声に恐れ戦き、夜叉王丸の残酷無比の態度に悲鳴を上げて、我先にと逃げた。

「・・・ネルガル」

サタンが小さく秘密警察のネルガルを呼んだ。

「・・・はっ」

「逃げた奴らを、皆殺しにしる。女子供問わず八つ裂きにして灰も残さず焼け。金品も全て、だ」

残さず燃やせと命令を下すサタン。

「畏まりました」

既にベルゼブルの蠅騎士団が動いているとネルガルは、告げて姿を消した。

夜叉王丸は血がこびり付いた右手を見た。

「・・・汚ねえ色だ」

本物の血は、赤く、朱く、もっと紅く、もっともっと深く、そして真に紅い。

しかし、この血は、汚い色だ。

「フェンリル」

夜叉王丸は、自身に絶対的に忠誠を誓う狼を呼んだ。

「この手を舐めろ」

フェンリルは無言で右手を舐めた。

愛おしく、まるで恋人を抱き締めるかのように優しく舐めた。

「眼帯」

夜叉王丸はダハーカに眼帯を寄こせと言った。

ダハーカは眼帯を持って歩み寄った。

「理性は残っているか？」

「辛うじて、な」

「そうか。正直、失ったかと思ったぜ」

まあ、それはそれで楽しい惨劇げきの開幕になると言った。

「当てられたか？」

「かもな。こいつも、そのようだし」

右手を無心に舐めるフェンリルを見下すダハーカ。

「こんな、所をジャンヌには見られたくないな」

夜叉王丸は小さく息を吐いた。

「仮に見られても、あの方を手放す気はないでしょうに」

何時の間にかヨルムンガルドが眼帯を取り上げて、夜叉王丸の後ろに周り眼帯を結んでいた。

「……あいつは、俺の物だ」

「ああ。お前の物だ」

あの娘もそれを望んでいる、とダハーカは心の中で呟いた。

ここにサタナエルの決闘と言う名の処刑は行われた。

その日の内にサタナエルに与した貴族達は忽然と姿を消した。

一族郎党、牛馬や屋敷、金品なども残さず、だ。

こうして夜叉王丸は、魔界での地位を不動の物にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372f/>

悪魔な男爵 第一部

2010年12月4日04時27分発行